
らき☆すた～公道最速伝説～

ファルコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき☆すた〜公道最速伝説〜

【Nコード】

N0456T

【作者名】

ファルコン

【あらすじ】

今作はらき☆すたと頭文字Dネタを組み合わせた二次創作作品で、初めて僕が執筆した小説となります。

初めてですので戸惑った部分もあり、しかも文章力もあまり無くて読みにくいと思いますが、ぜひ読んでみてください。

あと、作者である僕自身は、チューニングの事などが勉強不足です：なので「車の馬力が低すぎるんじゃないかね？」とか思ってる方には非常に申し訳ない気持ちでいっぱいです：（泣）

勉強を重ねて、少しずつ改善していくので暖かく見守っていただけ

れば幸いです…………。

それと、注意書きですが、実際の土地名などは存在するかもしれませんが（峠や首都高の所在地は物語に合わせていますので現実とは全く異なる事があります）、実際の公道でこの小説で描かれているような暴走行為は絶対にしないで下さい。

（10月17日 追記）あと、序盤では普通ではあり得ないイベントが起こりすぎていたりするという事もあり、本当につまらなく感じるかも知れませんがご了承下さい（汗）

プロローグ（前書き）

この話では、こなたが走り屋になる前からの話で、次の回に繋げるための、いわゆるプロローグ的な感じとなっています。

プロローグ

これは、ある一人の少女を中心に繰り広げられた、公道での「最速」を巡った争いである…。

時は2015年、ある少女が埼玉に居た。この年には、F1やSuperGTなどのモータースポーツが賑わいを見せていた。そして、夜の公道でも、同じようにブームになっていたものがある。それは……「公道最速」の称号を手にするための争い、それである。

「公道最速」とは文字通り、公道での最速、つまりは各地の峠や高速道などで連戦連勝し、勝ち続けていく事でそれを名乗る事が出来る。その争いに、最初は興味を示して無かった少女が…泉こなただ。彼女は大学生で、一応車の免許証は持っているのだが、肝心の車を所有していない。そもそも車を買う余裕が無いそうだ。

「彼女は大学生だと言った。だが、とある会社の事務員のアルバイトをしている。一昔前までは考えられなかったが、現在は労働関係の法律、方針が変わり、事務員のアルバイトも普通となっている。アルバイトなので給料は安く、万が一車を買えたとしても、エアロパーツなどの車の部品までは買えないようだ。

…と、こなたは誰かと会話をしている…。

「…ねえ、やっぱ私走り屋としてデビューしないといけないの?」

「ああ、そうだ。お父さんはこなたには走り屋としてあちこち走ってきてもらいたいんだ。こなた、こういうの好きだったろ?」

「そ、そりゃそーだけど……リアルになるとけっこうキツイかなー

……って思ってきたけど……。」

こなたはどうするか迷っていた。心の中では、走り屋の世界は面白そうだと思っているのだろう。そうじろうがもう一度こなたに聞く。

「…どうなんだ？ こなた……。」

「……うん、かがみんももうその世界入り込んでるし、私もやっていくよ。」

「そうか…なら、お父さんが昔使ってた、トヨタの『スプリンタートレノAE86』っていう車をあげるからガレージまでついておいで。」

そういうとそうじろうはハチロクことトレノAE86をしまっているガレージへと向かう。こなたもついていく。そして……。

「…おお、これがお父さんが言ってたある意味伝説の車ってやつだね？」

「で、伝説なんて…まあ、俺は大半はこいつと一緒に他の走り屋に勝っていったからなー。古い車のように見えて、結構速いんだぞ？」

「そ、そうなんだ…で、これに今度は私が乗るわけだね。」

「ああ、そうだよ。…不安そうにしているなら、大丈夫さ。このハチロクは絶対すぐにこなたの力になってくれる。心配するな。」

そうじろうはこなたにそう言い聞かせる。こなたは頷き、何とか不安そうな気持ちを静める。……実はこの時、こなたは気付いてなかったが、このハチロクには、ある『秘密』があるのだ。その秘密とは……。

こなたはそれに気付かないまま、車に乗り込む。早速どこかの峠で走ってくるようだ。

「…じゃ、お父さん、行ってくるね。」

「ああ、行ってらっしゃい。」

ハチロクに乗り込んだあなたは颯爽と走っていった。その姿を見た
そうじろは……。

「……あなた、そのハチロクを……あなたが持っているような天使の
『白い翼』を持つハチロクの力をどう扱うかは、全部お前次第だよ
……。」

ハチロクに生えた白い翼……それは、ハチロクが持つ真の力である
とも言えるだろう。

このようにして、あなたは走り屋の世界へと吸い込まれたのであつ
た……。今ここに、あなたを取り巻く『公道最速伝説』が始まった
瞬間であつた…。

プロローグ（後書き）

次の話では、早速いろんなキャラが登場していきます。あくまでこの回はプロローグですので目を通していただかなくても、ある程度は理解出来ると思うので軽く目を通すぐらいの気持ちで読んでおいってください。

ACT. 1 紅い悪魔、現る（前書き）

いよいよこの回からこなた達の『公道最速伝説』が始まっていきます。

文章力がまだまだですがこれから頑張っていくのでぜひ読んでみてください。

ちなみに後書きは書きませんのでそういう事をお願いします。

ACT. 1 紅い悪魔、現る

埼玉、湾岸線を走る一台の黒いGT-Rが居た。
その黒いGT-Rのドライバーは……。

「…今日は目立った獲物も居ないし、そろそろ落ちようかしら？」

この口調で話す奴といえば…終かがみだ。この日、かがみは埼玉湾岸線を何となくの気分で走っていた。車種を詳しく言えば、GT-R スペックV(R34)・99だ。馬力は450。彼女は、言わずと知れた湾岸線の女王。彼女に掛かれれば勝てる者など居なかった。居なかったはずだったが―。

―だが、彼女を軽く葬り去った、悪魔の様な者が現れる。後に、『
紅い悪魔』と呼ばれるランエボを扱う者が…。

かがみは、湾岸線を降りようと出口を目指す。しかし、そんなかがみの後ろから『紅い悪魔』は現れた…。

「…ん？何かすごいスピードで来るけど…ま、軽く相手してやりますか。」

かがみはアクセルを全開にし、GT-Rを走らせる。最初は順調かに思われた。だが…。

「ちょ…何か本当に速いわね！ここは湾岸の女王として抜かれる訳にはいかないわ！！」

かがみは更にスピードを上げる。しかし、相手のランエボもかがみのG T-Rにぴったりとくっついてくる。

「あーもう！しつこいわね！！相手は一体誰なの！？」

かがみは多少の焦りを感じていたが、いつもの状態を何とか維持していた。かがみの後ろにくっついてくるランエボのドライバーは……。

「…ふん、こんな程度の走りで女王を名乗れるなんて、安いものだ。こんなんでは私のランエボに勝てる訳が無い……」

その口調から、女性である事は確かだ。…実は、泉こなたの従姉妹に当たる『成美ゆい』だ。彼女は普段は落ち着いているが、車のハンドルを握ると、目付きが変わり、性格も変わる。

また、彼女は全国の走り屋から『紅い悪魔』と恐れられ、彼女に闘いを挑む者は殆ど見られない。いるとしても、それは無知な者のみだ。

彼女のランエボには、独特のチューニングが施されており、全てが究極なる仕様にされていた。馬力も、通常280だが、彼女のランエボの馬力は恐ろしく、550馬力にもなる怪物だった。因みに、彼女の乗っているものはランエボ？だ。

「くっ…抜かれる訳にはいかないわよ…！」

かがみはアクセルを全開にし、限界の走りを見せた。

だが、次の瞬間、悪魔は始動する……。

その悪魔は、かがみが出した210km/hを超える、250km

／＼のスピードをたたき出す。通常のランエボならばならありえないスピードだ。そのスピードでかがみを意図も簡単に抜き去った。その瞬間、かがみの表情は青ざめた。

「嘘……私が……湾岸の女王の私が抜かれた……？」

かがみは口を開けてアクセルから足を離す。かがみのGTRは徐々にスピードを失い、やがて止まる。相当ショックが大きかったみたいだ…。

かがみは携帯を取り出し、泉こなたに電話をかける…。

「…あ、こなた……？…今からちょっとあんたのどこに行っても良いかしら？」

『良いけど……かがみ元気無いね。どしたの？』

「いや……ちょっとね……とにかく、今から行くわね…。」

かがみは電話を切り、再びGTRを走らせる。その走りは、悲しみに包まれている様であった…。

一方、こなたもまた、名の知れない峠で車を走らせていた。

「んー、やっぱりハチロクじゃなかなか速く走れないなあー。このハチロクには何か不思議なものを感じるんだけど…。」

こなたの乗っている車は、湾岸線で走らせるにはあまりにも場違いな(?)車、トヨタのトレノE86だ。この車は『ハチロク』の愛

称で親しまれ、小さいながらも高性能な走りを見せる事から、人気が高い。しかしそれは、ドライバーによってであるが…。

「…コーナリングのスピードはまあまあだけど…。それにしてもかがみ、何か悲しそうにしてたけど一体何があったんだろ…？」

こなたはかがみの事を考えつつもハチロクをひたすらに走らせる。
…と、湾岸の女王の黒いGT-Rがこなたの元にやって来る。

「あ、かがみだ…えいっ!!」

こなたはハンドルを勢いよく切り、90度ターンさせて車を止める。そして、車から降りた。

「かがみ！今日はどうだった？やっぱ湾岸の女王っていうぐらいだから奴らを軽く葬り去ってきた？」

「こなた…いや、その逆よ…。一台のランエボが来て…簡単に抜かれてしまったわ…。」

かがみはかなり暗い声でこなたに話す。こなたはかがみの表情を見て、何とかしないといけないと思ったのか、励ましの言葉を掛ける。

「かがみ…ま、まあ今回たまたま調子悪かったとかじゃないの？」

「…そうだと良いんだけど…でもあのランエボ、何か私のGT-Rとかなり違う、凄いチューニングがされていた感じがあったのよ…。」

「

「凄いチューニング………確かランエボはかがみのGTRと同じ4WDだよな？」

「そうだけど、それが何だっていうのよ？」

かがみはこなたに聞く。こなたからすれば、言葉が思い浮かばずにとっさに出た言葉だが…。

「…いや、聞いたただだよ。で、今日は何の用でここに？」

「…あんた、確かまだ湾岸線走った事無かったわよね？」

「う、うん…。まさかがみ、私を誘いに来たとか…そんな事無いよねえ？」

こなたは半信半疑で聞いた。そのまさかだった。かがみはこなたを湾岸線で走るように誘いに来たのだ。

「そのまさかよ…あんたのハチロク、湾岸デビューさせても良いんじゃないかしら？」

「良いの!?! ホントに!?!？」

こなたはかがみに迫って、かなり驚いた様子でかがみに聞く。

「本当だけど…とりあえず顔近いから止めなさいよ。で、ルールとして私の後ろから付いてきてちょうだいね。」

「うん！いやあ、良かったね、ハチロク！やっとなり線走れるよ♪」

「全く…本当大人になってもあまり変わらないわね。ま、こなたらしくて良いけど。」

かがみは多少呆れた顔をしながらも、GTRに乗り込む。こなたもまた、ハチロクに乗り、エンジンを二回ほど吹かしてかがみに付いて行った…。

しばらくして、なり線に乗り込んだ二人。先程の『紅い悪魔』はどこかに行ったようだ。

「あの赤いランエボ…紅い悪魔、とでも言っておこうかしら。」

かがみは落ち着きを取り戻して運転していたが、こなたは…。

「ギター！！遂にハチロクでなり線デビューだー！！！」

こなたは子供の如く、しっかりと運転しつつもはしゃいでいた。かがみは『全く…こんなのが走り屋なんて…』と思いながらも運転を続けた。

…と、そこに一台の白いFDが現れる。かがみは誰だかすぐに分かったみたいだ。

「お、つかさもようやくなりデビューってどこかしらね。」

白いFDのドライバーは柊つかさ。柊かがみの双子の妹だ。彼女もまた、こなたとほぼ同じで実力は低い。しかし、車を愛する気持ちはこなたと互角だとか。ちなみに、FDとは、マツダのRX-7の名称だ。

「…あ、お姉ちゃんもここ走ってたんだ〜！」

「そうよ。うるさい誰かさんを連れてね。」

「誰かさんって…ハチロクに乗ってるこなちゃんだね？」

「そうなの。あいつったら、湾岸デビュー出来たからって大はしゃぎしてるわ。…じゃ、ちよつと無線切るわね。」

かがみは無線を切った。どうやらこの時は無線を使って会話をしていたようだ。

走り出す事1時間…三人は十分満足したのか、湾岸線を降りる。

そして、しばらくして、かがみ達はそれぞれの車から降りた。

「ふう…やっぱりかがみの走りは全然違うね。私達じゃ歯が立たないよ〜。」

「本当、こなちゃんの言う通りだよ。お姉ちゃんが湾岸の女王って言われるのも仕方がないかな〜。」

「つかさ…それはもう過去の話になってしまったわ……。」

かがみは再び暗い表情を見せる。やはりあの『紅い悪魔』に負けた事が相当ショックなのか…。

つかさはこの事を知らなかった為、疑問に満ちた顔をしていた。そこに、こなたが耳打ちで話す。

「お姉ちゃん…そうだったんだね……。」

「つかさにまで心配かけて…ごめんね。」

「…ううん、良いよ。いくら運転が上手い人でも調子が悪かったらこういう事もあるんだから。」

「つかさ…ありがとう。さ、今日はもう帰りましょ。」

かがみはG T—Rに乗り込み、つかさとこなたもそれぞれの車に乗り込んで帰っていった…。

—それから後の事だった…。こなたはいつも通り余裕の表情で自宅へと帰る。が、後ろから何かが近付いて来る。

「ん…？何かが走ってくる…。ま、相手がその気ならちょっと実力を見させてもらいますよ」と…。」

こなたは姿勢を変え、走る体勢に入った。ハチロクといえど、高性能だ。果たして上手く振り切る事は出来るか？

―しかし、振り切る事など出来ない。何故なら相手はあの『紅い悪魔』、こなたの従姉妹の成美ゆいだからだ。

「ふん、相手はハチロク：軽く抜き去ってやろうか……。」

「うわっ！！何かすごく速い……まあ、私はそんなに上手くも無いからすぐに抜かれるだろうけど……。」

こなたは半分諦めながらも走り続ける。だが、ゆいが手を抜いているのか、それともそうじゃないのかは分からないが、意外にもハチロクとランエボは対等に渡り合っていた。確実に手を抜いているのだろうか……。

「……まあ、お遊びはこれくらいにして本気を出すか……。」

「あれ……？意外に良い勝負になってる……？……イけるかもしれない……！」

こなたは再び姿勢を変え、走る体勢になる。こなたのハチロクの良い点は、一見何とも無い平凡な車のように見えて、実は速いという点。コーナーリング時のスピード、勾配でのスピードの伸びなど……実際にランエボやGTRなどと同等、またはそれ以上の走りを見せる。更に、ハチロクの足回りもチューニングされていて、なかなか良い

走りを見せてくれるのだ。

…ただ一つ、地形が平地となればスピードが落ちてくるという、悪い点を持っている。だから、こなたがハチロクで走る時は基本、勾配のある峠を走る事が多いのだ。

…今こなたと紅い悪魔が走っている場所は名も知れない峠だと言った。しかし、そこは後に明らかになる『妙義』だった。妙義は峠の中ではなかなか面白いコースの一つだ。こなたからすれば地元の峠の『秋名』ほどではないが毎回この妙義を走っている。そのせいかあまり難しく感じていないらしい。しかしこなたは地元の峠の『秋名』をホームコースとしている。

…と、ハチロクとランエボの距離は程よい状態に保たれていた。だが、やはり紅い悪魔は動き出す…。紅い悪魔は何故かアウト側に出た。なるほど、アウト側から追い越すつもりだろうか。

「アウト側に出たって事は…大体予想付くね。そうはさせないよ！」

こなたも追い越させまいとしてハチロクをアウト側に出す。その時だった。ランエボはハチロクがアウト側に出たのを待っていたかのように勢いよくイン側へと戻る。そして、カーブに差し掛かる時、片方のタイヤを溝に掛け高速のまま一気に抜き去った。『溝落とし』と言われるテクニクだ。

そのテクニクに、こなたは絶句する。

「うわあ…あんなの使われたら無理だよ……。」

「ふっ…簡単に流されるなんて…やはりハチロクだな。」

ゆいは勝ち誇った表情でランエボを90度ターンさせて車を止める。こなたもそれに続き車を止めた。それにしても、妙義でも溝落としか出来るとは…。

そして、両者とも車から降りた。その時のランエボのドライバーを見たこなたの表情は驚いた表情だった…。

「ふう…なかなかやるね！…って、あれ！？…もしかして、ゆい姉さん！！？」

「あ…こなただったんだ…。」

「…もしかして、紅い悪魔って、ゆい姉さんの事…？」

こなたは半信半疑で聞いた。ゆいはニヤツとして答える。その表情の中に恐怖が見え隠れするようだが…。

「そーだよ！私がその紅い悪魔っていうやつだよー！！」

「そ、そうなんだ…ってかゆい姉さん、その表情怖いよ…。」

こなたは従姉妹という関係ながら、怯えていた。無理も無い、あの湾岸の女王、かがみを軽く破った恐るべき走り屋だからだ…。

「いや、しかしまさかこなただったとはね。全然分からなかったよ。」

「あはは…確かに私はあまり上手くないからね。…つと、もう時間だから帰っても良い？」

「うん、疲れてるだろうし、もう帰ろっか。」

こなたとゆいはそれぞれの車に乗り込み、夜の町から消えていった…。帰っている時のこなたはある思いに抱かれていた。その思いとは……。

「ゆい姉さん、悪いけど……走り屋として負けたく無いよ。かがみの仇も取りたいし……いつか勝負だ……！」

こなたは紅い悪魔と勝負する事を決意した。対する紅い悪魔のゆいは……。

「…こなた、私と勝負する事を決めただけど…この私に勝てるはずなんか無い…かがみちゃんの仇を取る、なんて簡単な理由で勝負を挑まないでほしいな……。」

二人は互いにこんな事を思いながらそれぞれの家へと帰っていく…。

そして、翌日…こなたは遅くまで寝ていた。先日の紅い悪魔との走りのせいだろうか…。

「ん……？ふわあああ…もうこんな時間かあ………まだ眠いなあ………。」

こなたは眠い目を擦りながら起きる。そこにちょうどこなたの父、そうじろうも起きた。親子揃って寝坊とは…泉家らしいが…。

「あ…お父さん…おはよー……。」

「おー、こなた、おはよう。昨日はゆいちゃんと走り合ってたんだって？こなたに悪い事言うつもりは無いけどお父さんでも苦労するのに、今のこなたじゃ到底無理だぞ。」

「…やっぱり、私がハチロクに乗り続けてるからかな…？」

こなたは暗い表情で答える。しかし、そうじろうはそんな事は全く無いと言わんばかりの表情でこなたに言葉を掛けた。

「ははは…そんな事は無いぞ。」

「…じゃあ一体何を根拠にそんな事言ってるの…？」

「…こなた、ハチロクには秘められた力があるんだ。他の車には無い、秘められた力がね。その力にこなたが目覚めれば、勝てるかもしれないぞ？」

「ハチロクに秘められた力…ふう、お父さん！今から秋名で走ろうよ！」

「良いぞ。よし！ちよこつと本気出して走るぞー！」

こなたとそうじろうはそれぞれの車に乗り込み、エンジンを吹かし秋名へと向かった。

因みに、そうじろうの乗っている車はスバルの青いインプレッサだ。

馬力は350、足回りもなかなかのチューニングが施されていて今はこなたのハチロクより一、二段階速い。

湾岸線でも走った事があるらしく、地元・湾岸線共にある程度名が知れている。

そうじろうは車に乗り込むとゆい程では無いが性格と表情が変わり、走行中はタバコでも吸いながら余裕があれば片手でハンドル操作をするという、なかなかの強者だ。

そして秋名にて、走り出しは順調だった。そうじろうはこなたの後ろから走る。後ろからこなたの走りを見るつもりだろう。

「よし、じゃあお父さんはこなたの後ろから走りを見させてもらうぞ。」

「良いよ、私も走り出した頃と比べて大分良くなったし。」

こなたは余裕の表情で走り出す。なかなか順調な走りだったように見えた。しかし、そうじろうの思いは…。

「（…こなた、そんな走りで勝てる訳無いじゃないか…。ラインがバラバラだ…まあ前に比べたらマシだが…）」

そうじろうは見抜いていた。やはり今のこなたの状態ではゆいに勝つ事など不可能だと…。

そんな思いを抱きつつもこなたの後ろから走り続けた。そして、走る事30分…ようやく一通り走り終わり、二人は車から降りる。そ

の時のこなたは満足な表情をしていた。

「はあく…満足満足っと。お父さん、どうだった？」

「…こなた、ちょっと厳しい事言うけど…今の走りではやっぱりゆいちゃんに勝つ事なんか出来やしないぞ。まずラインがバラバラだ。それに、多少だったけどジグザグ運転は避けた方が良いぞ。」

「…やっぱり…自分の走りじゃないと思ったら…そうだったんだね…。」

こなたは少し淋しげな表情を浮かべていたが、一度ため息をついて落ち着かせる。

「こなた…まあ、これから走り込めば良くなるはずだから、あまり焦っちゃダメだぞ。」

「…うん。今はこんなでも、絶対勝ってみせるよ。」

「こなた…その思い、無駄にするなよ。…っと、俺は赤城で相手が待ってるから先に行くな。」

そうじろうは車に乗り込み、赤城という場所へと向かった。その姿をこなたは羨ましそうに眺めていた。

一方、ゆいはというと…。

「…どこもかしこも弱い人ばかり…つまらないからもう引き上げよっと。」

ゆいは紅い悪魔の称号に名乗って凄い走りを見せていた。流石は紅い悪魔、と言ったところだろうか。

相手は黄色のスープラ。そのドライバーは…。

「…いや、しかしえらい目に遭うたな。相手がまさかあの赤いラシエボだとはなく。正直ヒビったわ。」

この口調は…間違いない、『黒井ななこ』だ。彼女もそうじろうと同じような実力で、気分屋。いつも湾岸線などを主に走っており、かがみともバトルをした事はあるらしいが、やはり湾岸の女王には敵わないのか、いつも負けている。

そんな彼女が紅い悪魔に掛かってしまい、また負けてしまった。

このように紅い悪魔は全国中で走り、ライバルを簡単に葬り去っている。その紅い悪魔にこなたやかがみが勝てる日はいつなのか？突如としてこなた達の前に現れた紅い悪魔は余裕の表情で走り続ける…。

ACT. 2 ハチロクV. S. ハチゴ―（前書き）

この回では、二回の勝負が展開されます。一つはかがみのR34とつかさのRX-7（FD3S）、そしてもう一つが今回の話のタイトルになっているハチロクとハチゴ―、この二つの勝負が一度に読めます。

この作品は展開が早く、次の話でも似たような形式になるかもしれませんがご了承ください。

ACT・2 ハチロクV・S・ハチゴ―

そうじろが去った後、こなたはしばらくぼーっとしていた。走り屋の世界に飛び込んでからいろんな事を考え込んでいるのだろう。それに、紅い悪魔の事も…。

「…絶対勝つとは言ったけど、どうしよっかなあ…。」

こなたは何から始めれば良いのか分からないでいた。やるべき事があるとすれば、まずはハチロクのチューニングからだろう。

こなたはこうだったが、かがみはある人物との勝負をするためGT―Rの座席に座り込む。相手は白いRX―7（FD）に乗る、つかさだ。

「つかさ…真剣勝負で行くわよ。あんたの姉だからって手加減はしないからね。」

「うん！勝てるかわからないけど、自分なりの走り方で行くね♪」
「…ええ、分かった、あんたなりの走りだね…。それじゃ、始めるから車に乗って。」

かがみとつかさはそれぞれの車に乗り込む。そして、かがみは先につかさから行くように合図を出し、つかさはそれに従って車に乗り込み、定位置に止めてエンジンを二回程度吹かした。今から両者が走る場所は「妙義」だ。

かがみは窓越しにつかさに事を伝える。

「それじゃ、あんたが先に行つて。私は後ろから行くから。」

「うん、じゃあそろそろ走るよ、私のFD……。」

つかさはアクセルを踏んで更にエンジンを何回か吹かし、レバーを押してパーキング状態を解除、ギアチェンジで1速にし、いよいよレースが始まろうとしていた。つかさは一息吐き、柊姉妹による妙義での対決が始まった。

「つかさ…どれほど成長したか見せてもらおうわよ…！」

かがみはつかさの白いFDの真後ろに付き、しばらくつかさの走りを見守る事に。なるほど、流石は湾岸の女王という訳だ。先頭になったつかさは…。

「いつもの感じで行けば大丈夫だよ、きっと…。」

つかさは意外にも落ち着いて運転していた。つかさとしてはなかなかの走り出しだ。このまま振り切れることは出来るだろうか？

つかさの順調な走り出しを見ていたかがみは……。

「つかさの奴、走り出しは順調ね。そのペースで走っていけば湾岸線でも十分戦っていける…はずだわ。」

かがみはつかさの走りを感じて、自分も走り続ける。かがみの言う通り、つかさの走りは走り出した頃と比べ格段に良くなっていた。

コーナーリング時の程よいハンドル操作、ストレートでのスピードの伸び：その他もろもろ、かがみと殆ど同じような走りをしていた。

「：ただ、問題は走り屋としての経験がまだ浅い事だけだわ。窮地に追い込まれたら焦って車の動きがおかしくなるし：。」

かがみはつかさの弱点を既に知っていた。つかさはプレッシャーをかけられると、焦ってハンドル操作を誤ってしまう。それが原因で、クラッシュしやすくなって、毎回勝てないでいるのだ。そこさえ克服すれば：。

「ここあまり走ったこと無いから怖いよ（泣）」

つかさは早速不安になりつつもしつかりと走り続ける。そして、かがみが後ろ、先頭がつかさの状態でバトルは中盤へと差し掛かる。

「：じゃ、少し本気で行かせてもらうわよ、つかさ！私に勝てるかどうか、やってみなさい：！！」

かがみはアクセルを少しずつ強く踏み込み、加速させていく。それに応じてかがみのGTRは排気筒から火花を散らし、スピードが上がっていった。

「お姉ちゃんの車が速くなってる：私も負けたくない：行くよ、私のFD！」

つかさも負けじとアクセルを踏み込み、スピードを出す。両者とも一歩も譲らない走りだった。今は、だが：。

「つかさの奴、本当にやるようになったわね。だけど、相手はこの

私、湾岸の女王。そう簡単に勝たせる訳にはいかないわよ…！」

かがみは更にアクセルを踏み込み、GTRを走らせる。その速さは尋常ではなかった。流石は450馬力もあるGTRと言ったところか。

つかさの白いFDの馬力は330。かがみのGTRとは馬力の差が大きく、しかもかがみのGTRには走りやすいチューニングが施されていて、実際には450馬力ではないような走りを見せる。一方、つかさのFDは、ところどころチューニングされていない箇所があり普通の車より一、二段階早い程度の走りしか出来てない。つかさは未だに機械音痴な性格が高校生の時から続いているため、仕方ないと思うが…。

…と、ここで急カーブに差し掛かる。かがみは余裕の表情で曲がり切るが…。

「…つかさ、教えてあげるわ。この勝負が今のあんたにとっていかに勝ち目が無いものかを…。」

かがみは静かにそう言うと、勢いよくギアチェンジをし、急カーブに突っ込んでいく。当然つかさは不思議に思った。

「お姉ちゃん…一体何を…？このまま突っ込んだら壁に激突しちゃうよ…。」

かがみは自殺行為に走るつもりなのか…？いや、そうでは無い。実は彼女は『溝落とし』と呼ばれるテクニックを使える走り屋の一人なのだ。『溝落とし』とは、名のとおり、タイヤを溝に引っ掛け（言い換えるとタイヤを溝に落とす）、高速のままコーナーを走り切るテクニクである。かがみはそれを使い、

急カーブを一気に高速で駆け抜けるつもりなのだ。

「…つかさ、ごめんけど…これが走り屋としての運命なの…本気を
出させてもらおうわ。」

「お姉ちゃん…もしかしてブレーキがダメになったの…?」

「…かがみ流、勝利の方程式を見せてあげるわ。付いて来れるもの
なら付いて来なさい!!」

かがみの目つきは変わり、一気につかさと並ぶ。そして、溝にタイ
ヤを落とし、つかさを軽々と抜き去る。タイヤの滑る音が鳴り響い
てやまなかった。そしてつかさはその技に驚いていた。

「…? 一体何がどうなってるんだろう…?」

かがみはつかさを余裕で抜き去った。そしてかがみは溝落としの次
の二つ目に差し掛かる。

「…二つ目、ここは勾配の無い、平地だから、ここからは本物のパ
ワーが必要な。今のつかさのFDじゃあなたのハチロクほどじゃ
無いけど私を抜くのは無理だわ!」

そう言うとかがみはアクセルを強く踏み込み、つかさと距離を離し
ていこうとした。だが、つかさも意外と離されずに付いて来ていた。

「…付いて来れてるみたいだけど、次で終わりだわ。そんな簡単に

勝たせはしないんだから!!」

「お姉ちゃん…私も本気を出すよ!」

つかさは覚醒したかのような表情で、アクセルを踏み込んだ。

その速さは、かがみと同じぐらいの速さだった。そしてかがみはそんなつかさの様子を心配していた。

「つかさ…無理にスピード出したらFDがダメになるって何回も言ってるのに…全く…。」

「大丈夫…絶対大丈夫だよ…!」

つかさは車内で自分自身に大丈夫だと言い聞かせ、走り続ける。だが、かがみの心配は的中する。

つかさのFDのボンネットから煙が出る。

「あれ…!?何か白い煙が…。」

「…勝負付いたわね。」

かがみは容赦無く走り続けた。一方つかさはのFDは、徐々に煙は大きくなり、やがて小さい爆発音が出る。その衝撃に絶えず車を止める。

「ふえー!一体何がどうなってるの(泣)」

つかさはしばらく何が何だか分からずに泣いていた。かがみは車をターンさせて停止し、車から降りる。つかさも泣きながらゆっくり車から降りてきた。

「…つかさ、今回もダメだったわね。」

「お姉ちゃん…やっぱり私なんかじゃ…無理なのかな…？」

つかさは涙目でかがみに話し掛ける。かがみは優しくも厳しく言った。

「つかさ…あんたは練習すれば速くなれるわよ。ただ、今のFDじやあんなスピード出したらエンジンがダメになるって事ぐらい分かりなさいよ。」

「でも…速くならないとお姉ちゃんにも勝てないよ…。」

「だったら…しばらくはチューニングを重ねれば良いわ。教えてあげるから。」

「お姉ちゃん…うん！分からないところは教えて。」

「良いわよ。しばらく冷ましてから家に帰りましょ。」

かがみはつかさのFDが熱を冷ますのを待って自宅へと帰っていった…。

一方、こなたは…。

「…ん？何か私のハチロクと同じような車が…ハチゴローかな？」

こなたの言う通り、こなたの元にハチゴート、トヨタのAE85
がやって来る。そのドライバーは…。

「…ん？お前のハチロク、俺のと同じっぽい感じだな！お前誰だ？」

「誰って…泉こなただよ。そっちこそ誰？」

「俺？俺はこのハチゴートと一緒に走ってきた富永巧だ。まあ走ってきたって言うてもあまり速くは無いけどな…。」

とみながたくみ
富永巧は、ハチゴートをこよなく愛する男だ。

普段は明るい性格だが、走りになると真面目な性格になる。ただ、
実力は中の下だが…。

巧はこなたに話を持ちかける。

「なあ…いきなりだが俺と走って見ないか？そっちがどのくらいの
実力かは知らないけど、俺くらいの相手なら十分良い勝負が出来る
はずだぜ？」

「え？やっぱりそういうフラグ立っちゃうんだ…。ま、勝負しても
良いけど。」

「オッケー！じゃあ決まりな！さあ、車に乗った！！」

こなたと巧はそれぞれの車に乗り、定位置に付く。そして巧が窓越
しにこなたに言う。

「勝負はこの妙義で、二本回る。勿論先にゴールした方が勝ちって
訳だ。」

「うん、分かったよ。さ、ハチロクとハチゴートの対決、燃えてきたよ！早くやろう！！」

「お、ノリ気だな！じゃあ早くやるか！！」

両者ともエンジンを吹かし、ギアを一速にして、レバーを押しパーキング状態を解除する。気合い十分のようだ。

そして、エンジン音がする中、レースは始まる。先手を取ったのはこなただ。

「あのハチゴート、実力が分からないからどういう動きするか分からないなあ……。とりあえず、いつも通りやれるだけやろうっと。」

「さあ、こなただったかな？お前のハチロクの走り、見せてもらおうぞ。」

ハチロクとハチゴートの距離は一定に保たれていた。走り出しは順調なようだ。

両者とも順調にスピードを上げる。走行中はスピードによってギアを変えなければならぬ為、走り屋でない一般人ではなかなかきついそうだ。

「……まあ立ち上がりはこれで良いね。さ、どんどん走ろうっと。」

「……なかなかやるな。だけどいくら弱いつたって俺のハチゴートはそんな簡単にやられる奴じゃねえんだ。それを見せてやるぜ！」

巧はスピードを上げ、こなたのハチロクに付いて行く。こなたも負けまいとスピードを上げた。

二人の走りはなかなか互角だった。

そして、緩いカーブに差し掛かり、二人ともドリフトで駆け抜ける。ハチゴーが若干スピードを落としたようだが…。

「おお、相手もなかなかやるねえ。だけど私のハチロクに付いて来れるかなあ？」

「なるほど、相手は高速ドリフト使えるのか…俺は決まる時は決まるんだけど高速ドリフトは掛からない事が多いから羨ましいぜ。」

そして、ドリフトでカーブを駆け抜け、妙義の1周目が終わろうとしていた。その時、ハチゴーがハチロクの隣に並ぶ。

「…！？嘘…ハチゴーでも私のハチロクと並ぶ事ってあるんだ。ますます負けてられないよ！」

「ハチロクのドライバーは意気込んでるみたいだが、抜いてしまえば俺の勝ちなんだ。なんせ俺のハチゴーにはターボエンジンが付いている。」

このまま一気に抜き去ってしまえば…さあ、行くぜ！俺のハチゴー！！！！」

巧は姿勢を変え、ハチゴーをより速く走らせた。実は巧のハチゴーにはターボエンジンが搭載されており、加速力がハチロクより二段階高い。その為、ターボの加速によりライバル車と並んだ時にはほぼ確実に抜くみたいだ。

巧のハチゴーの排気筒から火花が散り、予想通りこなたのハチロクを一気に抜き去る。

果たしてあなたは再び追い返す事は出来るのか？

あなたは焦りを感じていた。実はあなたのハチロクは、追い越された時には殆ど勝っていないのだ…。この勝負も負けになってしまうのか…？

「抜かれても、大丈夫。だって相手はあのハチゴーだからねえ。」

「この勝負、もらったあ！！」

巧のハチゴーは一気に加速する。あなたのハチロクはハチゴーから徐々に遠ざかっていく。あなたは多少の焦りを感じていた。

「まずい…！このままじゃ……って、何かがひらめいたような……
…うん、これをやってみよう。」

あなたは何かを思い付いたかのようにアクセルを全開にし、急カーブに突っ込んでいった。それを見た巧は……。

「何だ？あいつなんで減速しねえんだよ？この先は急カーブだぞ…
？」

「…さあ、行くよ！私のハチロク！！」

あなたはオーバースピードでカーブに突っ込む。

「おい！あいつオーバースピードで突っ込んでいくぞ！？減速しろって…！」

「キミに見せてあげるよ！ハチロクの力を！！」

行けえー！私のハチロク！！！」

するとこなたは、ハチロクのタイヤを溝に落とし、急カーブを一気に曲がりきる。そのテクニクは『溝落とし』のようにも見えた。その技に巧はかなり驚く。

「おいおい…あれ溝落としってやつじゃねえか…？あんな技使われたら俺の負けじゃねえかよ……。」

巧はアクセルから足を離し、減速する。まさに一瞬の勝負だった。二本目もこなたが頭で、巧は後ろだった。この勝負はこなたの勝利で終わる。

こなたと巧は車を止め、降りた。

「ふう…終わった終わった。」

「いやあ、お前のハチロクやっぱすげえな！」

「まあね。キミのハチゴもすごかったよ。」

「しかし…ハチロクである急カーブを一気に曲がれるなんてな…お前のハチロクはただのハチロクじゃねえぞ、きつと。」

「それ、私のお父さんも言ってたよ。ただ、何が違うのかが分からないんだけどね。」

「何が違うのかが分からない、か…ところでお前の父親も走り屋なんだろう？」

巧はこなたに聞く。そしてこなたはそうじろうの事について話し始めた。

こなたがそうじろうの事を話してからしばらくして……。

「…へえ、お前の父親もすげえんだな。」

「うん、お父さんだけずるいなあ〜って思うんだけどね。」

「…なあ、紅い悪魔って知ってるか？」

「うん、知ってるよ。それ私の従姉妹なんだ。」

「マジか！？何かお前のところは本当すげえな！」

巧は多少羨ましそうな表情になった。そしてまたしばらくして……。

「じゃ、今日はもう疲れたから帰るよ。」

「おう！またいつか走り合おうぜー！」

こなたと巧はそれぞれの車に乗り、帰っていった。

それから後の事…柊家では……。

「…つかさ、今日はちょっとチューニングの事は教えてられないわ。赤坂で私と走る約束をした奴が居るから。」

「うん、お姉ちゃん！頑張ってきてね！！」

「ええ。私が負けるはず無いじゃないのよ。たった一人を除いては…。」

「たった一人って…紅い悪魔だね？」

「ええ…あの赤いランエボを扱う、紅い悪魔だけは…。さ、じゃあ行ってくるわね。」

かがみはガレージのシャッターを開け、黒いGT-Rのエンジンを何度か吹かし、赤坂（オリジナルの峠コース）へと向かった。その赤坂で待っているドライバーとは一体何者だろうか…？

かくして、こなたのハチロクと巧のハチゴの最初の闘いは、こなたの勝利で幕を閉じた。こなたは自宅へと帰宅し、次なる闘いがあると確信してハチロクのチューニングを行う。

一方でかがみは、バトルする約束を交わしたドライバーが待っている赤坂へと向かっていった…。

ACT. 3 赤坂の青い彗星（前書き）

今回も前回と同じような形式ですが、次回からは少しずつ改善していこうと思います。

今回は赤坂（実際に峠があるかどうかは不明です）でこなたが一度追い抜かれ、焦る場面がありますが無事に勝ちます。

そしてかがみがこなたの母親、こなたの事をつい口走ってしまいます。

そしてこれが原因でこなたとかがみの隠れた友情が見出だされます

（笑）

やはり文章力がまだまだですがこの回はこなたのキャラが出ていると思うので読んでいただければ幸いです。

ACT. 3 赤坂の青い彗星

かがみは赤坂へとたどり着く。

「…お、いたいた。青いG T—R…私のとあまり変わらない奴ね。」

かがみは車から降り、そのドライバーに話し掛ける。

「神坂、今付いたわよ。」

「遅いぞ…早く始めよう。」

そう言いつつもそのドライバーは青いG T—Rから降り、一度握手を交わす。

「俺はここ赤坂の青い彗星と呼ばれている、神坂竜哉だ。よろしく。」

「ええ、よろしく。私は湾岸の女王と呼ばれている、柊かがみだわ。同じG T—Rどうし、良い勝負をしましょう。」

二人は挨拶を交わし車に乗り込む。そして窓越しに竜哉が…。

「今回のバトルは、赤坂の下り線で勝負だ。で、湾岸の女王とはいえここは俺の地元。お前が先行で俺が後だ。良いな？」

「オッケー。分かったわ。じゃ、早速だけど始めましょう。」

両者はギアを一速にし、レバーを押してパーキング状態を解除し、

今にもレースが始まろうとしていた。両者ともアクセルを踏んで何回かエンジンを吹かす。

「神坂…あんたの走り、見せてもらおうわよ！」

「さて…お前の走りがどれ程のものか…まずは後ろでじっくり見物させてもらおうじゃないか。」

両者の車のエンジン音が鳴り響く中、遂にレースは始まる。湾岸の女王の黒いGT-Rと、赤坂の青い彗星の青いGT-Rは気合い十分だ。

かがみはいつものように余裕の表情を見せながら走る。流石は湾岸の女王、というべきだろうか。

だが、赤坂の青い彗星も負けてはいない。かがみのGT-Rに付いて来ている。果たしてこの勝負はどちらが勝つのだろうか？

赤坂は後にこなたやつかさ、かがみが走る事になる、いろは坂ほどではないが勾配がある。更に急カーブも数箇所あり、なかなか手強いコースだとか。

しかし、そんなコースでもかがみは的確にラインを見出だしては、女王という称号に恥を取らない走り方をしていた。

「ふう、この辺はまだ余裕ね。何度か走った事あるし、きっと大丈夫わよね。」

「…流石は湾岸の女王…なかなか良い走りを見せるな……だが、この赤坂は俺の地元、お前に負ける訳にはいかない。」

竜哉はかがみのG T—Rをしつかりと見ながら運転を続ける。一方のかがみは……。

「確か神坂：ここが地元だって言ってたわね……。ただ、そんなあんたですら気付いてない赤坂の秘密を今ここで見せてあげるわ。行くわよ、私のG T—R！！」

そうするとかがみはアクセルを強く踏み込む。神坂もそれに続いた。

「かがみの奴：何をしでかすか分からないが、この勝負、負ける訳にはいかないっ！！！」

竜哉は自分の走りに集中し始めた。……と、ここで最初の急カーブが……。神坂は減速をして曲がる。しかしかがみは多少スピードを落とすだけで急カーブを曲がる時のようなスピードでは無かった。一体何をするつもりなのか……？

「……何してるんだ？」

「さあ……私の走りを見せてあげるわ！！！」

するとかがみは急カーブギリギリの段差を利用して、車体を一旦浮かす。この後の急カーブもそうだが、赤坂の急カーブは下りながら行く為、段差が出来る。その段差を利用して一気に抜き去るという訳だ。

神坂は急カーブをブレーキングして曲がった為、最初はかがみを抜いていたが、呆気なく抜き去られてしまった。

「何……！？俺の地元、赤坂にそんな秘密があったとは……と、これ

は知っていたが、成功した事が無いから…だがやってみるしかない…！」

竜哉も負けじとかがみの技を真似しようとした。だが、竜哉はこのテクニクを知ってはいたが、成功例は無いそうだ。つまり初挑戦という事になるだろうが、成功するのか？

「よし…行くぞ！俺のR！！」

「…上手く引っ掛かったわね。その先にすぐカーブがあるという事も知らずに…。」

竜哉のGT-Rは宙に浮き、かがみを抜き去ろうとしたが、かがみの言う通りその先にカーブがまたあった。それに竜哉が気付き急ブレーキする。車はスピンしてしまい、失敗に終わって勝負が付く。

「…勝負あったわね。」

かがみは広い路上に出て車をターンさせ、降りた。

「どうだった？私の走りは。」

「流石は湾岸の女王…参った。しかし、あのテクニクを一発でクリアするとは…本当にすごいな。」

「ふふん、何しろ私はこの赤坂でも随分走ってきたから、このくらい当然よ。」

「…なかなか面白い奴だな。また機会があれば走り合おう。」

「ええ、またいつかね。」

竜哉は自分の車に乗り、どこかへ行った。かがみは…。

「次にあんたと勝負するのは…こなたとかもしれないわ。ハチロクに乗るこなたとね…。」

かがみは一人でそう言い残し、車に乗る。

一方、こなたは…。

「はあ、今日はもう疲れたし寝よつと…。」

こなたはだらけてた。こなたらしいがハチロクのチューニングはしなくて大丈夫なのだろうか？

「…やっぱりハチロクは私のためにあるのかな…何だかんだ言っても今までずっとハチロクで走ってきたし…。」

こなたはただ疲れて眠っている訳では無かった。ハチロクのチューニングをどうするかを考えていたのだ。

…と、そこに赤坂での闘いを終えたかがみがこなたの家に来た。

「おーっす、こなたー…って、あんためっちゃダレてるじゃないのよ。ハチロクのチューニングはどうしたのよ？」

「あ…かがみ…。いやあ、ちょっと今日はもう疲れたからね…って、急にどしたの？」

「え…あ、いや、ちょっとね…。あんた、峠走ってるなら赤坂っていう場所知ってるわよね？」

「知ってるけど…それが何か？」

「いや、じゃあ赤坂の青い彗星は知ってるかしら？」

かがみはこなたに聞く。まさかとは思うが、こなたと青い彗星が対決するのでは無いだろうか…。

「一応知ってるけど…まさか…。」

「そのまさかよ。あんた、青い彗星と走って見たら？案外簡単よ。」

「え…い、いや、慎んで遠慮しますう…。」

こなたはそう言って自分の部屋に入ろうとした。しかし、かがみがこなたの肩を掴んでそれを止める。

「何怯えてるのよ。あんたでも十分闘える相手だから走ってみれっつ。」

「えー…だって私の車はハチロクだよ？絶対負けフラグ立つって…」

「意味が分からんわ！！大体あのつかさでさえ、一度だけだけど勝つてんのよ。フラグとか何とか言う前に走ってみれっての。」

「え…？…つかさに勝てたなら私にも勝てるはず…って事で走りに行くよ。」

「よし！じゃあ決まりね！私は助手席に座って見守ってあげるから、いつも通りに走りなさいよ。」

こなたは頷き、ハチロクに乗る。かがみも乗り、二人は赤坂へと向かった…。

しばらくして、二人は赤坂にたどり着く。

「かがみ、着いたけど…青い彗星はどこに…？」

「確かここに居れば来るはずだけど…おかしいわね。私に負けたからやる気無くしちゃったのかも。」

かがみがそんな事を言っているとどこからか青いGT-Rが…竜哉だ。

「お、立ち直り早いわね……竜哉！こっちよ！！」

かがみは窓越しに竜哉を呼んだ。それに竜哉は気付き、車を止め、降りる。

「何だ、ただのハチロクかと思ったら、かがみか。今度はそんなポンコツで勝負するつもりなのか？」

「ポンコツって、酷い言いようね……残念だけど今回は私じゃないわよ。ね、こなた。」

「……？こなたって誰だ？」

竜哉が疑問に思っていると、こなたがハチロクから降りてくる。

「私とその泉こなただよー。とりあえずよろしくね☆」

「あ、ああ……。何かやけにフレンドリーな奴だな。」

竜哉は再び車に乗り、窓越しにこなたへ伝える。

「とりあえず、勝負はここ赤坂の下り線でやる。お前が先行で、俺が10m程後ろから行く。良いな？」

「え？でも、それだと……。」

「おい……かがみにも言ったがここは俺の地元だ。しかもお前の車はハチロク、これくらいの手入れをしないと勝負にならないだろう？」

こなたは黙り込む。竜哉は気にせず話を進める。

「言いたい事があるなら終わってから聞いてやるから、とにかく始めるぞ。」

こなた「うん…（相当偏見があるみたいだけど、私のハチロクはそんなに遅くないよ…!）」

こなたはこんな事を思いつつ、アクセルを踏んでエンジンを何度か吹かす。そして、竜哉がこなたに合図を送り、こなたはそれに応じてレバーを押し、パーキング状態を解除、ギアを一速にして走る準備を完了させた。

そして、遂に赤坂の青い彗星、竜哉とこなたの勝負が始まった。果たしてどちらが勝つのだろうか？

「かがみ、とりあえずいつも通り行けるとこまで行ってみるよ。」

「ええ。あんたらしくいつも通り落ち着いて走りなさい。」

こなたはただ前を見て走る。竜哉は予告通り後ろから走っている。

「ふ…ハチロクの走りがどれほどのものか、見せてもらおうじゃないか。」

竜哉は余裕の表情で走る。こなたの言う通り相当偏見がありそうだし…。

レース序盤はこなたは竜哉を抜かせず順調に走る。

「ふん…まあこのコースの恐ろしさがもうすぐ分かってくる。恐ろ

しい程連続的に来る急カーブが：ハチロクにそのコーナーをクリアする事は出来るか、じっくり見させてもらうぞ。」

そして、レースは中盤に入り、遂に連続急カーブに突入する。こなたは本能的にブレーキを押し、曲がっていたが…。

「ちょ…ここ走りにくいよ…って、あれ！？い、いつの間に！！？」

「ふん…やはり所詮ハチロクはハチロクのままだな。この勝負、もらったあ！！！」

竜哉は一気に加速する。こなたのハチロクと竜哉の青いGT-Rとの距離はみるみる離されていく。やはり無理なのか…？

「さ、早速負けフラグ立っちゃうの…？」

フラグだの何だの言っているこなたにかがみが一言。

「あんたさあ…そんな事言っていないで早く集中しなさいよ。」

「分かってるって。こっから追い抜いてしまえば某アニメの藤原○海みたくなれるし。」

かがみは呆れたような声でものを言う。

「はあ…そんなんであんたのお母さんは何とも思わないの？……………
…って！しまった！！！」

かがみは何かを思い出したかのように慌てて口を塞ぐ。こなたは涙を浮かべながらも運転していたが…。

「(ま、まずいわね：私こなたのお母さんが居ない事を：こなたが小さい時に死んじゃってる事を知ってるのにあんな事口走っちゃって……こなたには後で謝らないと……)」

そう：こなたの母、泉かあなたはこなたが幼少期の頃に既に亡くなっているのだ。かがみはそれを知っていながらこなたに余計な事を口走ってしまった…。

気まずい雰囲気になりつつもこなたは竜哉を無事追い抜き、そしてゴールした。こなたの表情は悲しそうであったが…。

「…なかなか見事だったな、すごかったぞ。」

「……そう：ありがとう……。」

「…勝ったのに、嬉しく無いのか？」

「え…！？…あ、いやー：うん、すごく嬉しいよ。いや、私疲れちゃったみたいだね。」

こなたは何とか心を正す。かがみに言われた事が気にかかっているのだろう…。

「…そうか、ならあまり長い間話すのもあれだから、俺はこれで失礼させてもらうぞ。」

「う、うん……。」

竜哉は自分の車に乗り込み、どこかに行った。

それから……。

「……………」

「…（な、何か話しづらいわ……何て声をかけたら……）」

かがみはこなたに謝らなければと思いつつも話せないでいた。そして、やっとの思いで発した言葉は……。

「…こ、こなた、良かったじゃない、あいつに勝てて。」

「うん……………」

こなたは悲しそうな表情のまま、頷く。

「…（だ、ダメじゃない！私！！こなたに謝らないと……）」

かがみは次こそはこなたに謝ろうとした。しかし今度はこなたから一言…。

「…ねえ、かがみ…私のお母さんが死んじゃってる事は知ってるはずだよ…？」

かがみはギクツとした。まるで立場が逆転したかのように…。

「え…！？し、知ってるけど……………」

かがみはこなたの質問に何とか答えた。そして次の瞬間、こなたの顔からは涙が滴れる…。

「……かがみ…私のお母さんの事は……話さないでほしいって…何回も……ぐすん……。」

「こ、こなた…ご、ごめん…つい……。」

「うっ……私の一番辛い部分は…お母さんが居ない事なのに……。」
こなたは声を上げて泣きそうになる。その様子を見たかがみがとっさにこなたを抱擁する。

「……かがみ？」

「こなた…ごめん…本当にごめん…私が悪かったわ……辛い過去を思い出させてしまって……。」

「……いや、良いよ。何かかがみにこういう事されて、元気が出てきたし……。」

「そ、そうかしら…？」

かがみはこなたに聞く。こなたは少々ふざけてそんな感があるが…。

「……いやあ、やっぱかがみんは私の嫁だねえ。こういう事したらすぐ優しくなってくれるし。」

「………は？」

かがみはこなたから離れる。そしてかがみの右手は強く握りしめられている。

「あと、かがみんの胸の大きさなかなかだったよ♪みゆきさんほどじゃないけど。」

「こなた…あんた、私の鉄拳喰らいたい？」

かがみは恐ろしい表情でこなたに聞く。流石に怖じけづいたこなたは…。

「い、いや…かがみんの鉄拳制裁は遠慮しますう…。」

しかし、こなたのこんな様子を気にせず、かがみはこなたの頭にげんこつよりも遥かに強そうな勢いで殴った。かなり痛そうだ…。

「あう……かがみい、これは今までで一番痛いよ（泣）」

「あんたが変な事言うからでしょうがっ！！」

「だって、実際そうじゃん。」

「はあ…全く、高校生の時から体型も考え方も全然っ！！変わってないわね。」

「う…っ……一番言われたくない事を言われた…。」

こなたは傷ついた様子を見せた。そしてしばらくして…。

「…ほら、帰るわよ。」

「かがみ…うん！」

こなたはハチロクに乗り、かがみを家まで送ってから自宅へ帰る事にした。そのハチロクの車内にて…。

「…でもね、かがみ。」

「何よ？また変な事言うんじゃないでしょうね？」

「いや…人の話をちゃんと最後まで聞こうよ…。」

「あんたが悪いんですよ。ま、あんたの様子を見る限り、今度はマジメな話っぽいから聞いてあげる。」

かがみはずいぶん上から目線で話を聞く事に。

「…私のお母さんが居ないのが淋しいってのは事実なんだ…。それでかがみが私を優しく抱いてくれた事が嬉しくなっちゃって、ついあんな事言ってしまったんだよね。」

「こなた…。」

「その事については謝るから…だから今ここでかがみに約束するよ。」

「何を…？…ってか、あれは別にこなたのためとか、そういう事じゃないんだからね。」

「おー、ツンデレもまだまだ健在だねーと……。」

「ツンデレ言わなくて良いから早く続きを話さないよ！！全く、もう……。」

かがみは少々呆れたような表情になった。そしてこなたは一息つき、かがみに話す。

「私…絶対に最速の走り屋になってみせるよ。ゆい姉さんを抜いて…。」

「こなた……だけど、そうなるためにはいずれ私とも走る事になるわよ？覚悟は出来てんの？」

「もちろん！勝負の時はいくら私の嫁でも容赦はしないよ。」

「だから…私はあるの嫁じゃないっての！！」

かがみはこなたをツッコむ。こんな感じになりつつもこなたは運転を続け、そしてかがみの家に着いたこなた達…。

「…じゃあまたね、かがみん。」

「ええ、また何かあったら電話かけるわ。」

こなたは頷き、自宅へと帰っていった…。その様子を見たかがみは…。

「…こなた、あんたのその約束…果たしてもらおうからね…！」

かがみはそう言い残し、家の中に入ってしまった。

一方でこなたは…。

「…私、決めた…このハチロクと一緒に、走っていきましょう。だからハチロクも、私に協力してね…。」

こなたはハチロクに言い聞かせるように話し、自宅へと帰っていった…。

こうして、こなたは無事赤坂の青い彗星に打ち勝ち、更に走り屋としての腕を磨き上げる。次にこなたの前に現れる走り屋は一体何者だろうか？

こなたは、走り屋の頂点に立つべく走り続ける…。

ACT. 4 挑戦!! ヒルクライムバトル(前編) (前書き)

えー、今回は前編・後編と分けました。今回の話では、こなたがヒルクライムに初挑戦という展開になっています。

まだまだ勉強不足で意味が分からないところもあるかと思いますが、これから改善していくつもりですので頑張れなどの暖かい応援メッセージを感想に書いていただければ僕としても嬉しいですよ。

実際のところこの小説の更新どうしようかなとかなり考えていました……。

ACT. 4 挑戦!! ヒルクライムバトル(前編)

竜哉と走り合った次の日、こなたはまたまただらーんとしていた。

「うー……昨日の疲れがまだ取れない……。」

こんなこなたをよそに、そうじろうがこなたの部屋へ入ってくる。
今度は一体何をしでかすつもりだろうか？

「こなたー、入るぞー。」

「ん…お父さん、何…？今ちょっと無理だからあっち行っててよ。」

「こなたあー、そんな事言ったらいけないぞー(泣)」

「冗談だよ……で、用は何？」

そうじろうは小さく頷き、ある誘いをする。

「こなた、今からお父さんと一緒に……。」

「あー、お父さん、それ無理。じゃ、そういう事でー。」

「え？お、おー、分かったー………ってこなた！お父さんの話を最後まで聞いてくれよー(泣)」

そうじろうは泣きながらこなたに言う。仕方なくこなたは最後まで話を聞く事に……。

「はあー……もう仕方ないなあー、話聞くから何？」

「うん、こなた、確かまだヒルクライムバトルってのはやった事無いだろう？」

「ヒルクライムバトル……上り勝負だよね？」

「そう、上り勝負だよ。」

「んー、私は基本下り勝負だからやった事無いなあ……って、そんな事聞くて事はまさか……。」

こなたは、まさかヒルクライムバトルに誘おうとしてるのでは無いかと思った。ヒルクライムとは峠の上り勝負の事。パワーが少ないこなたのハチロクにヒルクライムは不利であるが……。

「ああ……ちょっとこなたにはまだ難しいかな……って思うけどどうだ？」

「うーん……誰と走るんだっけ？」

「誰って……お父さんしか居ないだろう？」

「あ……やっぱそうなるよねえ……。……。」

こなたはため息をつく。そんなにそうじろうと走るのが嫌なのか……。

と、そこにインターホンが鳴る……。

「あ……お父さん、ちょっと行ってくるね。」

「おー、行ってらっしゃい。」

こなたは玄関へと出ていく。相手は……。

「はい……って、富永君!？」

「おー、こなた、暇だったからお前ん家来ちゃったぜ。」

「…ねえ、私の家どこにあるか教えたっけ？」

「んー？あ、いや、教えてもらって無いなー…。」

「じゃあどうやって……。」

こなたが疑問に思っていると、巧の更に後ろから聞いた事のある声が……かがみだ。

「おーっす、こなたー。私が富永君にこなたの家の場所教えたのよ、勝手に教えて悪いかなって思ったけどね。」

「あ、そうなんだ……ま、別に良いけどね。」

「そういえば、あんた今暇？」

「え？うん、暇だけど？」

かがみは一息ついてこなたにある誘いをする。

「あんたさ、今から秋名でヒルクライムやってみない？富永君の友達が待ってるらしいから。」

「え…？う、うーん…でも、私ヒルクライムはやった事無いし、ダウンヒルじゃないと多分勝てないし……。」

巧が話に割り込んでくる。

「それなら心配いらねえよ。俺も最初はどうかかって思ったけど、案外イケるぜ。俺のハチゴーでもイケたんだからお前のハチロクでもイケるはずだぜ？」

「そっか…なら、ちょうど暇だったし、行ってみるよ。」

こなたはハチロクの鍵を取りに一旦中へ入る。

「こなたー、誰だったんだ？」

「かがみと富永君だよ。今から秋名でヒルクライムやろうって言われたからまた今度走ろうね、お父さん。」

「え？ま、まあ友達同士で走る方が楽しいだろうから、行ってもらっしやい……。」

そうじろうは淋しそうな表情になりつつ、こなたを見送った。そして、しばらくして…。

「…まあ今のこなたと走ったところで勝敗は分かっている事だし、まだ先で良いか……。今のこなたは俺には勝てないんだから…。」

そうじろうはこう独り言を呟いた。この発言を聞く限り相当な腕前のように…。

一方、こなた達は……。

「…ねえ、どこに富永君の友達は……？」

「ん？　ここら辺走ってれば来るはずだけどな……。」

巧にそう言われこなたはしばらく車を走らせる。かがみは自宅へと帰っているようだ。

そしてしばらくする事数分……。

「…お、いたいた。おーい！　拓也ー！！」

どこからか車が走ってくる。その車は……。

「…あれ？　あの車、私と同じハチロク……？」

「ああ、そうだぜ。拓也もお前と同じようにハチロク使ってたんだ。な？拓也。」

巧は窓越しにハチロクのドライバーに聞く。そのドライバーは車から降りて頷いた。こなた達も車から降りる。

「私は泉こなたって言うよ。よろしくね！」

「あ…えっと、オレはそこうるさい奴の友達って事になってる、沢村拓也って言うんだ。よろしく。」

「おい、拓也、うるさい奴って言う事は無いだろう？」

「…ホントの事言っただけだぞ、オレは。」

拓也が口ごもりながら答えていると、拓也のハチロクの中からもう一人が現れる。

「拓也の言ってる事はホントだぞ。お前すぐに喋るからなあ。」

「げっ！！先輩も一緒だったんすか…。」

「何だよその嫌そうな目は。別にお前達の走りを邪魔する訳でも無いし、良いだろう？」

「い、いや、まあそれはそうっすけど…。」

巧達は普通に会話をしていたが、こなたは珍しく全く話に付いて来れなくてばかーんとしていた。そこに巧が…。

「…あ、そういえばまだ先輩に紹介してなかったっすね。」

「…えっと、私は泉こなただよ、いろいろあるかもしれないけどよろしくね☆」

こなたはウインクして自己紹介を済ませる。

「お、俺はこいつらの先輩の藤原裕介だ、って事でよろしくな。」

二人とも挨拶を交わし、裕介が巧を集めて小声で話す。

「なあ、巧…あの子可愛すぎやしねえか？俺あのウインクで惚れちまったぜ。」

「さ、さあ…どうでしょう…って先輩、ナンパしたりしたらいけませんっすよ。」

「ぶっ！！んなのしないに決まってるだろ！！お前は俺を誰だと思ってるんだよ！」

「え？失礼っすけど、ずばり変態ってところっすかね。」

裕介は巧のその答えにがっかりしていたが、こなたと拓也は……。

「…で、今日ここに走りに来たんだけど、一緒に走ろうよ。」

「ん？ああ、良いよ。ちょうどオレもこの秋名で一通り走っておきたいと思ってたところだからさ。」

「そっか…もしかして地元？」

こなたは拓也に聞いた。口調からして地元のように見えるが…。

「地元じゃないけど、オレ走る時はほとんどこの秋名で走ってるから、コースは知り尽くしているよ。泉さんはこの秋名が地元なんだろう?」

「うん、もう走り出した時からずっとここで走ってるよ。実力はまだただだけどねー。」

「そうか…なら、もうすぐに走ろう、ヒルクライムバトル形式で。同じハチロクとしてオレは負けないよ。」

「もちろん! ヒルクライムは初めてだけど、本気で行くよ☆」

こなたは笑顔で拓也と握手を交わす。その様子に巧と裕介は……。

「…なあ、拓也とあの子の雰囲気何か良い感じじゃねえか?」

「…そうっすねー。先輩羨ましそーにしてるっすけど何考えてるんっすか?」

「な、何も考えてねえっての!!! 全く、お前は俺に対する態度を変えろよ!!!」

裕介は巧の頭をチョップした。当然巧の頭にはタンコブが……。

「いでっ!!! 先輩、何も殴らなくても良いじゃないっすかあ〜（泣）」

「お前が引き起こした結果だ。これで少しは反省しろ。」

裕介は腕を組んで偉そうな態度を取りながら巧に言う。巧は素直に引き下がるしか無かったようだ…。

そして、拓也とこなたはそれぞれの車に乗り込む。ヒルクライムバトルで先行後追い形式だ。こなたにとっては初めてのヒルクライムバトルとなる。果たしてどうなるのか？

「…よし、じゃあこっちは準備出来たよ、拓也君。」

「こっちも準備完了、もうすぐ始まるからギアを一速にしといてくれ。」

「うん、分かったー。」

こなたと拓也はそれぞれ同じようなタイミングでギアを一速にする。そしてアクセルを何度か踏み、エンジンを吹かす。

「秋名期待のダウンヒラー…：そんな泉さんがヒルクライムではどういう走り方をするのか…オレとオレのハチロクに見せてくれ…！！」

「何か相手はすごいヒルクライム得意そう…私も負けてられないよ！ハチロク…！！」

こなたも拓也も気合い十分だった。

「二人とも気合い十分だな。こりゃ楽しみだ。」

「そうっすね。ちなみにこなたはここ秋名の期待のダウンヒラーって呼ばれてるらしいっすよ。今回はヒルクライムだから直接関係は無いっすけど。」

「へえ、そうなんか。可愛らしく見えて案外強いんだな。拓也とはどんな勝負になるだろうかねえ。」

「拓也はヒルクライマーでもあるから多分ギリギリ拓也が勝つんじゃないっすかねー……って、先輩、その可愛らしいっての止めて下さいよ。先輩が言うといやらしく聞こえてくるっすよ。」

「巧……いつからお前はそうなったんだよ……俺はナンパとかそういうのはしねえっつの!!」

裕介は巧に殴りかかろうとしたが、寸前で止めた。

こうして、こなたの初のヒルクライムバトルが始まろうとしていた。果たして勝負の行方はどうなるのだろうか？

ハチロクV・S・ハチロク、二つのハチロクが激突する……。

ACT・5 挑戦!! ヒルクライムバトル（後編）（前書き）

更新遅れてすいません。今回はACT・4の後編を書きました。

「謎の走り屋」さんの感想を受け、悪い点を少し(?)改善しました。文中にも書いていますが、かがみと紅い悪魔が走り合った時は、実はどちらとも本気を出していなかったという設定にする事で、速度が遅いという問題を解消しました。（むりくりですが）

まあ、気長に温かい目で見守って下さい。

ACT・5 挑戦！！ヒルクライムバトル（後編）

ハチロクV・S・ハチロク、二つのハチロクの勝負は間近に迫っていた。ハチロクの特徴なエンジン音のみが響き渡る。ちなみに、こなたのハチロクにも拓也のハチロクにもターボが取り付けられており、上りでもある程度は加速が可能だ。だがダウンヒルの実力はこなたが上手で、ヒルクライムの実力は拓也が上手。この勝負、どちらが勝つのだろうか？

「それじゃ、お二人さんの好きなタイミングで始めてくれ。俺と先輩はここで待ってるから。」

巧がそう言うと、こなた達は頷き、パーキングレバーを引く。もう間もなくスタートだ。

そして、エンジン音が鳴り響く中、レースはスタートした。拓也が秋名のヒルクライマーという点と、こなたがヒルクライム初挑戦という事で、こなたが頭、拓也が後ろだ。

「おお、タイヤの調子は順調だね。このまま行けば意外とイケるかもしれない……。」

「泉さん…ヒルクライムだってダウンヒルだって、基本は同じ……どういう走りをするかは分からないけど、いつも通り自分の走りをすれば車は応えてくれるはず……。」

確かに、その通りである。しかもここ秋名はこなたが毎日のように走り込んでいる場所。自分の走りをすればハチロクの秘められた力を遺憾無く発揮出来るはずだ。

……こなたのハチロクに秘められた力、白銀の翼を持つと言われる、

その力を……。

二人は順調に走る。意外にこなたも走れるようだ。ただ、拓也にピッタリ張り付かれているが……。

「むう……やっぱり今のハチロクのターボじゃまだまだヒルクライムはきついなあ……。」

確かに、今のこなたのハチロクに付けられたターボだと、まだまだヒルクライムで闘っていけるようなパワーは無いだろう。しかし、勝利の条件はパワーだけでは無い。他にも勝てる要素は沢山ある。

まず、秋名名物の5連続ヘアピンカーブ、あれをどう攻略するかがポイントとなる。上りと言えどそんなに急な坂では無く、ある程度のパワーがあれば十分速度が出るため、これも勝利の要因になる。

ヒルクライムバトルは中盤戦へと入り、依然こなたが先行のままである。だがやはりピッタリ張り付かれている。

「まずい…振り切れないよ……まあ初めてだから仕方ないだろうけど……。」

こなたは徐々に焦り始める…。その様子を悟った拓也は……。

「……そろそろ行かせてもらおうよ、泉さん……!!」

拓也はアクセルを踏み、加速していく。すぐに追い抜かれた。

「嘘……追い抜かれた……。……どうしよう……。……やっぱり……負けてしまうのかな……。…」

こなたは呆然としていた。だが、不意にあの言葉が浮かんでくる……。こなたが走り屋になった最初の頃に、よく言っていたセリフだ。

（こなた！諦めたらそこで終わりよ！！相手に勝つポイントは最後まであるの！！だから……諦めたらダメ！！）

「かがみのあのセリフが……。……っ！！そうだよ！かがみの言う通り、まだ負けた訳じゃない！！一度抜かれたって最後まで、諦めない……諦めたら……そこで終わりなんだ……！！」

こなたの表情が突然変わる。そして目の前には、秋名名物の5連続ヘアピンカーブが……。あの大技（？）をやるつもりだろうか？

「……ラインが見えたっ！！」

こなたの耳には、ハチロクのエンジンの鼓動が聞こえている。こなたの心臓の鼓動と同じだとか。そしてその様子を見ていた拓也はある不思議な物を見る……。

「あれは……。ハチロクに翼が生えている……！？」

拓也は運転に集中しながらこなたのハチロクを見る。ハチロクに翼が生えたように見えるだけだが……。こなたの表情はかなり真剣になっていた。

「拓也君……私、負ける訳にはいかないんだ……。さあ、行くよ！」

こなたは勢いよくアクセルを踏む。そして、あの有名なアニメのセリフを口ずさむ……。

「仕掛けるポイントは……この先の5連続ヘアピンカーブだっ!!」

こなたは素早くハンドルを切り、溝にタイヤを落とす。

その溝落としを見た拓也の表情は……。

「……! 泉さん……なかなかやるな……このまま行けば今回のバトルは、オレの負けだ……。」

拓也はアクセルから足を離す。こなたは勝ち誇った表情で、走り続けた。

それからしばらくして、二人は車から降りる。

「ふう……拓也君、今回のバトル、ありがとね。楽しかったよ。」

「……オレもです、泉さん。すごく勉強させてもらいました。」

「拓也ー! お前どうしちゃったんだよー……って言おうと思ったけど、そのまま二人の時間を楽しみな。俺達はどっか行っちゃったから。」

「え……? ちょ、おい!! ……行っちゃったか……あ、泉さん……今日は本当楽しかったよ。また泉さんと走り合えたら良いな。」

「うん…（何か…私攻略されてない？拓也君に…）」

こなたは少し顔を赤らめる。何故なら、今はこなたと拓也、二人しかないからだろう。

「えっと…次走る時は、ダウンヒルでも良いかな…？」

「もちろん、良いですよ。ハチロクはダウンヒルに強いですからね。」

「そ、そっか…（何かやっぱり私拓也君に攻略されてそうな……ま、良っか）」

こなたは拓也と握手を交わし、自分のハチロクに乗る。

「じゃ、またねー。」

「はい、また今度。」

こなたは自宅へと帰っていった。しばらくして、あの二人が戻ってくる……。

「拓也ー、どうだった？」

「どうだったって、何がだよ？」

「だからさあ、こなたとの話だよー。告白とかしなかったのか？」

「ぶっ！！そんな話はしてねえよ！！もしかして巧、それを狙って…。」

「何だー、そんな話してねえのかよ。つまんねえな。」

「つまんなくて悪かったな。巧、置いてくぞ。」

拓也は巧を置いてハチロクに乗り、自宅に帰ろうとした。

巧も遅れまいとしてハチゴロに乗り込み、消えていった……。辺りはすでに夜だったみたいだ。

ーそれから後の事……。こなたはいつも通り秋名を通って帰っていた。
だが……。

「ん？誰かが走ってくる……。車種は何だろ？」

こなたはバックミラーを見る。すると、そこには黄色いRX-8が
……。

「んー、バトルしたいみたいだから、少し相手してやろっと。」

こなたは姿勢を変え、バトルする体勢に入る。黄色いRX-8は、
ある程度のチューンが施されている。外見で見える限りは、ウイング
が取り付けられていたり、ホイールが交換されていたりという感じ
だ。

「むう…あの黄色いRX-8、速いなあ……。負けてられないよー！」

こなたは徐々にスピードを出していく。その速さは、まだ殆どチューンが施されていないハチロクだからか210km/hだ。一方RX-8はまだ195km/hで、数値上ごく僅かだがハチロクが上回っている。

バトルはこなたが先頭のまま、続いている。だが、ここでRX-8がスピードを出してきた。230km/hだ。

「速い……！ ホントに速いよ……この秋名で負けてなんかいられない……！！」

RX-8はハチロクにピッタリくっついてくる。こなたは何とかして振り切ろうとするが、なかなか振り切れないようだ。

「……こうなったら、必殺技を使ってでも振り切ってやるよ。ハチロク、行こう……！」

こなたはハチロクのタイヤを溝に落とす。溝落としだ。だが……。

「……！！ そ、そんな……相手も溝落としが使える……?!」

こなたは予想外の事にしばらく口が開きっぱなしだった。そしてその黄色いRX-8は恐ろしくかがみを葬り去ったあの紅い悪魔のスピードを超える280km/hのスピードを出す。（ただ、かがみと紅い悪魔が勝負をした時、多分どちらとも実は本気を出してなかったため速度が低かったと思う）

そのスピードにこなたはついて来れず、愕然とした表情をする。

「嘘………そんな……まさか私の地元の秋名で………やっぱり……もうちょっとチューンしないと……ダメかな………。」

こなたはアクセルから足を離す。当然の事ながらハチロクはゆつくりとスピードが減っていく…。

こうして、こなたは初のヒルクライムバトルで勝利を収めた。だがその帰り、突如として現れた黄色いRX-8にあっさりと抜かれてしまった…。

一体黄色いRX-8のドライバーは誰なのか…それはまだこなたには分からない……。

ACT. 6 久しぶりのヒルクライムバトル（前書き）

大分更新遅れました。すいません（汗）

今回は、つかさが久しぶりに（つかさは湾岸線での走り以降殆ど走ってません）赤城という峠で久しぶりに走ると言うシチュエーションでした。

つかさはヒルクライムを中心に走っていますが、こなたと同じようにダウンヒルも走ります。

もともとFDはパワーのある車ですので、今回のシチュはFDにとってはピッタリだったと思います。

つかさの性格も出してみたので、読んでみて下さい。

ACT. 6 久しぶりのヒルクライムバトル

こなたがヒルクライムバトルを見事勝利で収めた次の日、こなたは長い間眠っていた。

「んー…今何時ー？」

「もう昼だぞー、こなた。」

「……もう昼なんだ……ふわあ……まだ眠い……」

「ははは……今日は大学も休みにしてるだろうし、もう少し寝ても良いんじゃないか？」

「うーん……ま、もう目が覚めたし、もう良いよ。お父さんは今日どっか走りに行かないの？」

こなたはそうじろうに聞く。そうじろうは大抵いつも赤城で走っているみたいだが…。

「んー、今日はな、長尾って所で走るつもりなんだ。こなたも一緒に行くか？」

「いや、良いよ……私は疲れてるし…。」

「そうかー……じゃ、お父さんはもう行くなー。」

そうじろうは家を出ていき、颯爽と車に乗って長尾峠に向かった。

「……やっぱり、お父さんは私とは全然違うね……雰囲気すごいよ……。」

こなたは頭の中であの黄色いRX-8と走り合った時の事を思い出していた。あの黄色いRX-8のドライバーは一体何者なのだろうか？

「せっかく今まで勢いに乗ってたのに……自信無くしたよ……。」

こなたはまた自分のベッドで眠った……。

一方、かがみとつかさは……。

「…つかさ、赤城って所で走ってみない？」

「うん！ちょうど私も走りたいなあ～って思ってたところなんだ。」

「そう…なら、多分今日も赤城であのFDが走ってると思うから、行くわよ。私は助手席に乗るから。」

つかさは頷き、白いFDの助手席にかがみを乗せて赤城まで向かった。赤城はなかなかの峠で、上級者でも少し苦戦する。

「つかさ、赤城にはあんたと同じFDが走ってるのは知ってるわよね？」

「うん、すごく速いんだよね？」

「まあね。でも、そのFDの弱点が分かれば、結構楽に勝てるはずよ。私は弱点を知ってるけど、つかさが走ってる時は何も言わないからね。」

「うん、分かったー。」

つかさはFDを走らせ、せっせと赤城へ向かった。

一方、赤城のFDは……。

「……ふむ、今日も調子良いな。問題は天気だけが……。」

赤城のFDは何本も走り込んでいた。かなり速いみたいだ。

「……まあ雨が降ろうがここ赤城のFDと呼ばれているこの俺が負ける訳ねえ……負ける訳にはいかねえんだ……。」

その赤城のFDは更に走り込んだ。その赤城ではロータリーエンジンの独特な音が響き渡っていた……。

一方、柊姉妹はもう赤城にたどり着いたようだ。

「へえー、ここがお姉ちゃんが言ってた赤城っていうところなんだー。やっぱり難しいのかな？」

「うーん…難しいって言ったら難しいけど、慣れれば楽勝よ。早速だけど、一本走りましょ。」

かがみはつかさに走るよう指示し、つかさはFDのスピードを少しずつ上げ、走っていく。つかさもこなたほどじゃないが少し運転が下手なようだ…。

「はううつー！け、結構難しいね……。」

「つかさ……落ち着いて運転しなさいよ…全くもう……。」

「あはは……ごめんね、お姉ちゃん。」

つかさは落ち着きを取り戻して運転していった。と、そんな終姉妹とある車とがすれ違う…。

「…あ！お姉ちゃん、あれってもしかして……。」

「…そうよ、赤城の黒いFD……宮本竜介よ。」

「……すごく、速そうだね……私勝てるかな……。」

「つかさ……大丈夫、自分の走りをすれば大丈夫よ……。」

かがみはつかさを勇気付ける。つかさからしたら、かなりの威圧を感じたようだ……。

重い雰囲気のまま二人は一本走り終えた。つかさはすぐにだらけ始めた。

「ふう……やっぱり無理だよ（泣）」

「つかさ…やる前からそんな事言ってどうするのよ。」

かがみはつかさにそういった言葉を投げかけた。そしてしばらくして、黒いFDはやって来る…。

「うわあ……やっぱりあの人すごく速そうだよ……。」

あまりの威圧感に身震いするつかさ。しかしかがみは……。

「この状況、こなたならどうするかしらね……。」

かがみはふと、こなたの事を考えていた。こなたならばこの状況、楽しんでいるところだろう…。

つかさは何とか立ち直り、一度その黒いFDと挨拶を交わす。

「……と、とりあえず今日はよろしくね…。」

「ああ、俺はここ赤城の黒いFD、宮本竜介だ。この赤城にはもう二人、速い奴がいるけどな。」

「……一人は赤城の白い彗星、高橋涼介でしょ？」

「流石は柊、その通りだ。そしてもう一人が……。」

「えっと、色は違うけど私のと同じで黄色のFDに乗る…高橋啓介さんだったよね？」

つかさはちよつと自信なさ気な表情で答える。

「お、柊姉妹、お前達はちゃんと分かってるみたいだな。その通りだ。その二人は高橋兄弟と呼ばれている。あいつらはもうそれはそれは速い。過去には柊もボロくそに負けたくらいだからな。」

「竜介……悪かったわね。」

「柊……ま、過去の話なんだし、気にしないでさっさと走ろうぜ。」

「ええ……と言っても、今日は私が走るんじゃないで、つかさが走るのよ。」

「そうなのか、ならつかさと言ったか？今日のバトルよろしくな。」

竜介はつかさと挨拶を交わし、車に乗り込む。つかさも同じく車に乗った。

「あの人……実は優しい人だったりして。」

「…まあ面白い奴だわ。走るとすごく怖くなるけど。」

「そ、そうなんだ……。」

「さ、つかさ、自分の走りに集中するのよ。この赤城は一度勢いに

乗れば楽に走れるはずだから。」

「うん、分かったよ!」

つかさは明るく返事をし、走る準備をする。
そして窓越しに竜介が一言…。

「今回のバトルは先行後追い形式で、二本走り込むぞ。ま、お前が先行で俺が後追いで、お前が逃げ切れば勝負は一本走っただけで終わるからな。」

「うん、分かったよ。じゃあ始めようよ。」

つかさは頷き、いよいよバトルが始まった。走り出しは順調なようだ。

「…柊の妹、つかさ…お前の走りがどれほどのものか、見せてもらうぞ…!」

竜介は後ろからつかさの走りをじっくり見て、追い抜くという作戦を立てたようだ。

一方、つかさは……。

「えっと…お姉ちゃん、どうしたらきれいに曲がれるようになるのかなあ?」

「どうしたらって言われても……ってかつかさ!ちゃんと前見て運転しないとダメでしょ!」

「え?うわあ!!た、大変だよ!!!(泣)」

つかさは相変わらず天然を発揮していろんな意味でかなり危ない運転をしていた。

「はあ……こりゃ先が思いやられるわ……。」

かがみは頭を抱えてかなり呆れていた。

バトルは中盤に入り、何とかつかさが先頭を守っていた。

「……さて、そろそろ行かせてもらおうぞ！」

竜介はシフトチェンジをし、加速する。同じFDとは思えない速さだった。つかさは徐々に焦り始める…。

「うわあ……!! 何か物凄く速くなってるよ……!!」

「つかさ…とりあえず、落ち着いて運転しなさいよ。」

「う、うん……ごめん……。」

つかさはしっかりと前を見て運転に集中する。ただかがみは心の中でこう言い聞かせる…。

「（つかさ…ここ赤城は、あのポイントさえ分かれば楽勝なはずよ…!!）」

かがみが言う、あのポイントとは何なのだろうか…？

…そしてつかさは追い抜かれた。竜介の黒いFDが先頭だ。

「抜かれちゃった……だけど、何だろう……まだ行けるような気がするよ、お姉ちゃん。」

「…そうね。まだ追い抜くポイントはたくさんあるわ。」

かがみは既に走り込んでいるため、コース全体を理解している。だが、追い抜くポイントをあえてつかさには言わなかった。自分で考えさせるつもりだろう。

「つかさ…自分で考えて走りなさいよ。今回のバトルでは私は何も言わないって言ったからね。」

「うん、分かってる。」

つかさは頷き、無言で走りに集中する。一方、竜介は……。

「…さあ、ここからどう出るのか、俺に見せてみる…!!」

竜介は余裕の表情をして、このバトルを楽しんでいるようだった。つかさがどう出るのかを気にしているくらいだ。

しばらくして、つかさは何かが閃いたような表情を見せる。

「……!!もしかして……これなら行けるかもしれないよ!お姉ちゃん!」

「…ええ、その方法でやってみなさい。あんたなら出来ると思うわ。」

かがみは静かに答えた。そしてつかさはアクセルを強く踏んでいく…。

「まだまだこなちゃんには敵わないけど…行くよ!!」

「柊の妹…何を考えているんだ…?」

竜介は分からなかった。先にはコーナーが待ち構えているのだ。普通は減速をすべきなのだが、つかさはコーナーギリギリまで減速をしようとはしなかった。そして…。

「……よし、今だ!!」

つかさは勢いよくブレーキを踏む。するとつかさのFDは横に傾き始めた。車体を横に傾けるドリフト走行をとったようだ。だがドリフト走行にしてはかなり傾いているような感じだが…。

「…あれじゃ、いつスピンしてもおかしく無いんじゃないか?こんな雨だし……。」

竜介は走りながらもつかさの心配をしていた。だが、スピンする事は全く無く、そのまま竜介を追い抜いた。

「くっ……ラリーストがよくやるようなドリフトだな……この雨の中じゃ俺は到底無理だ……。」

竜介は敵ながらあっぱれといったような感じでつかさの走りに見入

っていた。

しばらくして……。

「やったー！！お姉ちゃん！勝ったよ！！」

「つかさ、あんたもよくやるようになったじゃない！あれは正直私も驚いたわ。」

「えへへ…追い抜く方法があれしか思いつかなかったんだー。」
かがみとつかさが話していると竜介が車から降りてくる。

「柊の妹、すごいじゃないか！ラリーストがよくやるようなドリフトを意図も簡単にこなすなんてよ！」

「うん、ありがとう。でも、たまたま私のFDが力を貸してくれたんだと思うんだー。だから、あれは私だけの力じゃないと思うの。」

「柊の妹……そうか、分かった。まあ今回のバトルは面白かった。機会があればまた走ろう。」

「うん！またね！！」

つかさは明るく返事し、赤城を後にした。そしてかがみは携帯を取り出しこなたに電話をかける。

「……あ、もしもしこなた？今ちよつと良いかしら？」

『かがみ……今はちょっと無理かも………はあ………。』

「こ、こなた……元氣無いわね。どうかした？」

『いや………もう私走り屋辞めようかなと思ってね………。』

こなたのその言葉を聞いたかがみは驚く。

「ちよ……あんた走り屋辞めるって何でよ!!」

『……何となくだけど、私走り屋に向いてないような気がしてきたんだ………今まで一回も負けた事無かったのに………。』

「負けたって……相手の車種は何なのよ？」

こなたはゆっくりと話す。その声は涙を浮かべながらのようにも聞こえた。

『……黄色い…RX-8………だったと思う………。』

「黄色いRX-8………こなた、とりあえず今からあんたの家に行くから、走り屋辞めるなんてバカな事考えるんじゃないわよ!」

『うん………。』

かがみは電話を切った。その後、こなたは……。

「……ふう〜、こうでもしないとかがみんは来てくれないからね〜。違うキャラを演じるってのはやっぱり難しいね。」

先ほどの会話はどうやら演技だったようだ…。

「一回負けたくらいじゃ私はへこたれないよ。もともと負けに行ってるようなものだし。」

こなたは昨日の黄色いRX-8に負けた事を気に病んではいなかったようだ。

しばらくして、かがみとつかさがやって来る。

「こなた!!……ってあれ……?」

「おー、かがみんホントに来てくれたんだー。いやーご苦労さん（笑）」

「こなた……あんたひょっとしてさっきの……。」

「ん? さっきのって何が?」

「せっかく人が心配して来てやったのに……。」

かがみは拳を構え、怒りをあらわにしていた。構えた拳は怒りでかなり震えている。流石に危ないと思ったこなたは……。

「と、とりあえず落ち着こう、かがみ……。」

かがみはふうーっ、と大きなため息をつき、何とか気持ちを沈める。

「…で、実際のところどうなのよ？」

「え？ まあRX-8に負けたってのはホントだよ。ただ、走り屋辞めるってのは全然嘘だよ。」

「じゃあなんであんな話し方したのよ？ こっちは本気で辞めるかと思っただから…。」

「あはは…ごめんごめん、ちょこつとショック受けてたからつい…でもね…。」

こなたは大きく一息つき、静かに話しはじめる。

「こなた、でも…何なのよ？」

「私はこれからもハチロクで走り続けるつもりだよ。そして、いつか絶対かがみの仇を…ゆい姉さんを追い抜いてみせるんだ。」

こなたは冷静に、かつ力強く話す。その姿にかがみは…。

「こなた…でも、その前に私と勝負しないといけないわよ。覚悟は出来てるの？」

「もちろん！ かがみが相手でも構わないよ！！」

こなたは腕を組みながら自信満々の表情で答えた。と、そこに一本の電話

「…あ、誰かと思ったら巧君じゃん。どしたの？」

『こなた…とりあえず、何も言わずに秋名に来てくれっ!! 拓也が大変な事に…!!』

「え……? 分かった、すぐ行くよ!!」

こなたは電話を切る。かがみは会話の内容が分からなかったため、あまり理解出来ず、こなたに聞く。

「こなた、巧君に何言われたのよ?」

「それが…理由はよく分かんないんだけど…多分雰囲気からして、誰かとバトルしてる時に拓也君のハチロクが秋名で事故っちゃったんだと思うんだ…とにかく、急いで行った方が良いかもしれないから、行こうかがみ!」

「そうね…それにしても、拓也君のハチロクをクラッシュさせた相手の顔が見たいわ。一体どんな奴なのかしら。」

「分からないけど…相手の車をクラッシュさせてまで勝とうとするなんて…私は許せないよ。拓也君、無事だと良いけど…。」

こなたは拳を握りしめながらそう言った。かがみはそんなこなたに言葉をかける。

「こなた…そいつがまだいたら、懲らしめてやりなさい。秋名のハチロクは、あんたしかいないんだから。」

「かがみ…うん! 私の力を見せてやるっ!!」

こなたは颯爽とハチロクに乗り込み、地元の秋名へと向かった。か

がみつかさもそれぞれの車に乗り、こなたの後を追った。

こうして、つかさの久しぶりのヒルクライムバトルは何とか勝利で
終わり、一段落ついた……と思っていた矢先、巧からの電話で、
拓也のハチロクがバトル中にクラッシュした事をこなたが悟り、急
いで秋名に向かう事に。

果たして拓也は無事なのだろうか？

そして、クラッシュさせた走り屋とは一体……。

ACT. 7 秋名のハチロク（前書き）

ようやく更新出来ました（汗）

今回で拓也とこなたの関係がより一層深まっていく、恋愛イベも入れてみました。（作者自身は恋愛というものを体験した事が無い、というかほとんど興味が無いのでかなり下手な展開ですがw）

この作品は、走りの事だけでは無く、こういった青春、恋愛描写も含まれています。（何度も言いますが作者はそういうものを体験した事がほとんど無いので下手な展開ですがwww）

後は、こなたが発案してかがみがチーム名を考えた「秋名ラッキースター」は、らき☆すたの本当の名前「らっきー☆すたー」を取って（カタカナにした方が良かったかもしれませんが）秋名ラッキースターとしました。

余談ですが、この回ではらき☆すたのアニメの、夏の定番（ゆい姉さんが柊姉妹を乗せてチョメチョメD的な走りをする回）で出てきたGravityを音楽プレーヤーで再生しながら書きました。本当に、Gravityはレース系の作品に合いますね（笑）

もし、もしもこの作品がアニメになるとしたら（ありえませんが）オープニングにらき☆すたのGravityを使いたいですね。

チームメンバーの方は、後に一話を割いてらっきー☆ちゃんねる組のあきら様と白石に秋名ラッキースターのチームメンバーを紹介さ

せ
ま
す
(笑)

ACT. 7 秋名のハチロク

先ほどのバトルでつかさは勝利し、和やかな雰囲気になりつつあった。

だが、こなた達の元に、巧からの電話がかかってくる。それは、こなたの地元でもある秋名で拓也が他の走り屋とバトルの最中、車がクラッシュしたとの事だった。

こなた達はすぐさま秋名に向かう事に……。

「拓也君……どうなってるか分からないけど、無事でいてね……!!」

こなた達は急いで秋名へと向かった。

……しばらくして、こなた達は秋名へとたどり着く。そこには巧、拓也、裕介に、クラッシュさせたドライバーがいた。

「拓也君! 大丈夫! ?」

「あ、泉さん……来てくれたんだ……オレは大丈夫だけど、ハチロクが……。」

「ホントだね……フロントの部分が完全にダメになっちゃってる……バトルしてた相手は誰?」

「あいつだよ……あの、白いエボ?に乗る……。」

拓也は指を差した。するとこなたはすぐさまその男の方に向かう。

「ねえ、人の車を壊しておいて、よく平気でいられるよね！拓也君に謝ってよ！！」

「は？お前は誰なんだよ？ガキは引っ込んでろっつの！」

その男はいきなりこなたの腹部を強く殴る。当然こなたは苦しそうな表情で腹部を押さえる。

「っ……………！！はあ……………はあ……………この人……………けっこう……………ヤバいかも……………」

「こなた！大丈夫！？」

「泉さん！！…お前…止めろよ！！」

拓也は普段見せないような表情をしていた。だがその男はものともせず、更に言葉を発する。

「はあ？ハチロクみたいなザコい車に乗るお前が何だあ？もうお前の負けは決まったんだからとっとと帰れよ。」

その時、こなたはひざまづいていたが立ち上がった。

「ハチロクがザコい……………？ふざけないでよ！！ハチロクを馬鹿にしたら私が許さないよ！！！！」

こなたは怒り狂ってその男を強く殴る。だが男はびくともしない…。

そしてこなたを睨みつける。

「……全然痛くねえな。お前は少し眠ってろ!!」

その男はこなたの首を掴んで持ち上げ、蹴りや殴りを数発入れた。こなたは徐々に気を失っていく……。

「か、かが……み……たく……や……君……たく……み……
…君も……誰でも……良いから……助け……て……」

「お、おい…こなた!先輩、何とかしてくださいよ!!」

「何とかしろって言われてもな……てか拓也!お前あの子の彼氏なんだから、お前が何とかしろよ。」

「え?何とかしろと言われても…だけど、ボコボコにされている泉さんを放ってはおけない……。」

「こなちゃん……白い車に乗ってる人、もう止めてよ!!」

つかさは大声を出す。しかしその男は暴行を止めず、こなたは気絶する。何て酷い走り屋だ……。

「ハチ……ロクは……ザコい車なんかじゃ……な……い……」

こなたが気絶したのを確認したその男はこなたを放り投げた。すぐにかがみとつかさ、巧に拓也が駆け寄る。

「泉さん…泉さん!!…ダメだ、反応が無い……。」

「こなた！！…裕介君、とりあえず救急車を…！！」

「分かった、柊さん！！」

裕介は携帯を取り出し、救急車を呼ぶ事に。白いエボ？に乗る男は逃げるようにして車に乗り、どこかへ行こうとした。しかし拓也が……。

「待てよ……お前、泉さんをケガさせておいて何事も無かったかのように逃げるつもりだろうけど、逃がすか！！」

「うっせー！！俺は仕事があるんだ、邪魔すんな！！！！」

エボ？に乗る男は構わず、車を走らせる。当然追い付けず、逃げられてしまった。

「逃げられた………それにしても泉さん………。」

拓也はしばらくこなたを見つめた。そこに巧が…。

「拓也……今日一日はこなたに付き合ってやれよ。」

「ああ…そうするよ……。巧、俺のハチロクレビンを修理に出してきてくれ。」

「分かった。多分長くなるだろうけどな。」

「それでも構わない。オレはあのハチロクレビンで走ると決めたからな。」

「そっか……。」

巧はレッカー車を電話で呼び、拓也のハチロクレビンを運んでもらう事に…。

しばらくして、救急車が到着し、こなたは病院に搬送された。

そして一日半が経つ。こなたはゆっくり目覚めた。辺りはもう夕闇だ。

「……う……ん………ここは………?」

「泉さん…気付いた?ここ病院だから落ち着いて。」

「拓也君………みんなは………?」

「他のみんなは、一旦家に帰ったよ。オレはずっとここにいたけど。」

「そうなんだ………あ、そーいや拓也君のハチロクはどうしたの?」

こなたは拓也に聞く。拓也のハチロクレビンはフロント部分が大破している。それでも拓也は無事だったのだが…。

「オレのハチロクレビン、巧に頼んで修理に出してもらってるんだ。」

「そっか……あれだけ酷かったら直るのずいぶんかかりそうだね。」

「まあそれでもあのハチロクレビンで走れるようになるなら、長くなっても良いけど。」

拓也は少し照れつつも話す。こなたは一息つき、静かに話す。

「あのエボ？に乗ってる人……許せない……バトルするとしたら、絶対に負けられないよ……！！」

「泉さん……泉さんなら勝てますよ。白い翼を持つ、泉さんのハチロクレノなら……。」

「拓也君……ありがと。絶対に勝つよ。」

こなたは力強く拓也に言う。拓也もそれに応えるように頷いた。

そして、こなたは三日ほどで退院し、自宅にいた。かがみとつかさもこなたの家にいたみたいだ。

「ふう……ただいま、お父さん。」

「こなた…すごく心配したぞ」(泣)

「お父さん、ごめん……でも、たったの三日じゃん……。」

「こなた……どうするの？あの白いエボ？に乗る奴の事……。」

こなたはその事を聞かれると、表情を変えて言った。

「かがみ…もちろん、バトルでボッコボコにやるに決まってるじゃん。秋名の下りでね。」

「こなた、でもそんな事してあんたは気が済むの？」

「ボツコボツにするって、暴力でとかじゃないよ、かがみ。」

こなたはかがみに話す。かがみも何かを悟ったような表情をする。

「…そういう事ね。二度とあんな酷い事出来ないように、秋名のハチロクの実力を見せてやりなさい。」

「うん……絶対に……絶対に負けられない……拓也君のためにも、かがみが言う、秋名のハチロクって言うやつにかけても………と思うんだけど、その人何て言う名前なのかな？」

こなたが疑問に満ちた声でかがみに聞く。

「白いエボ？に乗る奴の名前は、桐明猛。元暴走族らしいわ。」

「うわあ……いろんな意味ですごい人だね……元暴走族って……。」

「でも、怖がる必要は無いわよ。精神的なプレッシャーを与えれば、一発で崩れるわ。」

こなたとかがみの会話に、ある人物も入ってくる。それは、赤木の白い彗星、高橋涼介のようだったが……。

「確かに、ああいうタイプの人間は、精神的に追い詰めれば確実に走行ラインが崩れる。べったり張り付けば、相手の精神力を擦り減らす事が出来るだろう。」

「え……？その声、もしかして赤木の白い彗星の……高橋涼介!？」

「ああ、そうだ。」

「あ、あんた……いつの間にいたのよ!!?」

かがみは涼介の突然の登場に驚く。

「いつの間になって……いたら悪いか？柊。」

「いや、別に悪いって訳じゃないけど……てかどうやってこなたの家に？」

「ん？一度インターホンを押してこの家の家主……泉そうじろうとか言ったか？そいつに頼んで入れてもらったのだ。秋名のハチロクに何かあったと聞いてな。」

「そうなの……ま、見ての通り、今はもう普通だわ。」

かがみはこなたを紹介する。

「お前が秋名のハチロク、泉こなたか……何だか、藤原とよく似てるな。」

「ま、まあね……てか、赤城の白い彗星さんが何故ここに？」

「それは、桐明のエボ？をどのように攻略すれば確実に勝てるのか、アドバイスをしに来たのだ。」

「そ、そうなんだ……わざわざ来てくれてありがとう。」

「いいや、構わないさ。ちょうど今は啓介も赤城で走ってるところだろうし、俺も暇だったからな。では、話を始めるか。」

涼介はこなたにアドバイスをする。

「まず、溝落としは出来るか？」

「うん、一応だけど……。」

「なら話を進めていこう。まず、溝落としを使うのは基本中の基本だ。そして、もし相手が後ろの状態でバトルが始まった時、絶対にバックミラーは見るな。自分の走りに集中すれば追い抜かれる事は無い。バトルは普通二本走るはずだから、二本目で自分が持てる全ての力を出して構わないぞ。」

「うん……何か難しそうだけど、やってみるよ。でも、もし相手が先

頭だったら？」

こなたは疑問に思い、涼介に聞く。

「その時は、とにかく相手の車の動きを見て、どのような走りをするのか頭に叩き込むんだ。何も難しい事は無いさ。同じ秋名で走っていた藤原もこれくらいの事は出来ているんだ。」

「うーん……分かったような、分かってないような……。」

やや長いアドバイスであったが、少しは理解出来たようだ。そして涼介はまた言葉をかける。

「…まあ最終的に頼りになるのは泉、お前がどう攻めるかがポイントだ。はつきり言って俺のアドバイスではまだ分からない事が多いだろう。」

自分で考えて、自分流の公道最速理論を生み出す、それが走り屋だ。
「

「そだね……うん、ありがと。自分なりに考えてみるよ。」

「ああ。俺はこれから仕事があるから、失礼させてもらうな。」

「うん。またね……。」

涼介はこなたの家を後にする。

「…何か、雰囲気全然違うね……すごいよ、あの人……。」

「まあ確かに、あいつがいるだけで空気変わるからね。」

「ふう……よし、秋名で少し走ろっかな。」

こなたはいつもの余裕を取り戻しつつあった。

「お、これから走るの？なら私も一緒に良いかしら？」

「もちろん良いよ。私のドラテク見てほしいし。」

「良いわよ。あんたがどれだけ成長したか、見てあげる。」

かがみはこなたの走りを助手席から見る事にした。そして……。

「じゃあつかさは悪いけど先に帰っててもらえない？」

「うん、分かったよお姉ちゃん。こなちゃん、頑張ってるね。」

「ありがと、つかさ。大丈夫、いつエボ？に乗ってる人が来ても、絶対勝つから。」

こなたはキリッとした表情で答える。つかさはこなたの答えに頷き、自宅へと帰っていった。

そしてこなたとかがみはハチロクに乗り、秋名へと向かった。

しばらくして……。

「……ん？あのバックミラーに写ってる白いランエボ……やっぱり来たね。」

「こなた、こんな事は想定内でしょ？」

「うん。もちろんここまでちゃんと考えてるよ。」

こなたは余裕の表情で答える。そして……。

「さてと…勝負だ…！」

こなたは表情を変えて、走りに集中する。向こうもそれを察したのか、ハチロクに張り付く。

「このハチロク…この前のあのガキのか……ふふふ…破壊してやるぜ。」

猛はこなたのハチロクのバンパーに軽く車体をぶつける。

「うわっ…！！…ホントに酷い奴だなあ……ま、どんなに突かれても追い越させなければ良いんだ……。」

こなたは構わず走り続ける。そのバトルを偶然通りかかった拓也と巧、裕介がガードレールの内側から見ていた。偶然というより最初からいたみたいだが…。

「お、こなたが頭なのか。いやあ、しかし来て良かったな、拓也！」

「ああ、そうだな…。今日泉さんがバトルするんじゃないかって思

ってたんだ。」

「うーん……やっぱり拓也、お前とあの子の関係何か怪しいぞ。最近あの子やたらとお前に話しかけるし。」

「先輩まで、何言うんですか。オレと泉さんはそういう関係じゃないくて、普通の友達っていうだけっすよ。」

「本当にそうなのか？何か怪しいけどな。」

裕介は拓也をからかうように言った。

「先輩…怒りますよ？」

「わ、悪かった…悪かったからキレイないでくれよ、拓也…。」

裕介は何とか拓也の怒りを沈めた。拓也は一息つき、一言…。

「泉さん……頑張って!!」

一方、あなたは…。

「むう……相手も酷すぎるよ、こんなに突っついてくるなんて……。」

「こなた…そのうち、このハチロクもスパンさせられたりするんじゃないかしら……何か、すごく嫌な予感がするわ……。」

「かがみ……大丈夫。もしそうなったとしても、すぐに立ち直るから。」

こなたはそう言って運転に集中する。だが、かがみの嫌な予感的中する…。

「さて……そろそろ逝ってもらおうか。」

猛のエボ？はこなたのハチロクの真横に出る。そして、勢いよくこなたのハチロクにタックルした。当然こなたのハチロクは動きがおかしくなる。

「うわあっ！！……やばい、ハチロクが……ハチロクが壊れてしまう……！！！」

「こなた！！しっかりして！！ハチロクとあんたの命だけは絶対潰したらダメよ！！！」

「無茶言わないでよかがみ！！こっちだって、潰したくないけど上手く運転出来ないんだから！！！」

こなたはガードレールぎりぎりのところまで来ていたが、何とかぶつからず、スピンの程度で終わった。猛は勝ち誇ったような様子で一気に抜き去る。

「ふう……………」

「こなた……大丈夫？」

こなたは一度顔を伏せる。そして……。

「……………かがみ、今から私本気で行くよ……………ハチロク、頼むよ……………」

「こなた……………分かったわ。潰さない程度に本気を出しなさい。」

こなたは頷き、ハンドルを握る。そのこなたの表情は別人のようにも見えたが……………。

と、外からその様子を見ていた拓也と巧、裕介は……………。

「こなた……………もうダメなのか……………」

「巧……………いや、そんな事は無いはずだぜ。見ろよ、あのハチロク……………」

「泉さんのハチロクに……………翼が……………」

こなたのハチロクには、白い翼が生えているように見えていた。そしてこなたは……………。

「さあ……………こうなった私はもう誰にも止められないよ……………」

こなたは再び勢いよく走り出した。

一方、猛は……………。

「ははは……………無様だな……………やはり所詮ハチロクはハチロクだ……………」

毅は大笑いして余裕の表情をしていた。

「やっぱり俺が最速だ。あれだけやればもう追って来ないはず……
……っ!？」

猛はバックミラーを見る。そこには、もうハチロクが追い付いてきている……。

「な、何故だ!？ハチロクは事故ったはず……だが、抜かせなければ……!」

猛はハチロクを引き離そうとスピードを上げる。しかし、離れはしなかった。

「スピード上げてちぎろうとしても無駄だよ……もう許さない!!」

こなたはハチロクのライトを消灯する。辺りはほぼ真っ暗な闇に包まれた。

「消えた……!？ハチロクがバックミラーから消えてやがる……どこにいやがる……?!」

こなたはライト消灯走行、通称ブラインドアタックをやっているみたいだ。

「私の本気は……こんな程度じゃないよ!!!!」

こなたは白いエボ?をしつかりと見つめ、横に並ぶ。

「このエンジン音……そこか……そこにいるのか……!!!？」

こなたは半分以上前に出たところでライトを再び点ける。そのこなたの運転に猛は驚く。

「くっ!! 抜かせてたまるかっ!!!!」

だがこなたは次の、秋名名物の5連続ヘアピンカーブでハチロクの真の力を発揮する事になる…。

こなたは全く減速しなかった。その運転にエボ?を操る猛は疑問を持つ。

「ハチロクのドライバー、コーナーに入るってのに減速しねえ……何考えてるんだ……? 死にたいのかよ!?!」

「お母さん……私とハチロクにお母さんの力をくれてありがと……この勝負、絶対に負けないっ!!!!」

こなたはハチロクのイン側のタイヤを溝に落とす。

「な、何だ……? 何が起こってるんだよ!!?!」

「さあ……終わりだよっ!!!!」

こなたは強くアクセルを踏み、一気に抜き去る。溝落としを見た猛は……。

「ふふ……あのハチロクに出来るなら、俺も……。」

猛はタイヤを溝に落とそうとした。しかし……。

「……ぐわっ!! な、何故だ!?! 何故出来ないんだよ!!!」

「何やってんだろ？かがみ、あれどうしたら良いかなあ？」

「さあ？放っておいて良いんじゃない？」

「そだねー。あのまま放っておいても大丈夫だよねー（笑）」

こなたは笑いながら運転を続ける。

一方、猛は溝落としに失敗し、操作不能になっていた。

「くっ…！！ダメだ、ぶつかっちゃう…！！」

猛はブレーキを強く踏む。しかし、速度はあまり落ちず、ガードレールぎりぎりになる。

「う…うわあー！！は、ハチロクのドライバー！！！！俺が悪かったから助けてくれー！！！！」

猛は窓を開けてかなり怯えた表情でこなたに助けを求める。こなたは仕方ない、と思いつつも猛に指示をする。

「はあ………ハンドルを勢いよく左に切って！！」

「分かった！！」

猛は言われた通りハンドルを左に切る。するとタイヤが溝から外れ、元通りに戻る。そしてゆっくりとスピードが落ちていき、やがて止まった。

こなたも車を止め、エボ？に近付く。

「……大丈夫？」

「た……助かった……何とか無事だ……。」

猛は一息ついた。そんな猛に、こなたは一言…。

「…キミがやってた事は、こーいう事なんだよ？分かった？」

「あ…ああ……今思えば、最低な事だな……俺はやはり走り屋になる権利なんか無いかもしれない……。」

猛は反省の色を出し、顔を伏せる。しかし、こなたが迫ってまた一言。

「走り屋になる権利が無いなんて……そんな事無いよ!!」

「何故だよ…？俺はこんな最低な事をした走り屋の……いや、人間の屑なんだぞ！？そんな俺を許せるはず無いだろ!!」

こなたは一度目を閉じ、一息ついて猛に話す。

「そんな事無いよ。自分が犯した悪い事でも、いつかは許してもらえる。許されなかったとしたら……。」

「許されなかったとしたら…何だ……？」

こなたは力強く言葉をかける。

「人を感動させるほどの、最高で速い走り方をすれば良いと思うよ。」

「……………なるほどな、どうりでお前が速い訳だ。」

「いや…それは今隣にいかみや私の友達のつかさ、それに…そこに隠れてる巧君、拓也君、裕介君…みんなのおかげで今の走りが出来てるんだ。」

こなたは拓也達が来ている事を分かったようだ。そして拓也達は出てくる。

「はは……やっぱりばれてたか。」

「こら、巧！ばれてたか、じゃねえだろ！！」

裕介はすかさずツツコミを入れる。巧の頭には、タンコブが……。

「ちよ…先輩酷いっすよ（泣）」

巧は裕介に泣き付いてきた。その様子にこなたは苦笑する。そして拓也がこなたに話をする。

「泉さん…凄かったよ。」

「そ、そーかな…？」

「うん。流石、秋名のハチロクだなーって、改めて思った。オレのハチロクレビンじゃああいいうのは出来ないよ…。」

「そ、そっか…ありがと。」

こなたは照れながらも笑ってそれを隠す。そして…。

「…何か、私が拓也君を攻略するつもりだったのに思いつ切り拓也君に攻略されちゃってるね…。」

「は、はあ…よく分からないけど………。」

拓也は苦笑する。だがこの後の展開を悟った巧はこなたと拓也以外の皆を集めて話をする。

「なあ、拓也とこなた、明らかに怪しいからみんなどっか行ってよ
うぜ。そこの白いエボ？乗ってる人も。」

「あ、ああ…分かったぜ…。」

そして巧は拓也に話す。

「な、なあ拓也。俺達これから予定あるから先帰るな。」

「うん？ああ、分かった。」

拓也は頷き、こなたと拓也がいる場所から離れていった。離れていったというより、物陰に隠れて様子を伺うつもりであったようだが…。

そして二人きりになったこなたと拓也は…。

「泉さん…何か、話にくいよね…。」

「う、うん……多分、巧君達はこのイベントを起こすためにどっか行ったんじゃないかな……」

「そうだとしたら……。」

拓也は後で巧に無理矢理にでも聞き出してやる、と心に決めた。そしてしばらく沈黙が続いたが、こなたが口を開く。

「た、拓也君はさ……その……。」

「ん？何？泉さん……。」

拓也はこなたの答えを待つ。こなたの顔は赤かった。その様子をやはり物陰から見ていた巧達は……。

「お、遂に来るか……?!」

「こなた、行っちゃいなさいよ……!!」

かがみ達は黙って見守る。そしてこなたは……。

「その……付き合ってる人とかいるかな……? 拓也君モテるからいるだろうねえ、きつと……。」

「泉さん……いや、いないよ。」

「え……?」

こなたは一瞬驚く。が、取り直し、拓也に再び聞く。

「じゃ、じゃあさ…私の事どう思ってる？」

「どう思ってるって……特別な存在かな。」

「そ、そう……。」

「泉さん、もう言いたい事分かってるよ。」

「へ……!？」

こなたはかなり驚く。心で思っていた事を言い当てられてしまったからだ。だが、こなたは立て直し、拓也に再度聞く。

「……拓也君に、フラグ立てても良いかな……？」

「よく分からないけど……良いよ。」

拓也は静かに答えた。そしてこなたは一息つき、拓也に近付く。その様子を見た巧達は……。

「遂に……遂に来るぞ……!!」

「はあ……何かもうどうでもよくなってきたわ。」

「おい…俺そろそろ帰りたいんだが……。」

三人はこうなりつつあったが、裕介は……。

「拓也だけ羨ましいなあ、俺もああいう恋ってもんをしたいぜ。」

「先輩じゃ無理……………」

巧が話している途中で裕介は凄い形相で巧を見つめた。

「何か言ったか？ 巧よおー。」

「い、いや…………何でも無いっす……………（危ない危ない、殺されるところだったな）」

巧は冷や汗をかきながらも何とか回避する。
そして遂にこなたと拓也は抱き合う。

「…何か、こういうのリアルでやるのは初めてだから、何て言うのかな…………ちよっと、恥ずかしいよ……………」

「泉さん…オレもかな…。だけど……………」

「だけど…………何？」

こなたは拓也に聞く。拓也は静かにこなたに言う。

「あえて言葉をかけるなら…………今日のバトル、よく頑張ったね。本当に、最高の走りだったよ。」

「拓也君…………ありがとう…………ぐすん……………」

こなたは多少泣きながら拓也を抱きしめる。それに拓也も応えるかのように、こなたを優しく抱いた。

…随分長い間だっただろうか、ようやくこなたが泣き止み、離れる。

「ごめん……でも、これでフラグ立ったね。」

「そう……だね。」

「ふう……私、決めた。」

「泉さん……何を？」

拓也は疑問に満ちた表情でこなたに聞く。

「これからも……ここ秋名のハチロクとして……走り続ける事をね……で、良い事思い付いたんだけどさ……。」

「……オレが考えてた事と、少し似てるよね？」

「うん……ここ埼玉じゃん？だから、埼玉連合チームを作ろうかな……ってね……。」

「……本当にオレが考えてた事と似てる……っていうか、同じだね。」

「ただ：チーム名がちょっとねえ。何か良いチーム名があったら良いんだけど。」

こなたは腕を組みながら考える。そこにかがみが……。

「ちょっと！二人だけで話を進めないでほしいわ！」

「かがみ！？か、帰ったんじゃないの?!」

「車も無いのに帰れる訳無いでしょうがっ!!」

かがみはすかさずこなたを軽く殴る。こなたの頭にはアホ毛の代わりにタンコブが……。

「あう……いきなり出てきてそれは無いよ（泣）」

「はあ……ま、いきなり殴ったのは悪かったわ。で、さっきの話……埼玉連合チームを作るっていう話、私も混ぜてちょうだいよ。」

「うん、良いよ。で、どういった名前が良いかな？」

こなたはかがみに聞く。かがみはしばらく考えた後、こう言う。

「……ここはね、埼玉連合チームだけど、ここ秋名の名前を借りて秋名ラッキースターっていう名前はどうかしら？」

「秋名ラッキースター……良いかもね！」

「よし、じゃあそれに決めましょう！」

意外にもチーム名は早く決まった。

こうして、こなたは猛に多少のケガを負わされつつも無事に勝利を収めた。そして拓也とこなたの関係はより深くなり、もはや一つのカップルのようにも見えた。

そしてこなたは全国の峠、都市高を制覇するためチームを発足する事に。

「秋名ラッキースター」は、ここに発足する…。

ACT. 8 阪神ブルーバース（前書き）

まず初めに、この回では相当なキャラ崩れが起きています………なんていう堅苦しい言い方は辞めて、実際のところ本当にキャラ崩れは起きてるんですが、こういう一面もあるんだと思って読んで下さい。

こういう場面を一度は作ろうと思っていました。次回からはきちんと元に戻しますのでこの回だけご了承をお願いします（汗）

ACT. 8 阪神ブルーバース

秋名ラッキースター…それは、秋名のハチロクこと泉こなたの発言で発足した埼玉連合のチームだ。そして、その名を考えたのはこなたの友人、柊かがみ。こなたはかがみを秋名ラッキースターのチームリーダーとする事を考えていた。今は大まかなチームメンバーが秋名に集まって話をしている。

「…って事で、良いよね？」

「まあ仕方ないわね。あんたじゃ絶対ダメになるだろうし。」

「むう…失礼だなあ。まーでも、こっちもかがみじゃないと多分ダメかなって思ってたけど…。」

「こなた…まあ、あんたはチームのダウンヒルエースとして、活躍してもらおうわ。」

かがみはこなたをダウンヒル専門のエースドライバーとして育て上げる事に。こなたはいつもの余裕の表情を見せる。

「ダウンヒルは任せてねっ!!」

「分かったわ。あんたは本当ダウンヒルでは速いからね。問題はヒルクライムだけど…。」

かがみがしばらく考えていると、こなたが…。

「ヒルクライムはかがみで良いんじゃないの？リーダーって言った

って一応走り屋だし。」

「いや…私は作戦とか考えたりしないといけないし、遠征先も決めたりしないといけないから……ま、全く走らないって訳じゃ無いけどね。」

「…じゃあかがみさん、オレにさせるってのはどうですか？」

「拓也君……そうね、あのヒルクライムバトルを見た時、いろんな意味で凄かったから頼もうかしら。後は……つかさ、あんたのFDはパワーあるし、そこまで下手じゃないからヒルクライムの方を頼むわね。」

「えっ…!? だ、大丈夫かな……?」

つかさは少々不安そうな表情をする。そこにこなたが…。

「大丈夫だよ、つかさならいつか全国の峠でヒルクライム最速になるんじゃない?」

「そ、そうかな……?」

「それに…つかさんが失敗しても、オレが頑張ってカバーしますよ。オレは正直言ってダウンヒルでもヒルクライムでも、どっちでもイけるんで、大丈夫ですよ。」

「そう……なら、頑張ってみようかな……。」

つかさは少しずつ自信を取り戻していった。…と、かがみが気になった事を言う。

「ん…？って事は拓也君…ダウンヒルも出来るんだよね？」

「え…？あ、はい、そうですが…何ですか？」

「いや、こなただけに任せるのもいけないし、拓也君にはダウンヒルエースとしても活躍させてもらっても良いかしら？」

「良いですよ。泉さんのサポートもしっかりさせてもらいます。」

「拓也君…ありがと。同じハチロクだから、相手も油断しそうですね。」

「そうだね。オレがハチロクにこだわるのは、油断している相手を攻めて、最後にぶっちぎるのが心地好いからなんだ。どんな車でも、だいたい7割方はドライバールのテクニクだし。泉さんもそうだよね？」

「うん、まあだいたい同じだね。」

こなたと拓也の会話は弾んだ。そしてかがみがまた発言する。

「よし！じゃあ決まりね。後、巧君と裕介君は今のところは悪いけど手伝いをしてやってね。もちろん、バトルの練習は怠らないようにお願いよ。」

「分かった！俺のハチゴーターボもいつかバンバン走らせるぜー！」

「巧、まずお前のドラテクを磨かないと無理だぞ。まあ俺も人の事

言えないけどな……。」

「分かってるっすよ先輩。先輩もある程度パワーのある350GTに乗ってるんすから、頑張って下さいよ。」

「ああ、分かった。俺も350GTに見合うだけのドラテクを付けないとな。」

巧と裕介は手伝い係をする事に……。そして……。

「…じゃあそういう事で、また明日ね。」

かがみの問いかけにこなた達は「了解!」と答え、夜の秋名から消えていった……。

その後、柊家にて……。

「さてと……とりあえず日本全国に私達のチームの名前を知らせるためにホームページでも立てるかなー。」

かがみは眼鏡をかけ、パソコンの電源をつける。と、そこにかさが……。

「あ、お姉ちゃん…何やってるの?」

「あ、つかさ…いや、私達のチームの名前を全国に知らせるために

ホームページを立てるかな、とか思ってね……つかさも手伝ってくれる？」

「うん！頑張るね！！」

つかさもホームページの作成を手伝う事に。かがみは秋名ラッキースターのホームページをカッコイイ感じにしたいだとか。

……しばらくして、ようやくホームページの作成が完了したようだ。行動の内容は某アニメのプロジェクトDというチームと似ているが……。

「うーん……まあこんな感じで良いわね。つかさ、このページに毎回バトルの成績とか、タイムを載せていくから、きちんと頼むわよ。」

「うん……足を引っ張らないように頑張るね。」

「ええ。あんたはもっと自分に自信を持って良いからね。あんたのFDはちゃんと応えてくれてるんだから。」

「うん……。」

つかさは静かに頷いた。そして二人はそれぞれの部屋で睡眠を取った……。

同じころ、こなたは…。

「ただいまー、お父さん。」

「お、こなた…どうだったか？今日のバトルは…。」

「え？うーん、まあ勝てたかなー。途中ダメかなって思ったけど。」

「そうか…こなたもあのエボ？に勝てるまでに成長したのかー。いやー、お父さんはこなたが速くなっていくのが嬉しいなー。」

そうじろうは腕を組みながら呟いた。そしてこなたは例の件をそうじろうに伝える…。

「……って事で、チームとして活動する事になったんだけど…どう思う？」

「どう思うって…：良いんじゃないか？かがみちゃんリーダーなら、きっと強い走り屋チームになると思うぞ。」

「そっか…：うん、足を引っ張らないように頑張ろっかなって思ってるから、お父さんも応援してね。」

「ああ。必要ならお父さんのインプレッサも貸すからな。」

そうじろうはこなたにそう言った。こなたは頷き、自分の部屋に入り睡眠を取った…。

そしてこの頃、秋名を走っている謎のドライバーがいた。車種は…青いNSXだ。

「…ここを泉さんが走っていると聞きましたが…今日は泉さんは走られてはいないみたいですね…。」

この口調は…間違いない、高良みゆきだ。彼女はこなた達と同じ陵桜学園に通学していた。だが卒業後、関西にある有名な医療大学があるとの情報を手に入れ、一発で合格した。そして今、久しぶりにこなた達に会いたいと思ったのか、こなたの地元の秋名に走りに来ただとか。

「…最近、泉さんが走り屋チームを立ち上げたと聞きましたが…確か、秋名ラッキースターという名前でしたね。

私が率いている阪神ブルーバースと比べてどの程度の力があるのか拝見させていただきたいのですが、今日はおられないみたいなのでまた今度の機会にこの秋名山に来ましょう。」

みゆきはまるでハヤブサのように車を走らせ、秋名を後にした。

そして次の日の朝、柊家にて……。

「ん？……もう朝か……さてと、早速どうなってるか見てみるかな。」

かがみは支度を済ませてパソコンをつける。勿論ページの確認のためだ。

「……？関西連合のチーム、阪神ブルーバース……？ま、まあ、名前からして速そうだけど……相手のリーダーは………って！う、嘘でしょ！？」

かがみは驚いた。それもそのはず、相手のリーダーはみゆきだからだ。

「……まあ、チームを立ち上げたからには走らない訳にはいかないわね。相手がみゆきだからって手加減したらダメだわ。ちよつとみゆきに電話でもかけよう。」

かがみは電話を取り、みゆきに電話をかける事に。

「……あ、みゆき？久しぶりね。今良かった？」

『はい、ちょうど手が空いていましたので。どうされました？』

「いや…みゆきってさ、走り屋やってるんでしょ？」

『ええ、そうですが……かがみさんはどうされてますか？』

「私？私もちろん湾岸線や他の峠で走ったりしてるわよ。で、昨日こなたがチーム作ろうって言い出してねー。結局私がリーダー務

める事になったんだけど…。」

かがみは頭を少しかきながらみゆきに話した。するとみゆきは……。

『かがみさん、それはひょっとして……秋名ラッキースターという名の走り屋チームですよね?』

「え?そ、そうだけど……じゃあやっぱり、阪神ブルーバースっていうチームのリーダーはみゆきって事になるわよね……?」

『はい……そうですが……何故分かりましたか?』

「いや、秋名ラッキースターのホームページの訪問チーム一覧のところに、阪神ブルーバースって載ってあったから……ちょうど良い時だし、今日みゆきのチームに遠征に行っても良いかしら?」

かがみはみゆきに聞く。みゆきの出した答えは……。

『……ええ、そちらの都合が合うのでしたら、構いませんよ。』

「うん、ありがとう。じゃあ今日の夕方までには関西入りする予定だからね。……じゃあ、また。」

かがみは電話を切る。そして一息つき、今度はこなたに電話をかけた。

「出ないわね……本当何で携帯の方には出ないのかしら……。」

かがみは仕方なくこなたの固定電話にかける事に。だが、電話に出たのは……。

「…あ、こなたのおじさんですか……あの、こなたはいませんか？」

「かがみちゃん……ごめんね、こなたは今病院にいるんだ…。」

「え……！？」

かがみは一瞬驚いた。だが落ち着きを取り戻し、話の続きを聞く。

「病院って…何かあったんですか…？」

「うん、実は今朝の事なんだが……。」

そうじろうは今朝起きた事をかがみに話した。

―こなたが帰宅して、朝を迎えた頃―

「…？もう朝かあ……ふわあああ……まだねむーい……。」

こなたは眠い目を擦りながら起きてきた。その様子はいつもと同じ感じだったが―。

―だが、こなたがリビングに下りようとした時、こなたの体に異変が…。

「……………っ！！な……何…？この感じ………苦しいよ……。」

こなたは胸を押さえて苦しそうな表情をするも、何とか階段を下りた。だがその次の瞬間、こなたはその場に倒れ込んでしまった…。

こなたが倒れた音にそうじろうが気付き、こなたを苦しそうな表情をして、荒い息をしているこなたを発見する。

「こなた…?! 大丈夫か!! 今すぐ救急車を呼ぶから、耐えてくれ
!」

そうじろうは急いで電話をかけた。こなたはすごく苦しそうな表情をしている。

「はあ……はあ……嫌だ……まだ死にたくなんか……ないよ……
……。」

こなたはこう呟き、目を閉じた。

……その後、救急車が到着し、こなたは緊急搬送された。原因は心臓発作らしい。

―この話を聞いたかがみは…。

「…おじさん、今からこなたのところに行きます…。」

「ああ、かがみちゃん、行ってやってくれ。こなたも少しは楽になるだろうから…。」

かがみは電話を切った。そしてしばらくして…。

「…つかさ、今からこなたのところに行ってくるから、留守番お願いね……。」

「う、うん…分かったけど、お姉ちゃんどうしたの?」

「…いい、いや…何でも無いわ。さ、行ってくるから。」

かがみは何事も無かったかのように玄関から出た。だが、内心は…。

「（こなたの事をつかさに話したらいけない…つかさまで心配して走る事なんか考えられなくなってしまおうわ…）」

かがみはこなたの事をつかさには話さないようにした。そしてこなたが一時入院している病院に行く。

…しばらくして、こなたが入院している病院に着く。かがみは車を下りてこなたの病室へと急ぐ。

「こなた！！大丈夫！？」

「あ…かがみん、来てくれたんだ…。」

「こなた、大丈夫なの…？」

かがみはこなたに寄り添う。普通ならあまり考えられないが…。

「うん…何とかね。ただの心臓発作だって言ってたし。」

「そう…でも、この調子じゃ今日の初の遠征は無理ね…。」

「きよ、今日から遠征だったの！？なら行くよ！！」

こなたはベッドから下りて遠征に参加させるように言おうとした。
しかし、またしても軽い発作が起こる…。

「……っ！…はあ……はあ………。」

「こなた！安静にしてないとダメでしょ！！」

「でも……でも私だけ走らない訳にはいかないよ！！」

こなたはかがみの体を揺さぶる。かがみはそんなこなたを引き離れた。

「こなた…とりあえず落ち着きなさいよ、ここ病院でしょ。」

「…あ、そうだったね……でも、私だけ走らないってのは嫌だよ…
…そんなの、かがみ達に失礼じゃん……。」

テンションが低くなるこなたにかがみが一言。

「こなた……拓也君がいるじゃない。あんたと同じハチロクの…。」

「でも……でも！」

こなたはかがみの体を少し揺さぶる。遂にかがみは……。

「こなた……でもでも言わないでよ！！私はあんたの体の事を心配して言ってやってるんだからっ！！！」

かがみはこなたに怒った。いきなりかがみに怒らたこなたは…。

「ひっ…!! か、かがみ…ごめん……………」

こなたは素直にかがみに謝る。かがみもこなたに謝り、気持ちを整えてこなたに優しく一言…。

「こなた…いや、私の方こそいきなり怒ったりしてごめん…………でも、あんたがもし死んだりしてしまったらチームのみんなやあなたのおじさんだって悲しむんだから…だから今回の初の遠征は休んでほしいの。」

「かがみ……………」

こなたは俯く。かがみは更に話を続ける。

「それに、秋名ラッキースターは遠征に限らずチーム全員が揃っていなければいけないっていう決まりがあるのよ。まず第一に、あんたがいないと話にならないわ。」

「…………そだね。みんな一緒じゃないと、ダメだよね…………私、何考えてたんだろ……………」

落ち込んでいくこなたに、かがみがある事を言う。

「こなた…みんなで一緒に、全国を制覇するって約束してくれる？」

「かがみ…………うん、約束するよ。ただ、今はちょっとだけ休ませてもらうね。」

「ええ、しっかり休んで、また私達に元気な顔を見せてよね。それ

じゃ、私はそろそろ帰るわ。」

かがみは立ち上がり、こなたと共に下の階まで下りた。そしてこなたとかがみは互いに手を振って別れた。

「……………ふう、さてと、戻ろうつと……………」

こなたは病室に戻っていく。だがその途中、こなたは俯いて独り言を言う…。

「かがみ……………もうすっかり大人だね……………私もそろそろ大人にならないと……………」

こなたは自分の行動がまだ子供っぽい事に少しの苛立ちを見せていた。

…一方、かがみも車内でこんな事を……………。

「こなたの奴……………陵桜の時と比べて少し大人になったわね……………」

かがみはこなたとは対照的に、こなたの事を少し成長した、と賛美していた。

「…何なら遠征する日を延ばすってのも良いけど……………みゆきが引き受けてくれるかどうかよね……………」

かがみは携帯を取り出し、電話をかけようとした。だが、途中で止

めた。

「おっと……車を運転してる時は携帯使っちゃダメだったわね。家に帰ってからかけようっと。」

かがみは法定速度を守って運転して、自宅に帰った。

同じ頃、こなたは…。

「……今思えば、かがみ達と一番最初に出会ったのは、陵桜の校庭に桜がたくさん咲いてたあの頃だったんだよね……。」

こなたは高校時代の事を思い出していた。

「あれから…私とつかさ、みゆきさんにかがみ…3年間みんな一緒だったよね…かがみだけ最後まで別のクラスだったけど……。」

確かにその通りだ。かがみのみ、最後まで違うクラスだった。だがそんな事は関係ない。大事なのは、かがみ達と一緒に過ごした青春の日々だ。

「そして…卒業の時、学部がいろいろあって結構良い大学があったから私とかがみ、つかさはその大学に入ったけど、みゆきさんだけ違う大学に行ってしまったって……その時みんなして泣いてたかなあ…：かがみが一番泣いてたけど、私もみゆきさんに会えなくなるって思うと、今でも悲しいよ……。」

こなたは少々俯きつつも淡々と独り言を呟く。

「そして…私とかがみ、つかさは同じ日に免許を取って…その日は私とつかさは子供みたいにはしゃいでたなあ……かがみは冷静だったけど。それから、私の走り屋としての生活が始まったんだっけな。」

こなたは先ほどの表情から少しずつ笑顔を取り戻して、更に呟く。

「最初は全然ダメだったけど、かがみのおかげで今のような走りが出来るようになったんだ……って、ホントにほとんどかがみのおかげでだね…。」

こなたは大きくため息をつき、最後に一言…。

「そんな、リーダー的存在のかがみのためにも……今はしっかり休んで、またハチロクの翼を大きく広げて走ろうと……。私とハチロクは…そう簡単には離れないからね。」

こなたは心にそう決め、病院で一晩明かした。

一方、かがみはこなたの家に電話をかけていた。そうじろくに話を聞くためだ。

「…あ、もしもし、こなたのおじさんですか？」

『ああ、そうだけど…かがみちゃんどうかしたのかい？』

「いや、こなたの事についてちょっと気になる事があって……こなたってよく心臓発作が起こるんですか？」

かがみは少し控えめに聞く。するとそうじろうは…。

『うん、まあ大学生になってからだがね……かなたも実はこういう時期によくこういう発作を起こしてたんだ。』

「かなたさんって…こなたのお母さんですよ？」

『ああ、こなたが小さい頃にあの世に逝ってしまったけど……多分、今回のこなたのもかなたからの遺伝じゃないかって言われたんだ、医者から……普通じゃありえないと思うけど、その通りだと思うな、俺は…。』

「……だとしても、きちんとその病気と向き合えば良いと思いますよ。」

かがみは優しくそうじろうに言う。そうじろうも電話の向こうで頷き、最後に一言。

「かがみちゃん…こなたを、公道最速のドライバーに育ててくれよ。頼んだね……。」

「はい…任せて下さい。私がきちんとこなたを育て上げます。」

かがみは心の中で強く決め、答えた。そして電話を切り、一息ついた。

「ふう……何だか、こうなるとすごく責任感じるわね……絶対に、こなたを最速の走り屋に育て上げないと……。」

かがみは責任を感じていた。しかし、かがみだけに任せていてはプレッシャーが募り、いつかがみも倒れてしまうのではないかと心配してしまう。

「はあ……何だか、体が怠い……熱でもあるのかしら……。」

かがみは体温計を取り出し、体温を測る。すると…。

「……やっぱり、何か怠いと思ったら、熱がこんなに……38度もあるじゃない……。」

かがみはその場に倒れかける。

「ダメ……体が持たない……誰か……。」

その時、つかさが通り掛かった。

「お姉ちゃん?! 大丈夫!?!」

「あ、つかさ……悪いけど……私を部屋まで運んでくれるかしら……?」

「う、うん……。」

つかさはかがみを背負って部屋へ。だが……。

「うわ…重いよ、お姉ちゃん…。」

「分かってる…分かってるから言わないでよ…こんな時まで…。」

「ご、ごめんねお姉ちゃん…。」

つかさは謝り、無言でかがみの部屋まで運んだ。そして、一息つく…。

「ふう…お姉ちゃん、薬持ってくるから待っててね。」

「うん…本当に、悪いわね…。」

「いや、良いよ。お姉ちゃんは私達のリーダーだから…。」

「ありがとう…つかさ…。」

つかさは階段を下り、薬と濡らしたタオルを持っていく。そしてまたかがみの部屋へ…。

「お姉ちゃん、入るね。」

「うん…つかさ、いろいろありがとうね…あんたの姉なのに…って言っても、双子だから姉も妹も関係ないんだけど…。」

「うん…さ、お姉ちゃん、これ飲んで。」

つかさはかがみに二粒ほどの錠剤を投与する。かがみは口に含んで

水を飲んだ。

「ふう……つかさ、悪いけど……みゆきに電話かけて、今日の遠征を延ばしてもらえないか聞いてくれる？」

「うん、分かったー。」

つかさは受話器を取り、みゆきに電話をかける。

「…あ、ゆきちゃん？久しぶりだね。」

『つかささん、お久しぶりです。今日はどうされたのですか？』

「うん？えっとね、今日お姉ちゃんがね…風邪引いちゃったみたいなんだ……すごい高熱で……。」

『そうですか……それはお気の毒ですね………という事は、もしかして遠征の件は………。』

「うん、ごめんけど…延ばしてもらえないかな？」

つかさは少々控え気味に言った。するとみゆきは……。

『…はい、つかささん達のチームがそのような状態でしたら、無理に私達の意見を通すのも悪いので……完全に回復しましたらまたお電話ください。』

「うん、ありがとうね、ゆきちゃん。」

つかさは安心したように一息つき、電話を切る。

そしてかがみに一言。

「お姉ちゃん、遠征する日延ばしてくれるって。」

「そう……良かった……。」「

かがみは安心して眠った。つかさもそれに誘われるように隣で眠りに就いた……。

一方、阪神ブルーバースの方では、また一人走り込んでいる人物が……みゆきとは違うようだが……。

「……立ち上がりは上々だな。」

阪神高速を走っている、一台の青いGTOのドライバーは「城島和也」、その人である。彼の性格は普段は心優しいが、キレるとすごく怖いとか。

……と、そんな和也の隣にもう一台来る。青いフェアレディZ（Z3）だ。

「ふ……流石俺の弟だな。よくついて来ている……だが、そう簡単には抜かせないぜ!!」

和也はアクセルを踏み込んでいく。青いフェアレディZの正体は、

和也とは兄弟関係で弟に当たる「城島和夫」だ。彼は青いZの名で知られている。

「おい、アニキよお……いくらなんでも本気出さなくても良いじゃんかよ……元々阪神高速は走らなくても良いんだから……。」

和夫はそう言いつつもアクセルを踏んで加速していった。

こうして、かがみが率いる秋名ラッキースターの初の遠征は阪神に決定した。そこを中心として活動している阪神ブルーバースとのバトルをする事になったのだが、こなたの突然の心臓発作や、かがみの体調不良などで早速遠征、という訳にはいかなかった。

果たして秋名ラッキースターは、活動を開始する事は出来るのだろうか……？

ACT. 9 漸く遠征開始!! (前書き)

最近体育祭の練習等で忙しいですが、小説の方はきちんと上げていきます。

今回は秋名ラッキースターの初遠征…という事でしたが、こなたが事故ってしまい、遠征中止という結果になってしまいました。

そして、徐々に明らかになる『新』ハチロク…イニD6をやっている皆様なら分かると思います。

まあ今回が一番グロテスクなシーンがありますので、苦手な方は軽く読み飛ばすくらいの気持ちで読んでみてください。

ACT. 9 漸く遠征開始!!

チーム発足からおよそ2日が経過した。だが、こなたやかがみがダウンし、遠征がなかなか出来ないでいた。そんな中、こなたが退院し、自宅に戻っていた。

「ふう……で、今かがみ熱出してダウンしてるんだよね？」

「ああ、そうみたいだよ。何なら、かがみちゃんの所に行ってあげたらどうだ？この前のお礼に……。」

「うん、行ってくるね。ちょうど久々に走りたかったし……って言うても普通の道路を走るからあまりスピード出せないけど……。」

こなたは車の鍵を取りもう一つ、ペンダントのような物を首からさげる。

「……こなた、遠征に出かける時とかには、必ずそれを持っていくんだよ。いつ発作が起こるか分からないから……。」

「うん、分かった……じゃ、行ってくるね。」

「おー、行ってらっしゃい。」

こなたは玄関から外へ出た。こなたがかけているペンダントは、実は開閉可能なペンダントで、その中に心臓発作を抑える作用のある、ニトログリセリンの錠剤を入れている。もし出かけ先で発作が起きた場合はこれを飲む。

「ふう……何で私こんな体になっちゃったんだろう………ま、気にしても仕方ないけど……。」

こなたはため息をつきつつも鍵をさしてハチロクのエンジンを動かし、かがみの家へ向かった。

一方、柊家では…。

「……あ、お姉ちゃん大分熱下がったね。」

「ええ、そうね。体も大分楽になってきたわ。これも本当、つかさのおかげね。ありがとう。」

「う、うん……役に立てたなら良かったよ。」

つかさは少々照れ気味な表情を浮かべた。しかし、つかさは毎晩かがみの看病を欠かさなかった。本当につかさのおかげと言っても過言では無いと思う。

「……この調子だと明日か明後日ぐらいには遠征出来そうね。」

「お姉ちゃん…でも、あまり無理しない方が良いんじゃないかな？」

「うーん……ま、様子を見て決めるわ。まあ相手の都合も考えないといけないけど……。」

かがみはこう口ずさんだ。こうして見ると、かがみの頭の中は遠征の事しか無いのか、と思ってしまう。

…と、そこに恐らくハチロクのエンジン音が…こなただ。つかさが出迎えた。

「あ、こなちゃん！もう体大丈夫なの？」

「うん、何とかねー…って何でつかさが知ってるの？」

「え？い、いや…お姉ちゃんが電話してるのを聞いて…：…今日はもしかしてお姉ちゃんのお見舞いに来てくれたのかな？」

「うん。あー早くかがみんの寝顔見たいなあ。」

こなたはいつものように何か企んでいるような感じだった。…と、つかさがこなたのペンダントに気付き、こなたに聞いた。

「…？こなちゃん、そのペンダントどうしたの…？」

「ん？これ？これはね…後で説明するよ。」

「うん…とりあえず、中に入って良いよ。」

つかさはこなたを家の中へと入れる。そして、かがみの部屋へと入っていく。

「かがみん、具合はどう？」

「あ…こなた、来てくれたのね…：…もう随分楽になったわ…：…って、

そのペンダントはどうしたのよ？」

かがみはこなたが胸に下げている、丸形に十字架が刻印された中くらしいの大きさのペンダントの事を聞いた。するとこなたは…。

「えっと、これはね…私の発作を抑える薬が入った大事なペンダントなんだ…この前みたいに急に発作が起こったりしたらいけないからね。」

「そう……じゃ、遠征の時や外出する時とかはそれを持ち歩かないといけないわね。」

「うん…でも、ホント参ったよ。こんな体になってしまつて……。」

こなたはため息をつく。そんなこなたにかがみが一言。

「…まあ、仕方ないじゃない。ただ、その病気から逃げたりしたら私が許さないわよ。」

「うん、分かったよかがみん。逃げたりなんかしないから。」

こなたはペンダントを握りしめ、答えた。

そしてしばらくして、かがみが遠征先のチームの名をこなたに伝える。

「ふう…こなた、よく聞いて。最初の遠征先のチームはね、阪神ブルーバーズって言うの。そのチームのリーダー、誰か分かる？」

「いや、分かんないよ。誰なんだろう？」

かがみは大きく一息つき、こなたに話す。

「実はね…相手のリーダーは、みゆきなの。車種は分からないけど。」

「……！？そ、そうなんだ…まさかのみゆきさん登場って訳だね…」

「でもこなた、手加減したらダメよ。記念すべき最初の遠征なんだから。」

「分かってるよ、いくら相手がみゆきさんでも手加減なんかしないって。」

こなたは少々ふざけ気味に答えた。

「本当に分かってるのかしら…まあ良いわ。とりあえずそういう事だから、明後日ぐらいには遠征に行くという事で拓也君達にも電話しといて。」

「りょーかい、かがみ様ー。」

「おい……だからその呼び方は止めてくれて何回言ったっけ？」

「ん？かがみ様がダメなら……巫女巫女かがみんとかは？巫女姿のかがみんなかなか萌えだし。」

こなたは笑いながらかがみに言う。とうとうかがみは拳を構えて凄
い形相でこなたを見る…。

「こなた……一度あんたは地獄に逝った方が良いのかしら？」

「い、いや……嘘だって、かがみん……。」

こなたは頭をかきながら言葉を正した。しかしかがみはベッドから
下り、ニコニコしながらこなたの後ろへ回ってこなたのこめかみ辺
りに拳を構える。

「ん……？か、かがみ……何をやるつもりで……？」

こなたと何故かつかさが少々焦る。するとかがみは……。

「こなたー、今からちょーっとお仕置きしないとねー。……これで
少しは反省しなさいっ！！」

かがみはこなたのこめかみをグリグリし始めた。こなたの悲鳴が響
く…。

「うわあー！！や、止めてってばかがみん！！あれは嘘だって！！
お願いだから許してえ」(泣)

「嘘でも許さないわよ！今日という今日はみっちりお仕置きよ！！
」

「嫌だあゝ！！止めてかがみんゝ！！こめかみグリグリしないでゝ
(泣)」

こなたの悲鳴が響く中、かがみは容赦無くこなたのこめかみをグリグリ続けた。

そしてしばらくして、かがみは満足したのか、グリグリを止めた。こなたはいろんな意味でダウン寸前の状態だった…。

「ひい……ふう……も、もうこれから言わないから………許して………」

こなたは床に突っ伏す。かがみもそんなこなたを見て一言…。

「……その言葉、本当わよね？」

「う、うん………ホントだってば………信じて………」

「……分かったわ。さ、立って。」

かがみはこなたに手を差し延べる。こなたも手を掴み、立ち上がる。

「ふう………さてと、拓也君達に電話かけてって事だったよね？」

「ええ、そうよ。私もみゆきに電話かけないといけないけど…。」

かがみは携帯を取り、みゆきに電話をかける。

「…あ、みゆき？今良かったかしら？」

『はい、かがみさん風邪を引いていたという事をつかささんから聞きました…もうお体の方は大丈夫なのですか？』

「うん、もう大分楽になったわ。で、遠征の件なんだけど今週末ぐらいには遠征出来そうだから今週末良いかしら？」

『はい！構いませんよ。』

「オッケー、じゃあそういう事でよろしくねー。」

かがみは電話を切る。そして一息ついた。

「どうだった？かがみ。」

「うん、良いって。さて、今週末から私達秋名ラッキースター始動よ！しっかりとコンディションを整いておいてよね。」

「分かったよ、かがみ！ハチロクのチューンもしっかりしておくから。」

こなたは自信に満ちた表情でかがみに答える。そして、こなたは自宅へと帰っていった。

一方、そうじろうは何者かと電話で話していた。

「…で、今のところはどこまで進んでる？」

『だいたいボディの作成が終わって、エンジンもそろそろ作り終わるところだ。』

「そうか……同じハチロクだけれども、形や馬力も違うやつだよな？」

『ああ、こいつはある意味最強だ。確かに同じハチロクだが、昔のハチロクと比べ馬力、形、運動性能の良さが全然違う。もし、あんなの娘が使っているハチロクが逝っちまった時は今作ってるやつを使わせてやれよ。』

「ああ…分かったよ。頼んだからな……。」

そうじろうは電話を切る。そうじろうが電話をしていた相手の方は……。

「……実はもう大部分が完成してるのだから。」

その男はガレージのシャッターを開ける。すると、ボンネットはまるでピアノのように黒く鋭い光沢があり、しかしボディ全体はハチロクの名物である白と黒のツートンカラーで塗られている。ボディの形はAE86トレノとはうって変わり、近未来のスポーツカーのような形となっている。

「こいつが、新生ハチロク……正式名は……何だったかな？ まあ作り終わった時にでもあいつに教えてやるか。」

その男はガレージのシャッターを閉め、その場を後にした。

そして、然るべき初遠征の日―。

「みんな、揃ったわよね？」

かがみが全員に問いかける。

「かがみん、オッケーだよ。みんないるから。」

「よし！なら、ちょっと一言言わせてもらおうわね。」

かがみは全員を車から降りさせ、一言言う。

「今日は、私達秋名ラッキースターの最初の遠征だから、張り切って行くわよ！バトルの点は、とりあえず無茶はしないように！良いわね？」

かがみの問いに、チーム全員が「了解！！」と返答した。そしてそれぞれ車に乗り、関西へと向かう。

車はこなたのAE86トレノ、つかさのFD、拓也のAE86レビンの三台、その他車の整備に必要な道具などが詰め込まれたワンボックスの車が一台、計四台だ。

しばらくして、意外にも早く関西に着く。

「ふうー…結構早く着いたわね。」

「あ、みゆきさん発見。」

こなたはみゆきの方向を見て、近付いていく。

「あら、泉さんお久しぶりです。」

「いや、みゆきさん久しぶり。みゆきさんの乗ってる車って何？」

「えっと、私はこの車に乗っています。」

みゆきは自分の車を指差す。

「青いNSXかあ……こりやまた速いね。」

「速いなんて、そんな……私はまだまだですよ。」

みゆきは謙虚な態度で接した。と、みゆき以外のもう二人がいる事に気付いたかがみがその二人へ近付く。

「……？みゆき、この二人は？」

「かがみさん、そちらは私のチームの一員です。」

「お前達が秋名ラッキースターという遠征チームか……俺は青いGTに乗っている城島和也だ。とりあえず、どんなバトルになるかは分からないがよろしくな。」

「ええ、こちらこそよろしく。で、そこのもう一人は……？」

かがみは和也の隣にいる、もう一人の走り屋の事を聞く。

「ん？ああ、こいつは……。」

「俺はアニキの弟分の城島和夫だ。」

その名を聞いた時、不意にこなたが振り返る。

「城島和夫って……あの青いZだよね？」

「ああ、そうだぜ。お前よく知ってんなあ。」

「いや、これって走り屋の間じゃ常識だし。いや、しかしあの青いZも一緒だなんて、走り屋としては嬉しい限りだね。」

こなたは嬉しそうに腕を組みながら話す。

「…ま、チームはこんな感じだけど、よろしくね。みゆきに和也さん、和夫さん。」

「はい、かがみさん、こちらこそよろしくお願いします。」

みゆきが礼儀正しく対応をすると、城島兄弟もそれに続いた。そしてみゆきはバトルの際のルールを簡単に説明した。

「かがみさん、今回の対決では、まず初めに下りからやらせていただきますね。下りや上りでは2本走り、どちらが先にゴールに着いたかで決着を付けましょう」

「分かったわ。って事は……こなた、早速出番よ。」

「おおっ！早くも私の出番ですか！まあ任せたまへ。……って、プラクティスの時間は？まさか取ってないのかな？」

こなたは疑問に思い、みゆきに聞く。

「泉さん、プラクティスの時間はしっかり取ってありますよ。」

「そっか、なら良かった。」

こなたは一安心する。そして、つかさとこなたがそれぞれプラクティスに入る。つかさが上り、こなたが下りだ。なお、つかさのFDの助手席にはかがみがり、こなたのハチロクには拓也が乗る事にお互いの走行ラインをチェックするためだ。

「…よし、じゃあ行くわね、みゆき。」

「はい、プラクティスなので下見をするつもりで気をつけて行ってきてくださいね、泉さんも。」

「分かったよ、みゆきさん。それじゃ、行ってくるからね。」

こなたとつかさは車を発車させ、走っていった。その姿を見た巧と裕介は…。

「すげえなあ……まるで俺達とは全然雰囲気が違うっすね、先輩。」

「ああ、そうだな……（くーっ、拓也の奴…あの子の隣に座りやがって……羨ましい……）」

裕介はまた何か良からぬ事を考えているようだ…。と、それに気付いた巧が一言。

「先輩ー、また変な事考えたりしてないっすよねー？」

「い、いや、考えてなんかいないぞ俺は！！」

裕介は巧の言った事を真っ向から否定した…。

…一方、下り担当のこなたは、真剣な表情で走っていた。特に、コーナーに差し掛かる時はヒール&mp;トウを使い、走り屋らしい顔をしている。

「…………っ！」

こなたは勢いよくハンドルを切り、ハチロクを横に滑らせドリフトをする。それを助手席から見ていた拓也は…。

「（泉さん…やっぱりすごい人だ…表情がいつもの時と全然違う…）」

拓也は一瞬どう言葉をかけたら良いのか分からなかった。しかし、気を取り戻し、こなたに一言。

「泉さん、やっぱり凄いよ。オレなんかとは比べものにならない…。」

拓也はこう言葉をかけた。しかしこなたは…。

「いや…拓也君、まだまだこんなんじゃないやダメなんだ……もう少し…もう少し速くならないと……。」

「泉さん……。」

それからこなたは黙り、黙々と走り続けた。

一方、上り担当のつかさは……。

「…つかさ、勝敗の分け目はこのストレートだからね。ここであるたのFDのパワーが発揮されるから、ここはアクセル全開で走りなさいよ。」

「うん、でも曲がるところとかはどうすれば良いかな？」

「そこはブレーキングをしっかりとする事。アクセルワークも重要だからその2つに気をつけなさい。あとはとにかく相手を抜かせなければ問題無いわ。大事なのは焦らない事よ。」

流石湾岸の女王、的確なアドバイスでつかさを指導していく。つかさはかがみに言われた通りに運転してみた。すると…。

「…あ！すごい！！こんなに曲がれるんだ！！」

「つかさ、その調子でヒルクライムバトルの方もよろしくね。」

つかさはかがみの指示を受け、軽快に走っていった。

そして一通りして、こなた達が戻ってくる。こなただけは少々自信なさ気な表情をしていたが…。

「お二人ともお疲れ様です。…泉さん、どうかなされましたか？」

「いや…久しぶりに走るからかもしれないけど、前と比べて全然遅いんだ…このバトル、勝てるか正直不安になってきたよ……。」

こなたは暗い表情をする。そんなこなたに、かがみが近付いて一言…。

「こなた…大丈夫よ、もっと自分に自信を持ちなさい。あんたの下りでの速さはハンパじゃないんだから。」

「かがみ…そだね。いつもの私みたいに気楽でいないとね。ハチロクは絶対力を貸してくれるはずだから、頑張るよ。」

こなたは自信を取り戻し、ハチロクに近付く。

「ハチロク…お願いだから力を貸してね。」

こなたは一度目を閉じ、ハチロクに言い聞かせて目を開き、振り返って一言。

「さあ！早くバトルしよっ！！」

「泉さん……はい！では、今回のダウンヒルでは…和夫さん、お願いします。」

みゆきは青いZを一番手に出してきた。気合い十分だ。

「秋名のハチロク……とりあえずよろしくな。」

和夫は一礼し、車に乗り込む。こなたもハチロクに乗り、両者の車のエンジンが鳴り響く。

「…今日は遠征一日目……気合い入れていこう。」

こなたはアクセルを踏んでタコメーターのレッドゾーンまで針を進める。十分過ぎるほど気合いがある。

「…それじゃスタートするぞ！」

巧がカウントする。

「5、4、3、2、1……スタート！！」

両者勢いよくスタートし、一列に並ぶ。タイヤの滑るような音が響く…。

「和夫さん……悔いのない走り方をしてくださいね…！！」

みゆきは心の中でこう言い聞かせた。一方、かがみは…。

「こなた…焦る必要は無いんだからね。あんた自身の走りをしてくればそれで良いわ。」

かがみはもはやチームの総合的なリーダーだ。チームの一人一人の状態をしっかりと見ている。

一方、走り出しが順調なこなたは……。

「……走り出しは良いけど、相手があの子の青いZだからなあ……でも、下りで負ける訳にはいかないね。」

こなたはいろいろと考えながら走っていた。青いZこと城島和夫は、真剣な表情でこなたのハチロクを見つめる。

「秋名のハチロク…実力がどのくらいか見せてもらうぜ！」

和夫はハンドルをしっかりと握り、こなたに付いていく。

今の時点での先頭はこなた、後ろは和夫だ。青いZと白と黒のツートンカラーの『旧』ハチロクとのバトルはどういうものになるだろうか…。

かがみはこのバトルの結果を予想する。

「このバトル…多分こなたがギリギリで勝つわね。」

「え？お姉ちゃん、それ本当？」

つかさが疑問に思い、かがみに聞く。

「だから…予想よ、予想。ただ、あのハチロク何かが引つかかるのよね……。」

「かがみさん…恐らくエンジンブローが起こるのでは無いか、という事ですよね？」

「そうよ……ハチロクのエンジン音が少しおかしいわ。もしかしたら……。」

かがみは心配していた。ハチロクのエンジン音がやけにうるさい、明らかに普通のエンジン音ではない。

だがあまり気にしていても仕方がないと、かがみがい、何も起こらない事をひたすら願った。

一方、こなたと和夫は真剣に走っていた。

「…さて、俺のZの秘密を教えてやる。簡単に終わらせやしないぜ。」

和夫はこなたのハチロクのすぐ後ろに付く。

「うわ…もう青いZが食いついてきているよ……でも、焦らずしっかり走ろうと……。」

こなたは張り付かれているにも関わらず、かがみの言った事を守り走っている。しかし、ちょっとした異変にこなたは気付く。

「…おかしいなあ…アクセル全開にしてもスピードがあまり出てないような気がするんだけど………まあ気のせいかな。」

こなたはハチロクの異変を自分の気のせいにして、軽く受け止めた。

バトルは中盤に入り、依然こなたが先頭である。

「さて…そろそろ抜かせてもらおうとするか。行くぞ！俺のZ！！」

和夫はこなたのすぐ隣に付く。こなたは徐々に焦り始める…。

「…！！ま、まずい…！！そう簡単には抜かせないよ…！！」

こなたはアクセルを全開にする。エンジン音は多少変ではあったが…。

ハチロクと青いZが並び、次のコーナーでは同時に曲がった。ブレーキランプが点くタイミングもほぼ同時だ。

しかし、パワーの差とはこの事であろう、青いZがハチロクの前へ出る。

「追い抜いてしまえば俺の勝ちだ。このまま突っ走るぞ！！」

「焦らなくて良い…焦らなくても良いんだ………追い抜くポイントを見つめよう…。」

こなたは意外に冷静に運転していた。しっかりと青いZを見つめる。しかし、またしてもハチロクの異変を気にする。

「何だか…かなり車が揺れてるね……ホントに大丈夫かな、ハチロク……。」

こなたは流石におかしく思いつつも運転を続ける。

「…これでどうだっ!!」

こなたはライトを消灯し、ブラインドアタックを仕掛ける。その行動に和夫は一瞬焦る。

「消えた…!? ハチロク、まさかちぎられたとか…いや、ある訳無い…さっきまでべったり後ろに張り付いていたんだ…だとしたらどこにいるッ…!?」

和夫はバックミラーを見ながら運転を続けた。こなたは、暗闇の中でもはっきり青いZを捉え、隣に出る。そして半分以上前に出たところで再びライトを点ける。

「…!! 驚いたぜ……だがまだバトルは終わっていない!!」

こなたと和夫はそれぞれアクセルを全開にする。しかし、こなたのハチロクの小さな異変は、大きな異変となって現れる…。

こなたのハチロクのボンネットから白い煙りが……。

「ボンネットから煙りが出てる…? まずい…ひょっとしたら…!!」

しかし、こなたが気付いた時には遅かった。ハチロクのエンジンが

大きい爆発音を上げ、車体を大きく曲がらせる。和夫は不審に思った。

「おい、何やってんだ？あのハチロク……。」

和夫はこう思いつつも運転を続ける。一方、こなたは懸命にコントロールしようとした。

「やばい……このままじゃ、壁にぶつかってしまおうよ……!!なんでハンドル効かないの……!!?」

こなたは壁に衝突する瞬間までハンドルを握っていた。しかし、ハチロクは勢いよく壁に衝突する。

「うわああああー!!!!!!」

こなたの悲鳴は外にまで響き渡った。フロントガラスの割れる音がし、更にその割れかかったガラスに恐らくガラスの破片がこなたの体に刺さった時に出たこなたの血が付着する。そしてハチロクは停止した……。和夫は車を止め、急いでこなたの元へ向かう。

「おい……大丈夫か!?」

「な、何とか……でも、私のハチロクが……。」

こなたは自分は大丈夫と言っていたが、頭から血を流している。ハチロクはそれを上回る、かなり残酷な形に変わり果てていた。フロントガラスにはこなたの体から出血した血が大量に付いている。ボディは原形をとどめてはいない……。

「とりあえず、アニキ達に連絡するから、待っててくれ！急いで済ますから！！」

和夫は急いで携帯を取り出し、電話をかけた。こなたもハチロクから足を引きずりながら出て、座り込む。

「…アニキ！大変だ！！バトル中に秋名のハチロクが事故った！！」

『何だって…？今すぐそっちに向かう！』

「おう、出来るだけ早く来てくれ！」

和夫は電話を切った。こなたは呼吸が荒くなっている。

「はあ……はあ……やばい、薬飲まないと……。」

こなたはペンダントから薬を取り出し、飲んだ。そして呼吸は落ち着く。

「私のハチロク……ダメだ……これじゃもう動かないよ……。」

「確かに……エンジンも完全に逝っちまってる……。」

こなたと和夫はしばらく黙り込む。

そして、和也達がたどり着く。

「こなた！！うわっ……ダメ……これは酷すぎるわ……。」

かがみはあまりの酷さに一瞬目を逸らした。こなたは立ち上がり、

足を引きずりながらかがみの元へ…。

「かがみ……ごめんね……勝とうと思ったんだけど……うう……
…ダメ……みたい……。」

こなたは痛みには耐え切れずひざまづく。そんなこなたにかがみは優しく言葉をかける。

「こなた…今は勝負とか関係ないわよ……とりあえず、今日の遠征は中止にするから……。」

かがみはみゆきに話を持ち掛け、そして承認された。そしてみゆきはこなたに近付き、一言。

「泉さん…今すぐ私が通学している大学病院に行きましょう。」
みゆきはこなたを背負い、車に乗せて病院へと向かった。ハチロクはレッカー車を呼んで、処理してもらった。

しばらくして、意外にも軽い怪我で済んだこなた。そうじろくに連絡を取る。

「お父さん…ごめんね……ハチロクが壊れちゃった……。」

『こなた…まあそう落ち込まなくても良いよ。既に新しい車を作っているから。』

「……どんな車？」

『……新、ハチロクだよ。』

そうじろうは静かに話す。

「新ハチロク…？何それ？」

『まあ見てみれば分かる。同じハチロクだからな。』

確かに、新ハチロクも旧ハチロクと同じように白と黒のツートンカラー、しかし性能はまるで違う。

『…旧ハチロクの良さを残しつつ、現代風にチューニングされた新ハチロク……これはある意味公道最速だよ。』

「そうなんだ……とりあえず、頭を軽く怪我したくらいで、包帯巻いてもらったからもう家に帰るね。その時に見せてもらうよ。」

こなたはそう言い残し、電話を切った。

「新ハチロク……一体どんなのだろ……。」

こなたは期待と不安を感じていた。どんな車かは気になる。しかしハチロクの特徴が消えていたら…そんな事を思っていた。と、そこにかがみが…。

「こなた…大丈夫？歩ける？」

「…ちよつと、かがみの手を借りたいかな……ごめんけど……。」

「…分かったわ。しっかり掴まって。」

かがみはこなたを背負う。するとこなたは、良い意味で子供のよう
に眠った。そのこなたの寝顔を見たかがみは……。

「こなた…あんたは、良い意味でも悪い意味でも、変わらないわね
……でも、それがあんたらしいわ……。」

かがみは少々泣きそうな表情を浮かべる。しかし涙を堪え、病院の
外まで運ぶ。

「ふう……とりあえずこなたをワンボックスカーに乗せるわよ。」

かがみはこなたをワンボックスカーに乗せた。そしてかがみ自身は
つかさのFDに乗り込む。

「つかさ、やっぱり次回から私のGTRも乗っていくわね。だから
今日だけ乗せて。」

「うん、全然構わないよ。…で、こなちゃんの様子は……？」

「今は気持ち良さそうに眠ってるわ。子供みたいな寝顔でね。」

かがみは多少笑ってつかさに言う。つかさも笑顔を浮かべて話す。

「そっか……なら良かったね。だけどこなちゃん、相当辛いと思う
んだ……あの事が……。」

「ハチロクを……翼を失った事でしょ？」

「うん……これからこなちゃん、どうするつもりかな？」

「さあ……すぐに立ち直れるかしらね……。」

かがみはこなたがすぐ立ち直れるかどうか不安を抱いていた。そして、かがみは皆に一言……。

「じゃあみんな、今日のところは撒収！！みゆき、本当にごめんけどまた後日バトル受け付けてくれない？」

「ええ、構いませんよ。では、お気を付けて。」

かがみ達秋名ラッキースターは阪神ブルーバーズを後にした。

こうして、初の遠征バトルは壮絶な幕開けとなった。そうじろうが既に発注している『新』ハチロクとは一体どのようなものだろうか……？

そして、こなたは『新』ハチロクの力を受け入れる事は出来るのだろうか……。

ACT. 10 新ハチロク（前書き）

今回で大きなイベントは一旦終了です、多分ですが……。こなたに続き、かがみも新たな車：R35型GT-Rに乗っていきます。

R35型GT-Rは自分も大好きでして、しかも好きな色は黒……。かがみ様と同じです（笑）

：と、作者の話なんてどうでも良いので話を進めると、今後もしろんな車を出していきます。なお、外車は今のところ出す予定はありません（外車出しちゃったら公道最速伝説が終わってしまうのでw）

ネタが浮かばなくありますが、頑張って書いていくので応援よろしくです（＾－＾）／

ACT. 10 新ハチロク

秋名ラッキースターの初遠征……それは壮絶な幕開けとなった。こなたのハチロクがエンジントラブルを起こし、壁に衝突したのだ。もはやそのハチロクは原形をとどめておらず、走る事など出来なかった。

こなたは今、車に揺られ自宅に帰っているところだ。

「……しかしあれは酷かったっすね、先輩」

「ああ……あまりにも酷かったな……（俺人にもよるけどグロい映像見るの案外好きとは言えねえなあ……）」

裕介がこう思っていると、すかさず巧が話をする。

「せんぱーい、また何か変な事考えてませんかー？」

「な！何故分かった!？」

「いや、だってこなたの寝顔ずっと見てるじゃないっすか、先輩」

確かに、裕介はこなたの方をずっと見ている。本当にいやらしい男だ。

「……まあ先輩が見とれるのも仕方ないと思いますがね。普段の時と比べてこんなに可愛いっすから……」

「だろ！可愛い過ぎてヤバいだろ？」

「先輩の頭の方がヤバいつす」

巧は裕介にズバっと言った。

「な……もういい、お前は運転に集中してくれ……」

裕介はずいぶん傷ついた様子で巧に言葉をかけた。

一方、こなたは眠っていても何かを考えていた。

「（新ハチロク……一体どんなのだろ……ホントに……）」

こなたは新ハチロクの事を考えている。やはり原形と違えばなかなかその力を受け入れる事は難しいのか……。

「（でも……今の私にはもう車が無いから……そんな事言ってもらえないね。さてと、そろそろ起きよっと）」

こなたは気持ちを切り替え、そして起きた。

「ふわあああ……」

「あ、こなた……起こしちゃったか？」

「あ、巧君……いや、もうずいぶん寝たからね。こりや徹夜でネットゲー出来るよ」

こなたは冗談半分で笑いながら言っていた。

「はは……ネットゲーな……俺も高校の時はやってたぜ」

「へー、そーなんだ。私も高校の時からやってるけど、今考えたらネットゲーのプレイ時間凄かったよ。普通に徹夜だったし」

「まあ俺は廃人になりかけてたからなあ…」

こなたと巧の話はネットゲーの話題で盛り上がった。

「まー、今ではネットゲーよりも走りの方かな。チームのためにももっと速くなりたいし、何より楽しいからね」

「そうか…：良いなあ、こなたは。もう十分過ぎるほど速いのにな、まだ上を目指してるなんて…：俺なんてまだこなたの足元にも及ばないぜ」

巧がため息をつくとき、こなたが一言。

「…：そんな事無いよ、巧君。キミだって十分速いよ。ブレーキとアクセルの切替が上手いし、ハチゴは加速力あるからね」

「こなた…：ありがとう。俺もこなたと同じようにもっと速くなるよ」

巧は決心した。そして車は無事埼玉まで戻り、こなた達は帰宅した。

「ただいまー、お父さん」

「あ、おかえりこなた。早速だが新ハチロクを見てみたらどうだ？ガレージに停車してあるから」

「うん、どんなのか見てみたいな」

「よし、じゃあ行くぞー」

そうじろうはガレージの鍵と新ハチロクの鍵を取り、こなたを連れてガレージへ向かった。

そしてガレージのシャッターの前に立つこなたとそうじろう。

「こなた…これが新ハチロクだよ。よく見ておいてくれよ」

そうじろうはシャッターの鍵穴に鍵をさし、開けていく。こなたはそれを息を呑んで見守る。

「（もうすぐ…もうすぐで新しいハチロクと出会える……どんなのかちよつと楽しみになってきたなあ）」

こなたは今は期待の方が大きかった。そしてシャッターは全部開かれ、そうじろうが新ハチロクを運転して前に出す。

「ふっふっふ…これが、新ハチロクだぜ、こなた」

そうじろうはカッコつけてこなたに話す。しかしこなたの対応は冷たかった……。

「お父さん、カッコつけなくて良いから」

「ギクッ!! こなたあ、何もそう言わなくても良いじゃないかあゝ（泣）」

そうじろうは泣きながら車を降りた。そしてこなたは、新ハチロクをしっかりと見る。

「これが……新ハチロク……」

こなたは新ハチロクのボンネットに手を置く。

「凄い……凄いよ、お父さん!!」

「だろう？ こなたに喜んでもらえると、お父さんも嬉しいよ」

「お父さん、この車の名前は？」

「その車の名は、FT86。今までこなたが乗っていたのはAE86だよ」

「FT86……言い換えて新ハチロクって訳だね」

こなたは一息つき、そうじろくに聞く。

「お父さん、今からこれで走ってきても良い？」

「ああ、構わないぞ」

こなたは運転席に乗り込み、ハンドルを握る。するとこなたは、更に走り屋らしい表情に変わった。

「おお……ホントに凄い……何か、いかにも新ハチロクって感じだね」

「こなた、これを持って行きな」

そうじろうは水が入った紙コップをこなたに差し出す。

「紙コップ……分かった、水がこぼれないようにドリフトしてって事だよね？」

「そう、水がこぼれないようにドリフト出来ればかなり上達したと言えるからね。でもこなた、無茶だけはしちゃダメだぞ。まだ頭に包帯巻いてるんだから」

「うん、分かったよ。それじゃ、行ってくるね」

こなたは車を走らせ、秋名へと向かった。

一方、柊家では……。

「…さて、私のGT-Rも走らせるかあ。つかさ、ちょっと秋名で走ってくるわね」

「うん、気をつけてね」

かがみは頷き、GT-Rのエンジンをスタートさせる。

「何か、今日は妙な胸騒ぎがするのよね……こなたが新しい力を手に入れたかもしれないという事に」

かがみはこう呟いた後、車を動かし勢いよく秋名へ向かった。これが、思わぬ形で実現された、こなたとのバトルになる…そう感じていた。

一方、新ハチロクに乗るこなた。

「…コーナーからの立ち上がりが凄い……まるでハチロクじゃないみたいだよ」

こなたは新ハチロクの性能を絶賛した。

そしてしばらく走り続ける事数十分、こなたのハチロクの背後に黒い影が……。

「ん？ ずいぶん煽ってくるねえ…車種は………って!？」

こなたは一瞬驚いた。黒い影の正体は、GT-Rだった。恐らくかがみのものであろう。

「か、かがみのGT-R!？ む、無理だよ! かがみになんか勝てる訳無いじゃん!!」

こなたは焦って運転を誤るも、すぐに立て直す。一方、後ろに付くかがみは…。

「…やっぱりこの車……間違いない、こなたのだわ。新ハチロクってこの車の事だったのね。勝負よ、こなた!!」

かがみは真剣な表情で走り出す。対するこなたは…。

「ちょ……マジでやるつもり！？かがみに勝てるはずない………けど、やれるだけやってみよう。真剣勝負だよ、かがみ！！」

こなたもやる気を起こし、走り出した。こなたとかがみのバトルが、今ここに実現した。

最初の緩いカーブは二人とも綺麗に曲がりきる。ここまではこなたが先頭である。

「…まだまだ、これからよ」

かがみはシフトチェンジを素早く済ませる。こなたもほぼ同時期にシフトチェンジした。

「…流石かがみんだね、ピッタリ食いついてくるよ…」

こなたは多少のプレッシャーを感じつつも走り続ける。

「…どこまでその調子でいられるか……たっぷりプレッシャーを与えて終わらせてあげるわ！」

かがみはアクセルを強く踏み、こなたのハチロクにべったりとくつつく。しかしこなたは…。

「…かがみ、そうやって崩そうとしても無駄だよ！」

こなたは次のカーブで、タイヤを溝に落とす。

「…溝落としを使うっていう作戦ね。だけどやっても無駄よ」

かがみもタイヤを溝に落とし、依然こなたに張り付く。しかしこなたは焦った様子は無く、逆に何かに気付いたような表情をする。

「このハチロク…ストレートでの伸びがかがみのGT-Rよりも速い……ここはわざとかがみに抜かせてみようつと」

こなたは溝落としを止めた。するとかがみは容赦なく加速する。

「こなたの奴、諦めたわね。じゃあ、このまま抜かせてもらおうわよ！！」

かがみは先頭に出る。しかし、こなたはライトを消灯する。

「なるほど…ブラインドアタックをやるうって事だったのね。だけど、音をよく聞けばどこにいるかは分かるはず」

かがみは耳を澄ます。しかし、ハチロクのエンジン音は聞こえない。

「……おかしいわね、もうちぎられたのかしら？」

かがみは少々不審に思いつつも走り続ける。一方、こなたは…。

「さて……終わりにさせてもらおうよ、かがみ」

こなたは勢いよくアクセルを踏む。そして一気にかがみの前へ。新ハチロクはスピードを出してもあまり音が出ない。そのため、かがみは気づかなかったのだ。

「これが…新ハチロクの力だっ！！」

こなたはライトを点灯する。するとかがみはかなり驚いた表情をした。

「な……いつの間に前へ!？」

かがみは少々焦ったが、再びハチロクを追い抜こうとする。

「だけどころ新しかったって、所詮はハチロク、パワーの差でこっちが有利よ!!」

かがみは必死な表情であったが、こなたはかなり余裕の表情であった。

「…分かりやすいなあ、かがみは。…負けるのがそんなに嫌なのか？」

こなたもアクセルを全開にする。最初は両者とも並んでいたが、かがみのGTRがアウト側に膨らんでいく。

「くっ…! 何故アウト側に膨らむのよ!!」

かがみはだんだん焦って怒りを感じる。

「…パワーの差で勝とう、なんて事は思わない方が良いんだけどねえ…まあ場合にもよるけど」

こなたは上手くステアリングを切る。かがみもステアリングを切ろうとしたが、かがみの車は大きく曲がる……。

「……………っ!?!? そ、そんな……………まさかスピンするとか……………無い

わよね……………?!」

かがみはかなり驚いた表情を見せる。かがみの目から涙が出そうだ。

「かがみ……私の勝ちだね。悪いけど、勝負の世界だからしょうがないよ……」

こなたはかがみの事を思いつつも容赦なく走り去った。一方、かがみのG T—Rはスピンする。

「私が……こなたに……負けた……? 私、もう本当に走り屋としてダメかもしれない……ならいっその事、私のG T—Rと一緒にあの世に逝ってしまおうかな……………」

かがみはハンドルから手を離し、最後に一言…。

「こなた……つかさ……拓也君……巧君……裕介君………今後の秋名ラッキースターを………お願いね………それじゃ、私はもう逝くわ……………さよなら……………」

かがみは涙を流しながら目を閉じた。タイヤの滑る音が響き、やがてかがみの耳には何も聞こえなくなった……。

しばらくして、かがみは自分が今どこにいるのか分からなかったが、

何も聞こえないのは恐らくあの世に逝ったものだと考えていた。

(…私、もうあの世に逝ってしまったのね……こなた達には悪いけど………)

かがみは心の中で、何もかもが終わったように一息つく。しかし、そんなかがみの耳に、聞き覚えのある声が……。

「……がみ………きて………」

(…この声……でも、私はもう逝ってしまったはず………)

かがみは単なる幻聴だと信じて無視した。しかし、その声はだんだん大きくなる。

「………かがみ………きてよ………」

(…やっぱり、何か聞こえる………こなたの声かしら………?)

かがみはその声に耳を傾ける。するとはっきり聞こえた。

「かがみ！起きてよ！！かがみが逝っちゃうなんて……有り得ないよー！！」

(…こなたの悲しそうな声………こなたの声が聞こえるって事は、私は………)

かがみはまさかと思い、体のあちこちを動かそうとする。

「かがみ……たった一、二回バトルに負けただけで、すぐ諦めちゃう

の…？」

こなたは既に涙が出ていた。

（こなた…そうね、たった一、二回負けたくらいで諦めてるようじや、リーダーとして務まらないわ……ここはこなたのためにも、逝く訳にはいかない…!!）

かがみは意識を取り戻していき、そして…。

「……かがみ！？分かる！？私だよ！こなただよ！！」

「こな……た……私は一体……？」

「かがみは…あの後まる1日気を失って眠ってたんだよ……ホントに逝っちゃったかと思ったよ……」

こなた涙ぐみながらかがみに話す。そんなこなたにかがみは、優しく話す。

「そんなにも眠ってたの……こなた……心配かけてごめんね……」

「いや、良いよ……かがみが生きてるって分かっただけでも……」

こなたは涙が止まらないようだ。そんなこなたをかがみは優しく抱擁する。

「こなた……本当にごめん……今思い出したけど、秋名ラッ

キースターは全員揃ってなければならぬという決まりがあったわね……私ったら、何を考えてるのかしら……」

かがみとこなたはしばらく抱き合ったまま黙っていた。

そして、こなたが気づき離れる。

「ごめん、かがみ……ずいぶん長い間ハグしてたね…」

こなたは少々照れ気味に話す。かがみも顔が赤かった。

「…ほ、本当に恥ずかしいわね……」

そして二人はまた黙る。かがみ達がいる場所は病院の中、そして雨が降っている。

…と、こなたがかがみに一言。

「かがみ……G T－Rはリヤがやられちゃってるよ…残念だけど…」

「そう……ひよっとしたら、私を守ってくれたのかもしれないわね……自分の身を犠牲にして……」

「そうかもね……けど、これからどうするつもり？ かがみ……」

こなたはかがみに聞く。するとかがみは…。

「…次から次に変わるけど…実はこんな事もあるかと思って、他

の車を用意しているの」

「…どんな車？」

かがみは大きく一息つき、こなたに伝える。

「…同じGT-Rだけれども、GT-Rの中ではトップクラスの性能を誇る、R35型GT-Rよ。もちろん、色は黒でね」

「へえ…確か今までのがR34型だったよね？」

「そうよ。正確に言えば、Vスペック^{ニユル}Nurだわ」

「そっか……それにしても…」

「何よ？何か文句ある？」

かがみはこなたに聞く。するとこなたは笑いながらこう答える。

「かがみん黒好きだねえ。心の色と同じじゃない？」

「うっさい！！悪かったわね！！」

かがみは呆れてそっぽを向いた。こなたは頭をかきながら言葉を正した。

「はは……かがみんはいつまでも変わらないね……冗談で言っただけよ」

「変わらなくて悪かったわね！あんたも人の事言えないわよ！」

「もー、そんなに怒らないでよー。嘘だって言ってるのに」

流石のこなたも少々かがみの態度に呆れていた。
しばらくして、落ち着いた二人…。

「はあ…：冷静に考えたら本当に私何も変わってないわね…」

「悪く言うつもりは無いけど、それがかがみらしいよ」

「…まあそうかもね」

かがみはこなたの話に頷く。そして、かがみは一息つく。

「…さて、そろそろ帰らないと」

「かがみ、乗せてくよ」

「お、じゃあ頼むわ。新ハチロクの乗り心地がどんな感じか知りたいし」

「ホント、新ハチロクのシートは凄いよ。何かもう言葉に出来ないよ」

「へえー、それは楽しみだわ。じゃ、もう帰りましょ」

かがみは立ち上がり、帰る支度をする。そして、病院を出てこなたの車に乗り込む。

「うわ…：何だか近未来のスポーツカーって感じね。タコメーター

なんか特にそれを感じさせるデザインだわ」

「でしょ？ まあ一番驚いたのはこれに乗ってバトルをした最初の相手がかがみだって事だけどね」

こなたは得意げにハンドルを握る。そして、ゆっくりと走り出す。

「…なるほどね、だからブラインドアタックされても気付かなかった訳ね」

「そう、このハチロク昔のと比べて音が静かになってるんだー。プリウスほどじゃないけど」

こなたは運転しながらかがみに話す。

「…プリウスって言うのと、あれでしょ？ ハイブリッドカーだったわよね？」

「うん、まああれもチューニングしたら速くなりそうなんだけどね」

「いや…チューニングしてパワー上げたりしたらハイブリッドカーの意味無くなっちゃうじゃないのよ、全く………」

「そーでした、こりゃ失礼」

こなたは軽く笑って過ぎた。

そして、しばらく走り続ける事数十分、かがみの家へとたどり着く。

「じゃあこの辺で良いわ。とりあえず、遠征は週末ぐらいにしよう
と思ってるから体調調整しておいてね」

「分かったよ、かがみ。それじゃあまたね」

こなたは車を走らせ、その場を後にした。そしてかがみはガレージ
へ……。

「…ようやく、あんたが活躍する時が来たわよ……しっかり頼むわ
ね」

かがみはR35型GT-Rのボンネットに触れる。そして独り言を
呟く。

「…GT-Rは、誰にも負けない……ただ、たった一人……こなた
だけは別だけど………」

かがみはそう言い残し、ガレージを閉め、家の中へと入っていった。
その際、GT-Rのエンブレムが輝いて見えたが……。

こうして、こなたの新ハチロク始動は、かがみとのバトルを引き起
こし、そのバトルにこなたが勝利した。しかしかがみはその後気を
失い、早朝まで眠っていた。

こなたが旧ハチロクを失い、新ハチロクに乗り換えると、かがみも
また新たな車へと乗り換える……こなたが進化していけばかがみも
進化していく、という事だ。

二人のエースは、互いに最速を競うために、今後チーム内でバト
ルを続ける……。

ACT. 11 白いFCと黄色いFD (前書き)

更新かなり遅れました (汗)

今回こそ遠征再開……と思いきや涼介と啓介とのバトルとなつてしまいました。

涼介や啓介のキャラが若干またはかなり崩れているかも知れませんがご了承を (へーへ；

ACT. 11 白いFCと黄色いFD

かがみとのバトルの後、こなたは久々に休養を取っていた。ここま
で、いろいろな事がチーム内で起こっていたが今日ばかりは特に変
化は無く、平穏な日々……のはずだった……。

「ふう……忘れかけていたけど、私の目的はもう一つ………紅い悪
魔に………ゆい姉さんに勝つ事だったね」

そう……思えばこなたはあの紅い悪魔こと成美ゆいに負けてからより
いっそう走りに集中していったのだ。だが、ゆいのランエボは通常
のものと比べ、格段に違う。ランエボは通常4WDの動きしかしな
い。当たり前前の事ではあるが……。

しかし、ゆいのランエボは違う。ゆいのランエボはチューニングに
よって通常のランエボと違う、MR車の動き、もしくはそれ以上の
動きをする。コーナーからの立ち上がり速度がかなり速く、例えば
コーナーを20km/hで曲がりきった時からの立ち上がりは僅か
5秒で200km/hまで上昇するという異常な加速力を誇る。そ
んなランエボにこなたは勝てるのか……。

「……ダメ、考えれば考えるほど勝てる自信無くなってくるよ………今
はとりあえず遠征の方に集中しようつと………」

こなたは紅い悪魔の事を振り切り、チーム遠征だけに集中する事に
した。

一方、柊家では……。

「ふう〜……さて、落ち着いたしそろそろ遠征再開しようかな」

かがみは携帯を取り、みゆきに電話をかける。

「…あ、みゆき？こっちはもう大分落ち着いたから今週末にまたそっちに遠征行っても良いかしら？」

『はい、構いませんよ。正々堂々、勝負しましょう』

「ええ、手加減しないわよ」

かがみは電話を切る。そして一息つく。

「さて……つかさ、今から秋名で3本走らない？私のR35型GT—Rも走り込んで調整しとかないといけないし」

「うん、良いよ♪」

つかさはノリ気で答える。そしてかがみとつかさは外に出て車に乗り、秋名へ向かおうとしたがつかさが何かに気づいたようにかがみに言った。

「あ、こなちゃん誘わない？」

「お、良いわね。こなたも走らせておかないと腕が落ちるから誘いましょ」

かがみは携帯を取り、こなたに電話をかける事に。

「…もしもし？こなた？今から秋名に走りに行こうと思うんだけど、

一緒に行かない？」

『え？うーん……まあヒマだから良いよ。今から行くね』

「おー、なるべく早く来てよね」

かがみは電話を切る。そしてつかさとかがみは車に乗り、秋名へ向かった。

しばらくして、こなたはかがみ達と合流する。何故かそこには巧、裕介、拓也の姿があった。

「ふう〜…何で拓也君達まで？」

「あ、いや…それは……」

拓也が多少困っていると、かがみが会話に入ってくる。

「おっすこなたー、巧君達は偶然ここにいたから、一緒にどう？って誘ったのよ」

「へえ……ま、別に良いけどね」

こなたは頷いて車に乗り込もうとすると、巧が小さく一言…。

「ホントは無理矢理なんだけどな……流石かがみさんは凶暴だって

思ったぜ……」

「何か言ったかしら？巧君」

かがみは拳を構えながら笑顔で巧の方を向く。すると巧はすぐに言葉正す。

「な、何でも無いっすりーダー！！」

「そう、なら良いけど……言葉には気をつけるようにね」

かがみは拳を解き、落ち着く。…と、そこにある2台の車のエンジン音が聞こえる。その音は、こなたとかがみは何者かはあらかた気付いていたが…。

「かがみ……この音………」

「ええ……間違いないわ……何であいつらがここに来るのか分からないけど………」

かがみは音が聞こえる方を向く。すると、その車はだんだん姿を現す……白いFCとイカつい黄色のFDが向かってくる。つかさも流石に気がついたようだが、巧達は分からなかった。

「お、お姉ちゃん……あれって………」

「つかさ……ま、まあ大丈夫だよ。いきなりバトルを申し込んだりしないと思うわ」

「かがみさん……あの2台の車は……？」

「え？拓也君知らないの！？」

こなたが少し驚いた様子で拓也に聞く。

「え？いや、まあ……知らないけど……泉さんはどんな人か知ってる？」

「そりゃあもう有名な人達だよ、走り屋の世界では」

こなたは腕を組みながら話す。かがみも話に入ってきて、冷静に一言。

「赤城の白い彗星、高橋涼介……そしてその弟の、高橋啓介……二人をまとめて、高橋兄弟だと言われていて、涼介とは昔やり合ってたわ……その時私は今では考えられないくらいにボロボロに負けてたけどね……」

「へえ、かがみもそんな時あったんだ……って昔っていつ？」

「免許取って1年経った時くらいかなあ……確かあんたも同じ時に取ったと思うけど」

「あー、あの時かし。それから1年経ってあの涼介さんとやり合った訳かあ……」

こなたは思い出していた。1年程であの涼介とやり合う事が出来るとは、恐るべき急成長だ。

と、こなた達がこんな話をしている間にその2台の車からは例の2

人が出てくる。

「…アニキ、ここに最近出来た走り屋チームがいるって聞いたがどこにいるんだ？」

「ああ、そこにいるだろ啓介」

「ん？こいつらがここのチームなのか？」

啓介はこなた達の方を向く。すかさずリーダーであるかがみが出てきて挨拶を交わす。

「私達がここ秋名のチームよ。私はリーダーの柊かがみ、あなたは確か…涼介の弟の高橋啓介よね？」

「ああ、そうだが…お前アニキを知ってるのか？」

「ええ、昔やり合った相手だわ」

「え！？マジなのか？アニキ」

啓介は少々驚いた、だが涼介は至って普通に話す。

「ああ、そうだ。昔の柊のドラテクは酷かったけどな」

「涼介…それは言わないでって言ったでしょ…あの時は始めたばかりで仕方なかったんだし………」

かがみは頭を書きながら話す。涼介は軽く笑って過ごした。しばらくして……。

「どうだ柊？ チームの状況は」

「いろいろあって…上手くないわ……こなたのハチロクも事故で壊れちゃったし…」

「そうか……まあ公道バトルをやっているというアクシデントもあるさ。俺はその事まで想定してチーム活動をしているけどな」

「…やっぱり涼介には敵わないわね…」

かがみはため息をつく。すると涼介そんなかがみに一言。

「柊…どうしたんだ？ ため息つくなんてお前らしくないじゃないか」

「いや、何と言うか……本当にやっていけるのか不安なのよ……」

「柊……まあそう落ち込むな。今日は気分転換にでも、俺達と走らないか？」

「…まあ良いわ。ちょうど私達もここで走ろうと思ってたところだし」

かがみは快く引き受けた。そして涼介はかがみに申し出る。

「では、まずは上りから行かせてもらおうか……啓介！」

「おう！ ヒルクライムは俺の得意分野だ！！」

「啓介……あまり調子に乗ってFD壊すなよ」

涼介は少々苦笑した。そしてかがみのチームからは……。

「そっちが黄色いFDなら……FD同士って事でつかさ、頼むわよ」

「え！？だ、大丈夫かな……」

つかさは少々不安げな表情を浮かべる。そこにこなたが軽く笑いな
がらつかさに言葉をかける。

「大丈夫だと思うよ、つかさ。FDはパワーあるからある程度は頑
張ってくれると思う。つかさはもっと自分に自信持って良いんだよ」

「こなちゃん……そうだね。やれるだけやってみるよ」

つかさはすぐに自信を取り戻した。そして涼介は一言。

「柊、このバトルは柊のチームの成績には影響しないバトルとして
捉えるから、気軽に走ってもらって構わないぞ」

「ええ、了解だわ」

かがみは頷いた。そしてその事をつかさにも伝えると、つかさは安
心したような表情を見せた。

啓介がつかさに近付いて挨拶を交わす。

「改めて、俺は赤城レッドサンズに所属していた、高橋啓介だ。よ
ろしくな」

「わ、私はお姉ちゃんのチームに……秋名ラッキースターだったか

な……そのチームに入ってる柊つかさだよ。こっちこそよろしくね」

つかさは笑顔で答える。すると啓介はつかさのFDを見て話す。

「この白いFD……俺のと同じグレードのFDだな。足回りもなかなか良いじゃんかよ」

「そ、そう……？お姉ちゃんに手伝ってもらってここまで出来たんだ」

「そっか。お前の姉さんは速いのか？」

「うん、湾岸線ってところで毎回勝ってたから」

つかさが啓介と話をしていると、涼介も話に入ってくる。

「啓介、今の柊は正直言って俺でも苦戦するくらいに成長しているんだ」

「へえ……アニキでも苦戦する、か……」

「そうよ。もっとも、昔まで乗ってたR34型GT-Rは壊れちゃったけどね」

「そして柊は今R35型GT-Rに乗ってると………な？」

「何よ？何か文句でもある？」

かがみは涼介を軽く睨む。すると涼介は軽く笑いながら話す。

「いや、柊は本当にGT-Rが好きだなと思ったただけだ」

「まあ何て言うか、私はGT-R以外には合わないと思ってのよね」

「確かに、柊はGT-R以外の車に乗る事なんて考えられないな。俺も同じで、俺自身の公道最速理論を生み出す為には、このFC以外には考えられないんだ」

涼介はだんだん真面目な表情で話す。

「このFCは数学的な論理では説明出来ないぐらいのポテンシャルを持っている。確かその：秋名のハチロクだったか？そのハチロクも同じだ」

「今は新しいハチロクだけだね」

「新ハチロク：FT86 Gスポーツだな？」

「うん、そうだよ」

「新しいハチロクのシステムを説明するのは難しいな。もはやハチロクは未知なる領域に入っていると言っても過言ではない」

涼介がこなたと話していると、かがみが咳ばらいをしながら話に割り込む。

「相変わらずあんたは堅苦しいわね。いくらこの私でもそんな堅苦しい雰囲気は無いわよ」

「別に堅苦しくなど無いだろ……まあ良い。それよりもバトルを始めよう」

涼介はバトルの準備をするよう促す。プラクティスの時間無しで行くようだ。

「啓介、80%の力で走るんだぞ」

「分かったぜ、アニキ」

啓介は頷き、窓を閉める。一方、つかさも車に乗り込む。

「つかさ……とりあえず、啓介さんの走りをよく見ておくのよ。で、抜けるなら抜いて構わないわ」

「うん、やれるだけやってみるね」

つかさも啓介と同じように頷いて、窓を閉める。そしてカウントはお馴染みの巧が取る事に。

「それじゃカウント行くぞ!!」

つかさと啓介はアクセルを踏んでエンジンを吹かす。

「5! 4! 3! 2! 1……スタート!!」

つかさと啓介は勢いよく走り出した。やはり最初はタイヤの滑る音が響く。

「さてと、どちらが勝つか見物ね」

「啓介と柊の妹……どちらも良い勝負をしそうだな」

涼介とかがみは同じような目線でそれぞれのFDを見ていた。

「柊、下り勝負の件だが……」

「……分かったわ。久しぶりにやり合いましょ」

「ああ。だが旧友だからといって手加減はしないぞ」

「私もあんたのために手加減なんてしないわよ」

かがみと涼介は睨み合った。相当なライバルのようだ……。

一方、つかさと啓介は……。

「白いFDの奴……なかなかやりそうだが……簡単に負けてたまるかよ」

啓介は運転に集中している。一方のつかさは珍しく落ち着いて運転していた。

「お姉ちゃんと一緒に走ってたからかな……いつもより行けそうな気がするよ」

つかさは自信を持って運転をしていた。流石に最初は啓介のFDに付いて来れている。

「……流石に食いついてくるか……そりゃあ同じグレードのFDだも

んな……だが、簡単に抜かせはしねえぞ!!」

啓介はアクセルを強く踏み、距離を離していく。そんな中、こなた達は……。

「つかさ……ちゃんと付いて行けてるかな……」

「泉さん……まあ、大丈夫だとオレは思うよ。ああ見えてつかささん結構速いし」

「…だよ。しかもパワーのある車だし」

こなたは「つかさは大丈夫」と言い聞かせ、勝負を見守る事に。…と、こなたはある車を見つける。

「ん…？あれは………」

こなたの視線の先には、あの赤いランエボが映っていた。

「ゆい姉さん……やっぱり、強すぎる相手だよ………ホントにゆい姉さん追い越せるのかな………」

こなたは顔を伏せる。相手が強大がゆえに、自信が喪失してしまうと言ったところか…。

とそこに涼介が言葉をかける。

「秋名のハチロク…泉、確かにあの赤いエボ？は弱点が無いかもしれないが……」

「無いけど……何？」

「……いや、今のお前にはまだこの方法は無理だろう。もう少し時間を置いて、時期が来たら教えよう」

「えー、教えてくれるだけでも良いじゃん。つまんないなあー」

こなたは深くため息をついた。そこにかがみが少しニヤけてこなたを指差す。

「あんたじゃまだ全然無理よ。勝ちたいならもうっと走り込まないと本当に敵わないわ。ま、秋名下りと上りを50本ぐらいかなー」

「かがみ……そこまで言わなくてたって良くない……？こっちは本気で悩んでるのに……」

こなたは珍しく怒りを感じていた。そしていつの間にか拳を構えていた。

（かがみ……かがみは速いからそんな事言えるんだ……私みたいな遅い走り屋の事なんかこれっぽっちも考えてない……そんなのに、リーダーなんて務まるの……？）

「こなた、どうしたのよ？」

かがみは気安くこなたに話しかける。するとこなたは怒りに満ちた表情でかがみを睨む。そのこなたの目には、涙もあった…。

「かがみ……しばらくかがみのチームを抜けさせてもらうね……かがみみたいな速い走り屋になんか、私はなれないんだからっ！！」

こなたはかがみにこう言い放ち、急いでハチロクに乗って秋名を後にした。

「ちょ……こなた!! 待ちなさいよ!! こなたってば!!……行っちゃった……」

でも何でこなたあんなに怒ってんの? チームを抜けるって何でなのよ……私が一体何をしたって言うのよ……?」

「はあ……終、自分の胸に手を当てて考えてみる。思い当たる事があるはずだ」

涼介はかがみに自分の行動を考えるよう促した。かがみは涼介の言われた通りに考える。そして……

「…確かに、こなたには悪い事言ったかもしれない……涼介、ちょっとこなたに謝ってくるわ。だからここをお願い……」

「ああ、分かった。しっかり謝罪して、許してもらうんだぞ」

かがみは車に乗り、一旦涼介達のいる場所を後にする。

一方、つかさと啓介は順調に走っていた。

「くっ…なかなかやるな……流石は湾岸の女王の妹だな……」

啓介は少し冷や汗をかきながら走っていた。つかさも啓介と同じ状態だった。

「…確かお姉ちゃんは、今日のはチームの成績にはあまり関係無いって言ってたけど……でも負けたくないかな……」

つかさはこう独り言を呟き、走りに集中する。そして秋名上りの終盤辺りの小さいS字カーブでバトルは動く。つかさは道路中央にライン取る。

「お姉ちゃんがよく言ってたよね……こういうところは車が一直線で走れるところを見つけて……」

つかさはかがみのアドバイスを聞き逃していなかった。しかも一つをしっかり覚えている。啓介はややイン側に車を寄せる。

「おい、あいつ中央にライン取って何を考えてんだ？ やりたい事はだいたい分かるがここは段差があつて車が跳ねるから、かなり集中してねえとミスってしまうはずだが……」

確かに、道路の状態は決して良いとは言えない。しかし、つかさはそんな事など全く気にしてはいなかった。

「啓介さん、許してね。私はちよつとくらい段差があつても間違わないよ。お姉ちゃんに教えてもらったから……」

つかさはアクセルを強く踏み一直線に走っていった。驚く事に車は段差の影響で跳ねているにも関わらず見事に綺麗に走っていく。そのハンドリングに啓介は驚いた。

「驚いたぜ……跳ねれば普通はバランスが崩れるはずだが、奴のは全くラインが崩れてねえ……逆に見せてもらったぜ……」

その後、つかさが先頭のままバトルは終了した。そして涼介の元へと戻る。

「アニキ……負けちゃったぜ」

「啓介、まあそう落ち込むな。今回ののは気分転換でのバトルだからな」

「ふう……啓介さんだったかな？すごく楽しかったよ！またいつか相手してね♪」

「おう、ただ今度はガチ勝負だからな」

つかさと啓介は互いに握手を交わした。と、つかさがかがみとこなたがいない事に気づく。

「あれ？お姉ちゃんとかなちゃんは？」

「あ、いや……つかささん、かがみさんと泉さんはちょっと……」

「何故だか分からないけど、リーダーとかなたが喧嘩してこなたがチーム抜けるって言い出したんだ……」

「え？何で……？」

「何でも、泉さんが傷つくような事をかがみさんが言ってしまったみたいで……泉さん、涙流しながらもすごく怒ってましたし……」

拓也は気まずそうに話す。あれだけ言えば流石のこなたも傷つくだろう。しかし、こなたもこなただ。簡単に感情的になっていてはチームの雰囲気悪くする。

つかさは心配そうな表情をする。

「そんな事があったんだ……こなちゃんとお姉ちゃん、仲直り出来ると良いけど……」

「ですね……でないと遠征自体が出来ませんし……」

つかさ達はこなたとかがみが早く和解する事を願った。

一方、こなたは……。

「…確かに私は遅いし、ゆい姉さんに挑戦しても無理かもしれなくて……だけど、何もああいいう風に言わなくなつて良いじゃんか……」

こなたの怒りは少しは収まっていたが、ぶつぶつと独り言を言っていた。と、こなたのハチロクのバックミラーにR35型GT-Rが写る。

「かがみ…今回は本気勝負だよ……私の後を追ってきたなら容赦はしないからね……!!」

こなたはアクセルを強く踏む。こなたの怒気に応じるようにハチロクは物凄い加速力を見せる。

「待ちなさいよこなたってば!!速い…あんたは十分速いから!!」

かがみは必死に叫ぶ。だが声など聞こえるはずも無く、こなたのハチロクはどんどん遠ざかっていく…。

「くっ…!!ちょっと本気で扱かないと分からないみたいね……地獄の果てまでも追いかけてやるわっ!!!!」

かがみは目つきを変え、完全に湾岸の女王としての走りをしていく。二人とも凄い速度でコーナー、ストレートを走り去っていく。

「そっちが本気ならこっちも容赦しないよ!! 湾岸の女王の称号なんか剥ぎ取ってやるっ!!!」

こなたはムキになってかなりの猛スピードを出す。だがかがみのGT-Rは少しずつ近づいていく。

「……っ!! いい加減離れてよっ!!!」

こなたはかなり怒りながら走る。気がついたら峠ではありえないスピードで走っていた。ハチロクのボディは大丈夫だろうか? かがみは無言で運転していく。そしてあっという間にこなたのハチロクの隣に付く。

「…まだまだ甘いわね……そんなんで公道最速の走り屋になれるなんて…思わない事よ!!!」

かがみは一気にこなたを抜き、こなたのハチロクの前に出る。その走りにこなたは咄然とし、かなりのショックを受けたような表情をしてアクセルから足を離す。

「うそっ……新ハチロクでもかがみのGT-Rに負けた……? ……やっぱり、かがみに勝てないならゆい姉さんにも勝てない……あのつかさにも勝てない……この先のバトルで出会う人とも……そんな状態で走り屋続ける意味なんてあるのかな……」

こなたは自信喪失していた。自分に対する怒りや絶望感で思いがた

くさんだった。チームに入るまでの走り屋としての生活は、意外にも連勝していたがチームに入ってからバトルがなかなか上手いかない時もあった。ボロボロに負ける事すらあった。そんな状態であるから、自信を失ってしまう。かがみのGTR：悪魔の翼とも救世主の翼とも捉えられる黒い翼を持つGTRに大差を付けられた事により、こなたの白い翼は折れかかっていたのだ。

「ハチロクなんか……ハチロクなんか壊れてしまえっ!!!」

こなたはハチロクをガードレールにぶつけようと、走らせる。そのガードレールの先は崖……まさかこなたは自殺するつもりなのだろうか……?

とその時、かがみのGTRから高いクラクションの音がする。それにこなたがはっと気づき、急ブレーキをかける。

「……………!? かがみ……………」

「あのバカ……何考えてんのよ……!!!」

かがみは車を止めてドアを開け、車を降りてこなたの元へと向かう。そしてへこまない程度に強くドアをノックする。こなたは仕方なく車を降りると、いきなりかがみから強くビンタされた。凄い音とともにこなたは崩れ落ちる。

「……………っ!!! そっちが悪いのにいきなり何すんの!!!?」

こなたの怒りは再び目覚める。だがかがみはこなたを、チームリーダーとして叱った。かがみもこなた同様怒りの感情が込み上げる。

「バカ!!! この大バカ!!! あんた何考えてんのよっ!!!!!! 自殺

なんてバカな事考えないでよ!!! 私達のチームにはあんたの力も必要なんだからっ!!!!!!」

「かが……み……ごめん……私が悪かったから……だから許して……」

こなたは強いビンタを受け、怯えた表情で口を押さえている。かがみも深くため息をつき、心を落ち着かせる。そして静かに話し始める……。

「はあ……こなた、何であんたが謝るのよ……悪いのは私の方なのに……」

「え……? か、かがみは何も悪く無いよ……私が自殺しようとしたから……ハチロクを潰そうとしたんだし……」

「いいや、あんたは悪くない……私があんたに変な事言ったのが悪かったのよ……」

かがみは申し訳なさそうな表情で話し続ける。

「こなた、あんた私の言葉に心を痛めたんでしょ?」

「え……? い、いや……心を痛めたなんて……ただちよつと言われてむくれてみただけだよ。いつものパターンじゃん……心を痛めてなんていないから心配しないで……」

こなたは何とか笑顔を作り、答える。しかしかがみは暗い表情で話し続ける。

「でも、そうじゃないとしても……きちんと謝っておくべきだわ……
私はみんなの事をよく考えれてなかった……そんな私にチームの
リーダーなんて務まらないわ……本当にごめんなさい、こなた……
……」

かがみは手を顔に当て、泣き崩れる。こなたは慌ててかがみを慰める。

「ちょ……かがみ、泣かないでよ……私だって、かがみにきつく言っ
てしまったところもあるし……」

こなたとかがみの顔は涙で溢れる。かがみは泣きながらこなたに話
す。

「こなた……私がしっかりしてれば、あんたに合った公道最速理論
を教えてあげれたのに……本当に……本当にごめんなさい……」

「良いってかがみ……私も悪いんだから…………」

こなたは涙を拭き、かがみにこう告げる。

「かがみ……もう仲直りしない……？」

「良いの……？ 私について来てくれるの……？」

「もちろんだよ……てか、かがみが一緒じゃないとやっぱり私はし
っかり走れないよ……チームを抜けるなんて大バカな事言っごめ
んね…………」

「こなた……本当にごめん……これからチームリーダーとしてま

たやり直すから……あんたもしっかりついて来てよね……」

かがみも涙を拭き、立ち上がる。そしてこなたの表情は、自然と笑顔になっていた。

「かがみ……さあ、戻ろ、つかさ達のいる所に」

「……そうね。私達ダブルエースが泣いてばかりじゃ、いけないわね」

「ダブルエースかあ……つかさも入れた方が良さから……トリプルエースとかはどうかな？」

「…なかなかのセンスじゃない。つかさはヒルクライムのエース、あんたはダウンヒルのエース、そして私は……」

「ダウンヒル、ヒルクライム、そして首都高のエース、だね。要するにそういうの全部引くるめて公道のエースってやつ」

こなたが少し得意げに話す。

「公道のエースか…やっぱりあんた達から見た私ってそんなに速く見えるのね」

「そりゃあもう速いよ。速すぎるぐらいだよ」

「ありがとう、こなた。その言葉で私はまた立ち直れそうだわ。さて、戻りましょ」

かがみとこなたは車に乗り込む。そしてつかさ達のいる場所へと戻

っていった。

そして、つかさ達が待機していた場所へと戻る。

「…戻ってきたか。柊と泉、和解出来ていれば良いが…」

腕を組みながら涼介は待っていた。

「涼介、騒がせてごめん。でももう大丈夫だわ」

「…そうか。なら、続きをやろう。遠征もしないといけないかも知れないが…」

「…確かに遠征もだけど、今はあんたと勝負がしたいわ。最初に上りをしたから、今度は下りで良いわね？」

「ああ、構わない。いつでも掛かってこい」

涼介は余裕の表情で答えた。かがみも涼介を睨んだ。

こうして、こなたはかがみの言葉に一度は決裂するものの、かがみとの和解により何とか立ち直る。そしてかがみは涼介とのダウンヒルバトルを行う事になった。

走り屋界の二大勢力：赤城の白い彗星と湾岸の女王との壮絶なバトルが繰り広げられようとしていた。

ACT. 13 史上最強のチーム（前書き）

こちらもようやく更新できました（大汗）

いやあ、小説家というものはなかなか大変ですが頑張っていくので応援よろしくです。

それと、一応報告ですが携帯の方がiPhoneに変わりましたのでこれからはパソコンで更新していきます。ぜひ把握よろしくお願ひします。

ACT. 13 史上最強のチーム

こなた達は秋名にて、気分転換のつもりでバトルをしていた……のだが、かがみと涼介のバトルに変わると、異様な雰囲気があった。

「うわあ……な、何だか……やっぱあの二人は違うね、つかさ……」

「そ、そうだね……近付けないよ……」

こなたとつかさは若干身震いしていた。それくらいかがみと涼介は熱いライバル関係であった。

「涼介……言っとくけど、本気勝負よ。湾岸の女王の走りを見せてあげるわ!!」

「ふっ……柊、妙にやる気じゃないか。……お前がやる気ならば、こちらも本気で行かせてもらおう……赤城の白い彗星としてな!!」

かがみと涼介の視線の間では激しい火花が散るような感じであった。

そして、かがみと涼介は車に乗り込む。何も言わずに、黙々と……。それから、かがみは合図をし、巧にカウントを取るよう言いかける。

「そ、それじゃあ行くぞ!!」

巧のカウントが始まると、両者ともアクセルを強く踏みエンジンを鳴らす。音は普段とは違っていた。

「5! 4! 3! 2! 1! …… スタート!!」

巧の「スタート!!」のかけ声と同時にかがみと涼介は走り出した。タイヤの滑る音が響き、巧には突風が当たり身を屈める。

「すげえ……何者なんだ、あの二人……」

巧は不思議そうに二台の車を見つめていた。

一方、走り出しが順調な二人は冷静に運転していた。かがみが先頭で涼介が後ろである。

「…さて、久々のあんたとの勝負……手加減はしないわよ!!」

「さて……お前がまたどのくらい腕が上がったか見せてもらおうぞ……!!」

二人は互いに集中力を高め、バトルを始めていく。

「…流石になかなか離れないわね。だけど私のこのR35型GT-Rの最大の武器、それは……」

かがみはGT-Rのハンドル付近にある赤いボタンを押す。すると回転数が一気に上がり、更にスピードも一気に上がった。

「柊のGT-Rが急に速くなってる……? 一体、奴のGT-Rに何が起こってるんだ……?!」

涼介は驚く。驚くのは無理もない、かがみのGT-Rにはある物が取り付けられていた。それは…。

「涼介……実は私のG T－R：ブーストターボが付いてるから、こんなに速いのよ。ブーストターボは一時的に回転数とスピードを上げて、相手を離す事が出来るのよね。あんたのF Cには付いていない、G T－Rだけの武器だわ！」

ブーストターボ：まるでよくあるレースゲームに出てくるような物であるが、これは本当にG T－Rだけの武器だ。公道だけでなく、サーキットでの最速も狙う日産G T－R開発部が考え抜いた末の最強のターボエンジンだ。

涼介はかがみのG T－Rから離され、ほんの一瞬で勝負がついた。あの涼介が一瞬でやられるとは…。

しばらくして、かがみと涼介はこなた達の元へと戻り、車を降りて一息つく。

「ふう……どうよ？ 私のG T－Rは」

「…まさかこんなに速く勝負がつくとは思ひもしなかったな……流石は柊、と言ったところだな」

「まああれだって何度も使えばG T－R自体が劣化するからあまり使いたくないんだけどね…」

そう…ブーストターボの弱点、それはG T－Rのエンジン、ボディの劣化を早める事である。やはりスピードや回転数を上げる関係で、

ボディの耐久性、エンジンの寿命を早め、更には足回りにも負担がかかる。使いどころを考えさせられる機能だ。

「だが、そのブースターボを持ってしても勝てない相手…紅い悪魔とでも言ったか？ 奴は本当に恐ろしい相手だ…あのエボにMRの動きをさせる…言うなれば二つの駆動形式を併せ持たせた強者だからな」

「ええ…あの紅い悪魔だけは…だけど、今のこなたなら意外とイけるかも知れないわね」

かがみはこなたに話を振る。すると……。

「ええ！？ いや、今のまんまじゃまだ無理だよ！！ もっとう…ハチロクのパワー上げたりしないと…」

「…まあそうかもね。だけど何も付けなくても十分速いわよ？」

かがみはこなたのハチロクの速さを絶賛している。こなたはハチロクを見つめ、一言。

「…まあこのハチロクもお父さんが用意してくれた物だからね。それにしても今頃お父さん、どうしてるかな…」

こなたはそうじろの事を考えていた。

その頃、そうじろうは久々に湾岸線を走っていた。相手は鋼のエボ？だ。

「…さてさて、まずは拝見させてもらいますか♪
……どうせお前はすぐにちぎられるんだからな、この最強のインプレッサに」

そうじろうは余裕の表情で走る。鼻歌を歌いながら走っているほどだ。

そうじろうのインプレッサはかなりのチューニングが施され、馬鹿でかいパワーを誇っていた。そのパワーおよそ700馬力クラスの、サーキットでも恐らく最強のマシンである。だがそうじろうはあえてこのインプレッサをストリート用に使っている。

その理由は、ある者の力となるためだ。ある者とは……。

「……俺は紅い悪魔こと、ゆいちゃんの率いるチーム『湾岸ミッドナイト』の一員なんだ。そして俺達のホームコースの湾岸線で負ける訳にはいかない……もつとも、俺とゆいちゃんの二人しかないけど……」

この小説の読者はお気づきいただけただろうか。紅い悪魔こと成美ゆいが率いる高速道中心の公道最速チーム『湾岸ミッドナイト』：そう、あの有名なゲームの名を冠した走り屋チームだ。

恐らくこのチームはどの走り屋チームよりも格段に速い、つまりは走り屋界で最強の走り屋チームだろう。

チームメンバーは紅い悪魔こと赤いランエボ？を扱う成美ゆい（リーダー）と、こなたの父親で700馬力クラスのインプレッサを扱う泉そうじろう、この二人だ。

この二人の扱うマシンは異常なチューニングが施されている。まずゆいのランエボ?には、チューニングを重ねて4WDの動作に加え、MRの動作をさせる事も可能にしている。二つの駆動形式を併せ持ち、更にパワーは湾岸最強の800馬力クラス…もはやゆいに匹敵する走り屋はいないと考えるしかない……。このランエボを二文字で表すなら『最強』の二文字しか無いだろう…。赤いランエボは『無双』とも表す事も出来る。

そしてそうじろうのマシンは先ほども言った通り、700馬力クラスインプレッサ。そして足回りのチューニングが極限までなされた、ゆいに続く究極のマシンだ。

この二人のうち今そうじろうは湾岸線を走りに来ているランエボ?とのバトルをしている。相手のドライバーは一体何者だろうか…?

「…? あやのー、あれって車種何だー?」

「みさちゃん、えっとね……インプレッサかな?」

この口調は……背景コンビとも言われている、日下部みさおと峰岸あやのの二人だ。まさかあの二人まで走り屋となっているとは思いつかなかった。

「…なああやのー、何かあのインプ速すぎじゃねっかあ?」

「うーん…まあ一筋縄じゃない相手かもね」

「まあ私たちの600馬力クラスのエボ?なら大丈夫だよなー」

「そう…かもね……」

あやのは少し不安そうにしていた。何故ならそうじろうのインプレッサは物凄いスピードで迫ってきているのだ。

しかもそうじろうのインプレッサは700馬力クラス、みさお達のエボ？は600馬力クラス…100も差があるのだ。

「あやのー、もっとテンション上げて行こうぜ！私らなら大丈夫だから！」

「みさちゃん…そうね。じゃあ、本気出して行こっか！」

あやのはみさおの様子に少し安心したのか元気を出した。

そして、お互い一定の距離を保ったまま、バトルは続く。

「…やっぱりそう簡単には抜かせないか…：だがな、それも今のうちだ」

そうじろうはタバコを一本手に取り、火を付けて吸う。やはり余裕なのか？

「ふっふっふ、インプのドライバー、私らをナメちゃ痛い目遭うぞー」

みさおはニヤけながら運転する。だがそうじろうはそれも見抜いた。

「エボ？のドライバー…ふざけて走ってるならこの湾岸線から消えてもらいたいな。その汚れたタイヤで俺達のホームコースを汚されたらこっちも黙っていられない」

そうじろうは少々恐ろしい表情で独り言を呟く。それをあやのは悟

っていた。

「みさちゃん：何だかあのインプレッサのドライバー、凄く速そうだよ……しかも今インプレッサのドライバーが持つてる実力の半分も出してないような感じだよ………」

「そっかな？結構必死になって付いてきてるような感じだぜ？」

みさおは余裕の表情で答える。だがあやのは他の何かも悟っていた。それは、そうじろうのインプレッサの他にもう一台速い車が来るのではないかと…。

すると、そうじろうはタバコの吸い殻を灰皿に押し付け、一言。

「…さて、そろそろゆいちゃんも来る頃だ……とつととコイツとのつまらないバトルを終わらせてゆいちゃんと走ろう」

そうじろうはバックミラーを見る。するとそこには、あの赤いランエボが物凄いスピードで迫ってくる。もちろん、彼女には鋼のエボ？など眼中に無かった。

その音にみさお達も気づく。

「お、おいあやの：あれって……」

「や、やっぱり……湾岸最強の紅い悪魔だよ！！何か来るかと思ってたら、あれだったなんて……」

あやのは頭を抱える。だがみさおは…。

「あやの：け、けどあのインプとバトって勝てば良くね？」

「いや、みさちゃん…もう遅いよ……隣見て……」

みさおはあやのに言われ、隣を見る。すると、さっきまで後ろにいたインプレッサがすぐ隣に来ている。ここまで来てもまだフルスロットルじゃなさそうだ。

「エボ？のドライバーはもう少しチューニングする事だな。さあ、ゆいちゃん…今日は悪いけど全開フルスロットルで行かせてもらうぞ〜！」

そうじろうはアクセルを強く踏み、凄いスピードでエボ？を離していく。そしていつの間にかエボ？の前にいたゆいとのバトルを楽しそうに走る。

「おじさん、同じチームだけどゆいも本気になっちゃうよ〜♪」

ゆいも軽快になり、スピードを上げていく。気がついたら二人は峠ではありえない、理解出来ないスピードでしかも二台同じように並んで走行していた。二人ともフルスロットルの全開スピードだ。

「流石はゆいちゃん、なかなかやるな〜。だけど俺のこのインプも負けてはいないぞ」

そうじろうは更にアクセルを踏み、半分前に出る。だがそれをゆいが追い抜き返し、またそうじろうが追い抜き返し……の連続だった。非常に見る価値あるバトルだ。

もはやエボ？は彼らから見たら雑魚にしか過ぎなかった。

「すげー……何であのインプあんなに速いんだ…？」

「多分、今までが本気じゃなかったんだよ……あのインプレッサ見ただけで分かったもん」

「そっかー…確かにあのインプやヴぁいかなー……」

みさおとあやのはインプレッサとエボ？のバトルを遠目で見ていた。みさおとあやのの口が塞がらず、呆然としている。

だがそうじろうとゆいはそんなみさお達には構わず、バトルを楽しむ。

「…？おや、そろそろガソリンが無くなってしまふ頃だな……ゆいちゃんとのバトルはまた今度かー……淋しいなあー……」

そうじろうは淋しそうにしながら湾岸線を降りようとしている。それにゆいも降りる。

「あ、おじさんガソリン無くなっちゃう頃なんだ……私もそろそろ入れないといけないし、おじさんとガソリンスタンドで雑談でもしながら給油しよーっと」

こうして二人は湾岸線を降りた。みさおとあやのの二人に格の違いを見せ付けて……。

しばらくして、とあるガソリンスタンドへと着き、そうじろうとゆいは車から降りる。

「イラッシャイマセー!!……って、モシかしてコナタの……!?!」

「ん? ひょっとして…パトリシアちゃんかい!?!」

そうじろうは少し驚いた。それは、なんとパトリシア・マーティンだったのだ。彼女はまだ陵桜学園の三年生だが、免許を取れる年齢までなっていた。そしてすぐに免許を取得し、今はガソリンスタンドでアルバイトをしているそうだ。

「いやー、しかし驚いたよ。まさかパトリシアちゃんだったとはねー」

「ワタシもオドロキました。そう言えば、コナタのオジさんは走り屋ヤツテるんですか?」

「ん? ああ、やってるよ。このインプレスサでね」

そうじろうはインプレスサのボンネットに手を置く。そこにゆいもやって来た。

「あ! パトリシアちゃん!! いつもゆたかと仲良くしてくれてありがとね」

「イエイエ、ワタシの方こそいつも遊ばせてもらってカンシャデース!」

パトリシアがこう言うと、そうじろう達は笑って会話が弾んだ。そしてそうじろうは自動販売機に向かい、三人分の缶コーヒーを買ってくる。

「ゆいちゃん、パトリシアちゃん、パトリシアちゃんは仕事でか
らいけないかもしれないけどコーヒー買ってきたよ」

「お、流石おじさん太っ腹だねえ♪」

ゆいとパトリシアはありがたそうにコーヒーを飲んでいく。すると
そこに店長らしき人物が…。

「…おお、誰かと思ったらお前か！そうじろう」

「ん？あ！お前…：久しぶりだな孝介！！」

その店長らしき人物の正体は、そうじろうの昔からの親友『小崎孝
介』だ。彼も昔はなかなかの走り屋だったらしく、そうじろうと競
り合った時もあった。

「今でも走り屋やってるのか？孝介」

「やってるがたまにしかバトルしねえなあ、今は…：」

「はは…：まああの時のお前は本当速かったな。お前のセリカは…：」

小崎孝介の車は、セリカGT-Four…：4WD仕様だ。なお、現
在も乗り続けているのだとか。

二人が話をしているうちにもう一台車が来る。それはなんと、あの
ハチロク…：間違いなくこなたの車だった。

「すみませーん、ハイオクお願いしまーす…：って!？」

「ウソデスカ!？コナタだよネ!？」

「パティ！？それにお父さんとゆい姉さん何でここに?!」

こなたはあまりに予想外な事に少々驚く。実はあの後一旦解散し、また明日遠征をする事になっていた。そしてこなたは燃料補給のためガソリンスタンドへ寄ったところ、パティと出会ったという訳だ。こなたは早速こんな質問をする。

「パティ…走り屋やってる？まだパティは私が通ってた陵桜の三年生だろうけど……」

「ヤッテるよ！コナタも走り屋ヤッテるよね？」

「もちろん！私はハチロク専門の走り屋だよ！」

こなたは自信げな表情で答える。こなたは更に質問を重ねる。

「じゃあさ、パティはどんな車使ってる？」

「ワタシはズバリ……黄色いRX-8使ってマース!!」

「え？黄色い…RX-8……？」

こなたはパティの言葉を聞いて驚きを隠せなかった。そう、あの時の事を思い出していたのだ。

『速い…！ホントに速いよ……この秋名で負けてなんかいられない…!!』

『…こうなったら、必殺技を使ってでも振り切ってやるよ。ハチロク、行こう!!』

『……!!そ、そんな……相手も溝落としが使える……?!』

『嘘……そんな……まさか私の地元の秋名で……やっぱり……もうちょっとチューンしないと……ダメかな……』

こなたはあの時の事を思い出し、口を開く。

「そっか…あの時の黄色いRX-8はパティだったんだね……」

「コナタ……イヤな事思い出させてすみません……」

パティは申し訳ない表情で話す。するとこなたは明るく振る舞い、話し掛ける。

「ふう……何だか、スッキリしたよ。まさかあれがパティだったとはね♪」

「コナタ……それじゃ、ハイオク入りマース!!」

パティはこなたのハチロクにハイオクを給油していく。その間にこなたはそうじろうのところへ行った。

「お父さん、今日も走ってたの？」

「ん？あ、こなた…ああ、そうだよ。今日は久々に湾岸線を走ってきたぞ」

「湾岸線…あ、だからゆい姉さんも一緒なんだね。今日どんなのとバトルしたの？それともゆい姉さんとバトルしたとか？」

こなたは非常に落ち着いた様子でそうじろうに聞く。

「えっとな…今日途中まで鋼のエボ？とやって来たよ。後半はゆいちゃんとだけど」

「鋼のエボ？…！？」

「ああ。こなたは誰だか知ってるのかー？」

そうじろうは疑問に思いこなたに聞く。こなたは誰だか薄々気づいたような表情をしていたが…。

「……いや、まさかだと思うけど……無いよね。うん、無い無い。みさきち達じゃないはず……」

こなたは一瞬思い出したようにも見えたが「まさか…」と思い、それ以上言わなかった。

それからしばらくして、孝介が口を開く。

「おい、そうじろうよ、今のお前の娘さんか？」

「ああ、そうだ。こなた、とりあえず挨拶ぐらい交わしておきなさい」

「うん。えっと、私は泉こなたです。お父さんから少し聞いてたけど、結構速いみたいだから暇があったらぜひ一戦お願いしまーす」

「おう、いつでも受け付けるぞ。俺はそうじろうの親友の小崎孝介ってもんだ。昔は相棒のセリカとよく走ったもんだな。まあこんな感じだがよろしくな」

こなたと孝介は軽く挨拶を交わし、孝介はこなたのハチロクを見る。

「ほうー、これがそうじろうの言ってたハチロクの現代版モデルかあー。確かにハチロクだなー」

「まあまだ足回りのチューンとかターボ付けたりとかはしてないんだけどね……一応ボンネットだけは取り替えてあるけど」

こなたは少し笑みを浮かべながら話す。だが孝介は…。

「いやー、これはバトルする日が楽しみだなー」

「あはは……孝介さんはどこら辺を走ってたんですか？」

「ん？俺か？俺はいろは坂を中心に走ってるぞ」

「いろは坂……私、走れるかな………」

こなたは少々ビビったような感じで話す。するとそうじろうが真面目な表情で一言。

「こなた…こなたなら大丈夫だよ。同じFR駆動のパトリシアちゃんでさえ、走れているんだから」

「うん……というか、明日チームの遠征だからちよつとねえ……一応みゆきさんのチームもこっちの近くに来て、妙義でやる予定だけど……」

「妙義か……俺と孝介が激しくやり合った峠でもあるけどな」

そうじろうは思い出しながら話を進めた。

しばらくして、更にもう一台……それはなんと、あの有名な車……。

「……! あ、あれって……」

「ま、マチガイナイデスよ…あれは、アカイアクマ!」

「がくっ!! ……もー、違うよパティ! あれは悪魔のZでしょー!」

「そうデシタ、スミマセン」

パティは苦笑した。そしてこなたは悪魔のZを見つめる。

「あの悪魔のZ……もし漫画の通りなら乗り手は朝倉アキオさんのはずだけど……」

こなたは悪魔のZの乗り手が現れるのを待った。すると、その乗り手は……。

「……え、あれってまさかの………」

こなたは驚きの表情を見せる。その乗り手は、大人であったが黄色の髪を持ち、一見すると関西人のような感じの人であった。

「ふう……流石悪魔のZっちゅう風に言われるだけの事はあるな。アキオ達から喜んで引き継いだのが正解やったわ」

「…………パティ、やっぱり、だね……」

「そう、デスネ……」

こなたとパティは気づいていた。あの口調で話す奴は一人しかいないと……。と、その女性はこなた達の存在に気づく。

「ん？おまいら、ひょっとして……泉とパトリシアか？」

「先生、お久しぶりで〜す」

「黒井teacher、ここでバイトしてるのにはワケがありました……」

「んな事分かつちよる。パトリシア、お前はまだ高校生やっちゅうのに一人暮らししとるからしゃあないやんか。お前だけは特別にこの時間にバイトしとるんは認めたるで」

この小説の読者で、らき☆すたファンの方ならご存知だろう、こな

たが高校生の時の担任教師の黒井ななこだ。彼女は関西人のような感じに見えるが、出身は神奈川というエセ関西人だ。

更に、彼女はこの悪魔のZの乗り手であった朝倉アキオと毎回バトルをしたりしている。朝倉アキオとはよきライバルであり、親友でもあった。

「ななこ先生は悪魔のZに乗る前は何に乗ってたんですか？」

「ん？ウチはコイツに乗る前は黄色いスーブラ乗ってたで」

「黄色いスーブラですか：ななこ先生の事だからてっきり4WD車に乗るかと思ってましたけど、それでも無いんですね」

「何や泉、それどういう意味や？」

「いや、別に意味は無いです…」

こなたは頭をかきながら話した。そしてしばらくして、こなたが一言。

「そういえば、この車の乗り手の朝倉アキオさんはどうしたんですか？」

「ああ、アキオか？アキオはな……………」

ななこが神妙な表情で話す。こなたも何かを悟ったように、ななこの話を聞く。

「先生……………まさかとは思いますが……………」

「そういう事や、泉……アキオは、この悪魔のZに殺られたんや……なかなか良い腕を持つとったけどな……」

「……まあ、しょうがないと思いますよ。悪魔のZはそういうものだから……」

悪魔のZの秘密……それは、選ばれた者のみが悪魔のZの力を借りる事が出来るという事だ。悪魔のZはアキオの手に渡るまで数々の大事故を起こしてきた。普通なら廃車となるはずであったが、アキオを初め様々な人の手によって修理・チューニングされ、当時市販車としては最速のマシンであった「ポルシェ・911ターボ」を操る、島達也を敗るほどのマシンへと成長した。

しかし、その後アキオは遂に悪魔のZに見放されたのか、大型トラックに激突し、あの世へと逝ってしまったのだ……。だが、意外にも悪魔のZは修理すればまた使える状態であった。そこで、興味を持ったななこが引き取る事になった。逆に言えば、悪魔のZは次の乗り手にななこを選んだのだ。

「……まあ何や、こんな所で暗くなってもしやあない。ウチは絶対事故らへんて」

「先生、でも分かりませんよ……悪魔のZの恐ろしさは何度も事故を起こしてきたっていうとこなんで……」

「大丈夫やて！それより泉、お前が乗っとるやつは何や？」

「えっと……私はハチロクに乗ってますよ」

こなたはハチロクのボンネットに手を置く。

「…？これがハチロクなんか？ハチロクっちゃこんなに新しかったか？」

「あ、いや…何と言うか、ハチロクの現代版というか…そんな感じですよ」

「ハチロクの現代版かー。なかなか良い面持ちやないか」

「あはは…まあなこ先生もよく悪魔のZに手を出しましたよね」
こなたは少し照れながら話した。そしてしばらくして、ななこが口を開く。

「そーいや柊の姉はどうしてるんや？車種は何？」

「あ、かがみんも走り屋やってますよ。車種はR35型GT-Rです」

「ほう、R35型GT-Rか…柊の姉にしちゃあ随分と速いの乗ってるな」

「ホント、かがみは速いですよ。まあこの前バトルした時はギリギリ勝ちましたけど」

「ギリギリか…：泉はほんまそういう場面で限りなく凄い力発揮するなー」

ななこは感心したように頷く。するとこなたは静かに話す。

「そうですね…まあ、今まで誰かのおかげで…：姿の见えない誰か

のおかげで走れているんですよ」

「姿の見えない誰か、か……」

「そう……姿の見えない誰かを例えたとしたら、お母さんですかね……」

「泉……」

こなたは少し淋しそうな表情をしながら話す。するとそうじろうがこなたに話しかける。

「こなた……本当はお母さん居なくて淋しいんだよな……」

「うん……だけど、悲しんではかりもいられないよ……私は走り屋としての指命って言うのかな……難しい事はまだ分かんないけどそういうのがあるから」

「こなた……こなたは走り屋になってから、随分と大人になったね。お父さんはそんなこなたになって嬉しいよ」

「お父さん……さ、さあ、あまり暗くなってもアレだし、楽しくいこうよ！ね！」

「……そうだな。いや、しかしこなたも本当速くなったよな。最初はどうなるんだと思ったけど」

そうじろうは空気を読んだようにこなたを褒める。するとこなたは照れたような表情をした。

「ま、まあこれもお父さんとかかがみ達のおかげだよ♪」

「いや、こなた自身の力でここまで来れたんだよ。お父さんも今は速いけど昔は全然だったからな」

そうじろうは頭をかきながら、誰かさん達を忘れこなたと二人で話していた。するとその誰かさん達はすぐ姿を現す。

「うおーい、泉達ウチら忘れとらんかー？」

「べ、別に忘れてなんいませんよ!？」

こなたは焦った様子で否定する。

そして、ななこ達はガソリンスタンドから離れ、それぞれの家へと帰っていった。

その後、柊家にて……。

「さてと、やっと遠征らしい遠征が出来るわね♪」

「そうだね♪ゆきちゃんと楽しく走れたら良いなあ♪」

かがみはちょっと困りながらつかさに一言話した。

「つかさ…良い? 私達は遠征に来てるのよ? 厳しい事言うようだけ

ど走り屋の世界で楽しく走りたいなあ、とか思ってたら先がきついわよ。しっかり目的意識を持って行動してよね？」

「はうう…ごめん、お姉ちゃん……………」

つかさは涙目になりながら答えた。かがみも「はあ……」とため息をつき、呟く。

「…まあ、つかさ、あんたの気持ちもすぐ分かるわ。ただ勝つ事だけを目的に走ってるだけじゃ、流石に楽しくないし、車に乗っている意味が分からなくなるわ。だけど、走り屋同士の勝負の世界では、仕方の無い事なのよ」

「だよね…そうだよね……………」

「だから、息抜きってものが必須なのよ。今度の遠征が終わった後、どっかにドライブにでも行こっか？」

かがみは少し得意げな表情をしながらつかさに提案する。するとつかさは気分が良くなったのか、笑顔になりながら答える。

「うん！！それまで遠征って言うのを頑張るよ♪」

「ええ！つかさも頼むわよ！私達の初遠征、絶対勝とうか！！」

かがみとつかさは微笑みながら、その後も雑談を続けた。

こうして、こなたはまさかの再会を果たし、そして然るべき遠征の

日に向けて集中するようになった。顔付きも雰囲気も走り屋らしくなり、更に赤城の高橋兄弟との交流もあり、阪神ブルーバース攻略の為にかがみ達と一歩前進する。

しかし、こなたの知らない所でそうじろうは自分のテリトリーを荒らす者をことごとく走破する半悪魔と化していた。

走り屋界最強のチーム『湾岸ミッドナイト』は湾岸線を独占し、その他の走り屋を日々走破している事であろう…そして、こなた達のチームもいずれはその最強のチームと戦う事になる…。

初遠征を勝ち抜く事が大切であるが、こなた達のチームはそのチームに勝つ事は出来るのだろうか…？

ACT. 14 再戦（前書き）

やっと上げれました（汗）

この回は作者である俺も登場するという、個人的にカオスな回になりました（笑）

あとキャラ崩れも大分起きてますし、湾岸ネタに至ってはまず歴史が違ふところもあります。あくまでこの小説の『仕様』です。のでご了承下さい。厳しい事を言うかも知れませんが、受け入れられない方にはこの小説はオススメ出来ません。

ACT. 14 再戦

こなたがパティと再会を果たした次の日、今度こそ遠征だと言わんばかりにこなたが少し落ち着かない様子で起きてきた。

そう：今日は阪神ブルーバースとの再戦の日だ。

「…よし、ハチロクの足回りは良いね。今日やっと遠征らしい遠征だから気合を入れていこうつと」

こなたはハチロクの状態を入念に確認し、朝食を済ませ支度をする。
…と、そこにそうじろうが…。

「お、こなたが早起きなんて珍しいじゃないか。そういえば今日はどうやく遠征再開なんだって？頑張れ」

「うん…じゃあ行ってくるね、お父さん♪」

こなたは靴を履き、そしてハチロクに乗り込んで妙義へと向かった。

一方、柊家では……。

「……さあ！つかさ、行くわよ！！」

「うん！今日は張り切って頑張ろっか♪」

つかさは笑顔で答えた。そして白いFDを扱うつかさと、隠し玉を持ったR35型GT-Rを扱うかがみは、エンジンを始動し、こなたと同じく妙義へと向かう。

…とそこに、一台のハチロクレビンが…拓也だ。

「…お、あれはこなたと良い関係になってる拓也君ね…おーい！拓也くーん！！！」

かがみは窓越しに拓也を呼ぶ。すると拓也はすぐに反応した。

「あ…かがみさん、確か今日は遠征再開の日ですよ？オレのハチロクレビンを使うかどうかは知りませんが、頑張っていきましょうか」

「ええ、そうね。多分こなたは今頃もう妙義に着いてる頃だと思うから、早く行ききましょう」

かがみ、つかさ、拓也の三人は合流し、妙義へと向かった。

一方、こなたは…。

「さてと…本番の前にちょっと練習でもしておかないとね。というか、妙義に早く着いたのが意外…。」

こなたはかがみの予想通りかなり早いスピードで妙義に到着していた。そして、早速走りこみを行う。

「…走りこみはしておかないと厳しいから、とにかくポイントを押さえて走ろうっと」

こなたは至って冷静に走っている。妙義はコーナーがいろは坂ほどではないが多い。そのコーナーへの突っ込みのポイント等を考え、更に走っていた。

走る事数分、こなたはある車とすれ違う。その車は……。

「…なるほど、もう来てるんだね…青いZの城島和夫さん…そして………」

こなたは一息つき、もう一台の名を静かに言う。

「…阪神ブルーバードのリーダーで、青いNSXを扱うみゆきさん…悪いけど、勝負の世界だから私達が勝たせてもらうよ…。信頼している友達と争いあうのは嫌だけど……」

こなたは真剣な表情で独り言を呟きながら、青いZとその後ろに付いている青いNSXの横を通り過ぎていった…。一方、相手も気付いていたようだ。

「新ハチロクを扱う泉こなた…この前は酷い目に遭ったよな……だが、それはそれ。今日はアクセル全開のガチ勝負だ!! 正々堂々戦うぞ!!!!」

和夫は気合十分のようだ。一方のみゆきも……。

「泉さん：ようやく、本気の勝負が出来ますね。こちらも容赦なく行かせてもらいますよ!!」

みゆきも独り言を呟き、その後は走りに集中した。

しばらくして、こなたはかがみ達と合流する。こなたの体からは、ただならぬオーラが漂っていたように見えたが…。

「おっす、こなたーって…こなた…?」

「あ、かがみん、おはよー。今日はやっとバトルが出来るね。楽しみだよ♪」

こなたはかがみ達が来ると何事も無かったかのように笑顔で近づく。

「え…?ま、まあそうね……」

「…?どったのかがみん?」

「い、いや、別に何も無いわよ。さ、それよりみゆき達はもうここに来てるのかしら?」

かがみは気を取り直し、こなたに聞く。するとこなたは恐らくみゆき達の居る方向を見ながらかがみ達に伝える。

「あっちに居るよ…阪神ブルーバーズ……今更だけどみゆきさんが

率いるチームだよね？」

「そうよ。まあ實力はどのくらいかは、まだ分からないけど…」

かがみはみゆき達を発見し、心の中でこう思っていた。

（阪神ブルーバース：青い鳥達、という意味だね。三人とも車体の色が青…まず、こなたとバトルするのが、青いZと呼ばれている城島和夫…この車種は駆動形式が同じだけど、パワーではあっちの方が上…でも、こなたならやってくれるはずだね。そして、つかさと当たる事になる、青いGTOを扱う走り屋…城島和也、この人は少し厄介かもね。これもパワーでは断然GTOの方が上、そして加速もFDより上だったはずだね。そして最後は…上りと下りの複合勝負で私と当たる事になる、青いNSXを扱うみゆき…みゆきは一番厄介な相手だわ……ただのNSXじゃなく、Type R…このType Rってのがかなり厄介だわ…いきなりこんな強い相手に勝てるのかしら………）

かがみは長い事考えていた。確かに三人とも速い車種に乗っている。NSX Type Rは公道での走行だけを目的として造られた車ではない…サーキット走行の事も考えて造られた車なのである。

更にNSXの駆動形式はMR…FFやFR、4WDの車は前にエンジンがあるが、MR駆動の車はエンジンがリヤにある。エンジンがリヤにある事により、コーナーからの立ち上がりの加速が速い。残りの二人はどちらもFRであるが、GTOは加速が速いチューニングが施してある。いずれも強大な相手だ…。

…と、そんなかがみの悩みを一気に崩す人物が声をかける。こなただ。

「かがみん、何やってんの？早く走りたいから話聞きに行こうよ♪」

「え…ま、まあそうね。悩んでたって仕方ないわね！」

かがみは気を取り戻し、みゆきに再戦を申し込みに行く。

「えっと…みゆき、再戦を申し込むけど良いかしら？」

「はい、構いませんよ♪正々堂々勝負しましょう！」

みゆきとかがみは握手を交わした。そしてそれぞれ自分達の場所へと戻る。

「えーと、みんな！今日は気合入れていくわよ！！」

「うん、お姉ちゃん、私頑張るよ♪」

つかさはまた笑顔で答えた。そしてかがみはこなたの前に行き、小さく一言…。

「こなた…ダウンヒルエース、しっかり頼むわよ」

「もっちゃん！任せてよ、かがみん♪」

こなたは自信満々の表情で答えた。そして一通り点検し、何も異常が無い事を確認した上でようやく、バトルへと移った。最初のバトルはダウンヒル…下り勝負だ。

「さーてーと、まあ負けない程度に頑張るよ、かがみん」

「ええ。くれぐれも事故だけには気を付けてよね。後々面倒だから…」

「分かってるって。それじゃ、もうすぐバトルが始まるみたいだから、行ってくるよ」

こなたはハチロクの近くへと行く。一方、和夫は…。

「和夫さん、気を付けて、しかし勝利を狙って走ってきて下さいね」

「分かったっす、リーダー。いくら新しくなったとはいえ、ハチロクはハチロク。この青いZが負けるはずねえ」

「和夫：それは分からんぞ。相手は秋名のハチロクだ。どんなドラテクを持っているか分からない」

和也は和夫に言いかける。秋名のハチロクの底力は彼らにはまだ分からないのだ。

「アニキ：分かったぜ。アイツの場合はただのハチロクって訳じゃねえだろうし、とりあえず俺自身の走りをしてくるぜ」

「ああ、頼むぞ……」

和夫は和也の言いかけに頷き、こなたの方を向く。

「和夫さんだね、またよろしく☆」

「ああ、よろしくな。今度はアクセル全開のガチバトルだ！」

「もちろんだよ!!こつちも手は抜かないからねっ!!」

こなたと和夫は握手を交わし、それぞれの車に乗り込む。そして、まもなくカウントが開始された。

「それじゃ、二人とも、今日は巧が用事があって居ないのでオレがカウント取ります。それでは、並んで!」

拓也の言いかけにこなたと和夫は頷き、車を動かす。正確には巧と裕介がとある理由で遠征に参加出来ないだとか…チームとして成り立っているのかどうかを思わせるが、かがみ達は格別気にしてはいないようだ。

まあそんな事はさておきと言わんばかりに拓也が颯爽とカウントを取る。

「それではスタート5秒前!4、3、2、1……スタート!!!!」

拓也の「スタート!!!!」の声と同時にこなたと和夫は勢いよく走り出した。タイヤの滑る音が当たり前のように鳴り響く。

「泉さん…きつとやってくれるはずだよね…」

拓也は走り去っていくこなた達を見つめた。かがみも冷静にこなた達を見つめていた。

「こなた…ただ楽しんで走るだけじゃ勝てない事ぐらい分かっているわよね……たまには真面目に走ってほしいわ、本当に…」

かがみは少し不安そうにしていた。どこまで勝利にこだわっているのだろうか……。

一方、こなた達は黙々と走っていた。こなただけは余裕そうな表情をしていたが……。

「…まあ勝てば良いんだしね、気楽に行こーっ♪」

こなたは妙義をある程度は走り込んでいるため和夫よりは優位である。だからと言って気を抜いて良い訳が無い。

「さて…俺のZの速さを思い知らせてやる…覚悟しなよ!!」

こなたの後ろに付いていたが、少し頑張れば追い抜けそうな状態であった。そして、こなたのハチロクの真横に出る。

「こいつ…何余裕かましてるんだ…？これはお前達にとって重要なバトルじゃねえのかよ…」

和夫は少し不審に思った。何故なら今まで勝ってきたこなたがこんな簡単に抜かれるはずが無いと思っているからだ。だが、和夫が真横に出た時、こなたの表情は少しずつ変わる。

「…さあさあ、追い抜きなよ♪」

こなたはまるで相手が抜くのを待っているようだった。何か秘策はあるのだろうか…？

…実は、こなたは最初は後ろに居た方が良いと考えているのだ。何

故だろうか…？

「…前に出ればさあ、それだけプレッシャーが乗ってくるんだよう。最初から前を走るより後ろに付いた方が全然良いに決まってるよ。…相手のラインがじっくり見れるからね。後ろからじゃ丸裸だよ」
なるほど、こなたらしい考えだ。相手のラインをじっくり見る事で、相手の走りの癖などを読み取り、攻略法を考える…基本的なテクニクだ。そして和夫は前に出る。

「何を考えてんのか分かんねえけど…このまま行かせてもらうぜ！
」

和夫はパワフルな走りを見せる。だがこなたは動揺しない、するはずもない。

「よしよし、それで良いんだよ♪」

こなたは全然余裕そうだった。全く負ける気がしない、そんな感じであった。そして、あっという間にレースは中盤に差し掛かる。

「ふむふむ…なるほど、大体こんな感じのラインで走ってるんだ。…もうこのレースも中盤に差し掛かってきたし、そろそろ本気出そっかね」

こなたは少しずつアクセルを踏み込んでいく。だが最初はまだ和夫と一定の距離を保っていた。

「…アイツ、今までが本気じゃなかったとか言うんじゃないだろうな？」

和夫は少し不審に思いつつも攻め込んでいく。そして終盤に差し掛かる時、こなたは覚醒する。

「…さて、もう終わりにしよつか。なかなか楽しいバトルだったよ」

こなたは妙義終盤のコーナーに差し掛かった時に完璧と見まごう程のブレーキング、そしてアクセルワークで和夫を抜き去り、そのまま直線で加速した。和夫は少し悔しいと思ったようだが、逆に感心もしていた。

「…流石は、ハチロクだな…その走り見事だったぜ…」

…作者の意見を述べるがバトル中の表現が可笑しかったのは気にしないでいただきたい。

まあそんな事はさておき、こなたは余裕の、勝ち誇った表情でゴールする。

「ふう…なんかつまらなかったような…」

「あ？何か言ったか？秋名のハチロクさんよ」

「違っ…！和夫さんとのバトルがつまらなかったって訳じゃ無くて…でもそうなるよね。誰のせいだろ？」

…こなた様、それ作者である私のせいですね、すいません。まあこんな訳で徐々にグダグダな展開になりつつあるこの作品ではあるが、今まで真面目に書いていたのに急に不真面目になってしまったが、話を進めよう。

そんなこんなで第一戦、こなたのハチロク（FT-86）と和夫の

青いZ（Z33）とのダウンヒル対決は、こなたが勝利を収めた。次なるバトルはつかさの白いRX-7（FD3S）と和也のGTOとのバトルだ。ちなみに和也のGTOはツインターボが備え付けてある。

調整等はすぐに終わらせ、二人とも定位置に付いた。

「良い？つかさ。あんたはあんた自身の走りをすれば良いんだからね」

「分かったよ、お姉ちゃん♪」

つかさは笑顔で答え、少し真面目な表情になる。一方、和也は…。

「和也さん…くれぐれも無茶だけは止めて下さいね…」

「分かってるさ、みゆき。死なない程度に走る」

和也は頷き、「任せろ！」と言わんばかりに親指を立てた。みゆきもその和也の姿に少し安心したようだ。だが心の中ではこう思っていた。

（みゆき…すまないが俺は和夫の敵を取りたい…その為には無茶をしても勝たなければならんだ…許してくれ…）

どうやら和夫が負けた事によって敵意識が増しているようだった。そして和也とつかさは握手を交わし、それぞれの車に乗る。

「大丈夫…お姉ちゃんくれたこのお守りがあれば…あと、私のFDが力を貸してくれれば…」

つかさはこう言いかけ、FDのエンジンをスタートさせる。一方和也は非常にやる気満々の様子だった。

「さてと…和夫の敵も取りたいし、俺のGTOで久々に暴れるとするか!!」

和也は勢い良くGTOツインターボのエンジンをスタートさせる。和也のGTOツインターボは非常に加速に優れているチューニングが施されている。ここだけの話、和也はチューニングがかなり上手い。あの悪魔のZの修理に彼も携わっていたという事もあった。

そして、レースは拓也の「スタート!」の合図ですぐに始まった。和也が先頭で、つかさはスタートダッシュに失敗し和也の後ろに行ってしまう。

「うわあ…何だかあの人凄く速いよ…勝てるかな…」

つかさは早くも自信が無くなっていく。だが走る事を止めはしなかった。かがみの台詞…「あんたはあんた自身の走りをすれば良いんだからね」という言葉が頭に浮かんでいた。

「…ううん、大丈夫!こなちゃんだって初めは後ろでも構わないとかいつも言ってくれてるし、きっと大丈夫!!」

つかさは自分にひたすら言い聞かせて走りに集中した。一方和也はどんどんつかさを離していく。相当な加速だ。

「…ったくよ、FDだから少しはやると思ったんだが…これじゃまるで俺の相手じゃ無いな。まあまだレースは始まったばかりだがこの勝負、もらった!!!」

和也は序盤から飛ばしていく。スピード狂とはこう言ったものだろうか。つかさはその和也のGTOにどんどん離されていったが、焦りはしなかった。むしろ、離れるほど自分の走りに集中し始めている。

「焦らなくても、良いんだよね…私のFDは、絶対やってくれるはずだよ…こなちゃん…」

つかさはただただFDのハンドルを握り、しっかりと自分の走りをする。いつかあのスピード狂を追い抜けると信じて……。

しばらく、つかさと和也は無言のまま走っていた。普段はひいひい言っているようなつかさも、今日のこの日はしっかりした面持ちである。今日のつかさは普段のつかさとは何か訳が違う…必ず何かが起こる…それをいち早く察したのは、かがみとこなだった。

「つかさの奴…やってくれるはずだよ…」

「かがみん…この勝負の行方、分かったよ」

「え…？ちよつと聞かせて…」

こなたはかがみに聞かれ、静かに答える。

「この勝負…つかさが絶対勝つ…これだけだよ、言えるのは…」

「…その根拠は？」

「うーん…分からない。だけど、つかさはいつも追い詰められて、それから凄い勢いで追い抜いて勝ってるから、大丈夫だと思うよ」

「…そうね。つかさを信じるしかないわ。まあ初戦だから勝っても
らわないと困るけど」

かがみは少し笑いながら話した。そこに、拓也が近づきかがみに一
言。

「あの…かがみさん、すいませんがちよつと良いですか？」

「ん？何？拓也君」

拓也はかがみにある事を提案した。恐らく想像は付く。ハチロクレ
ビンに乗ってきて何もしないのは、流石に走り屋としてはちよつと
…と思っているに違いない。

「あの…この後の上りと下りの複合…オレにやらせてください。オ
レのハチロクレビンも走りたいと思っているに違いないんで…」

「う、うーん…まあ良いわ。拓也くんと拓也くんのハチロクレビ

ンに任せてみるのも悪くは無いだろうし」

「ありがとうございます。オレ、この勝負負ける訳にはいかないんで、頑張ります」

拓也はかがみにこう告げ、遠征初日のラストバトルは拓也のハチロクレビンvsみゆきのNSX TypeRとなった。

それから、つかさはかなり真剣に走っていた。もはや別人と見違えるほどだ。そして意外にも、最初は離されていたが、つかさは必死に追い上げ和也のGTOの後ろに居た。まだ追い抜けるというレベルの距離では無いが…。

「流石はFDだな。やっぱり付いてくる…だがもうすぐゴールだ」

和也は余裕の表情をしていた。だがその余裕の中に焦りも感じられる。つかさのFDは少しずつ追いついてきているのだ。

「…ま、まあもう大丈夫だろうな。落ち着いて自分の走りをしよう」

和也はこう自分に言い聞かせ、走りに集中した。

つかさはただただ黙って走り続ける。FDのエンジン音だけが彼女には聞こえているのかもしれない。一定に保っていた距離が、少しずつ縮まっていく。

「行ける…私のFDが…力を貸してくれてる…!!」

つかさは確信した。必ず奴を…和也を追い抜けると。そして、それは見事的中する。つかさは和也のGTOのすぐ後ろまで来た。

「何！？食いつかれた！！？だ、だがゴールはすぐ近くだ！！！」

和也はつかさのFDに食いつかれ、一度は焦るものの気を落ち着かせ再び冷静に走ろうとした。しかしつかさのFDはGTOの隣に並び、まさにギリギリの勝負を見せている。

「くそっ！！負けてたまるか！！！」

和也はものすごい力でアクセルを踏んでいく。しかし妙義の最終コーナーで勝負が付いた。両者ともしっかりブレーキを踏むのだが、一瞬つかさの方が和也より遅くブレーキを踏んだ。

「俺のGTOは負けんぞ！！！」

「…お姉ちゃん、私勝ったよ……」

つかさは勝ち誇った。勝敗のポイントはブレーキング。和也より『一瞬』遅くブレーキしたという点だ。たったその一瞬である。公道レースは一瞬の油断やミスが勝敗を分けるのだ。

つかさのFDはGTOの前に出て、その後見事勝利を収める。つかさでも十分に走れるという事を見せ付けられた場面であった。

「はは…やられたぜ……流石はFDと言ったところだな……」

和也は静かにアクセルを離し、そして静止したところで車から出るとつかさも同じく車を止め、和也の前に来た。

「えっと…今日は楽しかったよ。また相手してほしい…かな」

「FDのドライバー…こっちこそ、久々に痺れるバトルが出来た。ありがとな。またいつかバトルしようぜ」

つかさと和也は握手を交わした。またいつか白いFDとバトルするその時まで、和也は更にGTOのチューニングを重ね、そして強くなってつかさの前に現れるであろう。つかさもその時まで、FDを鍛え上げなければならない。

その後、つかさはかがみ達のもとに戻る。

「ふう…疲れちゃったよ（汗）」

「ふふ…お疲れ様、つかさ。よく頑張ったわね」

かがみはつかさの頭を撫でる。そうするとつかさは少し照れたような表情をする。

「えへへ…もう子供じゃないんだから止めてよお…」

「あんたはまだ子供よ。でもまあ、高校の時よりかはマシになったかもしれないけどね」

「うう…お姉ちゃん酷いよ（泣）」

つかさはわざとらしく涙目になる。それを見てかがみも少し笑った。だが一人、こなたはやけに真剣そうな表情をする。まるでこなたじゃないみたいなお表情を…。

「かがみ達…楽しんできるところ悪いけど、まだ完全に勝った訳じゃ

無いんだよ？次のみゆきさんのNSXは絶対速い……気を引き締め
ていかないと負けてしまうよ……」

「こなた……確かにそうだけど、何であんたが必死になってんのよ？
あんたらしくないわ」

「勝たないと意味が無いじゃんか……そんなの私でも考え付くよ？
せっかく遠征が始まって一日目なのに負けたらチームとしてダメだ
よ。私らしくないかもしれないけど……」

「……まあそうね。さて、最後は拓也君に任せるわ。全力で行って
よね」

「はい。絶対負けません。というか負けたくないです」

拓也は頷き、みゆきと挨拶を交わす。確認だがみゆきのNSXは駆
動形式がMR、拓也のハチロクレビンは駆動形式がFRである。

「ええと……高良さんでしたよね？バトルお願いします」

「はい。正々堂々、勝負いたしましょう！」

みゆきと拓也は握手を交わし、それぞれ車に乗り込む。外見ではN
SXの方が速く見えるが、性能面では分らない。拓也のハチロク
レビンもタダのハチロクレビンではない。こなたのハチロクがそう
であるように、拓也のハチロクレビンにも秘められた力があるのだ。
しばらくして、カウントを誰が取るか話し合いで決め、その結果和
夫がカウントを取る事に。

「それじゃカウント取るぞ！！両方とも並べ！！」

和夫の声に二人は頷き、定位置に止める。そして、カウントが取られる。

「5! 4! 3! 2! 1! ……」

スタートの合図が出るまで、拓也はエンジンを吹かしていた。気合は十分にあるようだ。そして…。

「…スタート!!」

二人は勢い良く走り出した。みゆきのNSXが先頭、拓也が後ろという感じでスタートした。

「相手のNSX…どれほどの実力があるか分からねえけど、このバトル…負けられない!!」

拓也はかなり気合があつた。これまでとは違うレベルで走っていた。だがそれはみゆきも同じである。

「さて…まずはお手並み拝見といきましょうか」

みゆきはアクセルをガンガン踏み込んでいく。まだレースは始まったばかりであるが、拓也のハチロクレビンが彼女のNSXのバックミラーにはもう写っていなかった。みゆきはコーナーへの突っ込みも上手く、ブレーキング、アクセルワーク、その他云々…いろいろと上手い。更に彼女の公道最速理論は涼介と同じように数学的な理論も用いたものとなっている。

「…やっぱり、簡単に勝てるって訳じゃあないよな…速い…速すぎ

るよ…」

拓也はこう呟いていたが、諦めるような事はしなかった。自分の車を信じて、そして自分のテクニクを信じて…。

しばらくして、みゆきは早くも余裕の表情を見せる。やはりNSX Type Rは速い…流石はType Rと言ったところか。

「…やはり、貴方の力はその程度、という事ですね。まだ始まったばかりではありますがこの勝負、勝たせてもらいます」

みゆきはもう拓也の事など目に入らないようであった。だがまだレースは始まったばかり…何が起るかは分からない…公道レースは…いや、公道だけに限らずどのレースでも油断は禁物である。

そんな事はみゆきでも分かっているであろう。みゆきはそういう事も考えて走っている。

「…しかし、本当に速いなあ…NSXってこんなに速いクルマだったんだな…」

拓也はこう呟いた。NSXはコーナーからの立ち上がりが速い。NSXのようなミッドシップ車は、エンジンが後方の方にある。車のエンジンは通常前方にあるのだが、ミッドシップは作りが違い後方にあるのだ。これがどういう事かと言うと、コーナーへの進入時にエンジンの荷重が掛からない、つまりはコーナー進入時には車体の重量のみで突っ込む事となる。そしてエンジンが後ろにあるので、加速が速い。コーナー立ち上がりの時に差が出る訳だ。

だが、ミッドシップは使い手を選ぶ。ミッドシップは独特の挙動を持っている。下手に扱ってはスピンばかりしてしまうだろう。それが故、車をいかにコントロール出来るかが非常に重要である。そう…その、乗り手を選ぶような挙動を持っている事こそが、ミッドシップの弱点でもある。少しでも気を抜けば、バトルの流れは一瞬で変わる。

「まあ…オレのハチロクレビンもそう簡単にはやられないけど…。とにかく、今はオレとオレのハチロクレビンを信じて走るしかないな」

拓也は少しずつアクセルを強く踏み込んでいった。ハチロクレビンはFR、後輪駆動だ。こなたの新ハチロク（FT-86）も、スプリンタートレノの特徴を残すため、駆動形式は当時と同じFRである。FRは四輪駆動の4WDと比べパワーに欠けるものもあるが、全部が全部そうではない。スープラやRX-8、フェアレディZ、その他云々…FRでも十分速い車は大いにある。

その中でも、悪魔のZは例外である。あの車は速い…600馬力超と言われている車である。そして、過去にも話したと思われるが、Zには黒い歴史がある。何人もの乗り手の命を奪ったという黒歴史が…。

さて、話が逸れたが、みゆきと拓也のバトルはどうなったであろうか。

「…ようし、少しずつだけど追いついてきているかな」

拓也はみゆきのNSXに何とか付いてきている状態であった。だが少しずつ距離は縮まってきている。みゆきはバックミラーにレビンが写っている事に少し焦りを感じているようであったが、それでも冷静に走っている。

「負ける訳にはいきませんよ…必ず勝ちます」

みゆきは拓也以上にアクセルを踏み込んでいった。しかし、拓也のコーナーへの突っ込みにより、少しずつ少しずつ、縮まってきている。まだ一本目ではあるが…。

「ん…？もうすぐ折り返し地点かな？」

拓也は折り返し地点に置いてある、パイロンを見た。そして二人はスピードを落として折り返す。上り勝負の始まりだ。

上りは拓也が得意としている。もちろん下りでも強いのだが。一方のみゆきは、かがみと同様に上り、下り、そして首都高戦を得意としている。

「さてと…上りでは負けられないよなあ…オレのレビン…」

拓也は急に姿勢を変え、レビンを加速させていった。その走りにみゆきは少し焦る。

「拓也さんのレビン…何だか、凄く速くなりましたね…私も負けていられないのですが、何でしょう…嫌な予感がします…」

みゆきは不安そうにしながらも、ただただ走り続ける。しかしその嫌な予感は、後に的中することとなる…。

妙義の複数のコーナーを二人ともクリアし、このまま行けばみゆき

が勝利するであっただろう。しかし、みゆきのNSXの動きが少しずつ怪しくなる。

「…おかしいですね、ハンドルが効きませんが…何故でしょうか…？」

みゆきの口からは、ハンドルが効かないとの事だが…。タイヤのグリップが弱くなったのだろうか？…いや、二本走っただけでグリップが弱くなるのは早すぎる。じゃあ一体何が…？

…実はハンドルが効かないのではない。みゆきがそう感じているだけだ。気が鈍り始めた、という事になるだろうか。

そして、その嫌な予感は的中する…。みゆきのNSXがややアンダーに流れていく。

「…！？一体何が…?!」

タイヤの滑る音が少しずつ大きくなる。それを拓也は黙って見てはいなかった。

「高良さん…大丈夫かな…でも、ここは勝負の世界、泉さん達のためにも負ける訳にはいかない」

拓也はどんどん加速させていく。減速もしっかりとしていく。だがみゆきはNSXの姿勢を保つ事に必死だった。

「…嫌な予感とは、この事でしょうか…」

みゆきは悟った。そして次の最終コーナーでバトルは急展開を見せる。コーナーに突っ込もうとしたみゆきのNSXがスピンし始めたのだ。

「…なるほど、こういう事でしたのですね…恐らく私の負けでしょう……」

タイヤの滑る音が響きながら、みゆきはブレーキを押し止る。その横を拓也のレビンが素早く通り過ぎた。これによって、拓也の勝利となったのは言うまでも無い。

その後、みゆきは止まったのを確認し、再びゆっくり走らせた。普段のみゆきにはこういう事はないのだが、今日はたまたま調子が悪かったのだろう。そして二台ともこなた達のもとに戻る。

「ふう…泉さん、やったよ!」

「拓也君…キミならやるって信じてたよ♪」

「まあ正直ギリギリだったんだけど…」

拓也は少し苦笑しながら答えた。そしてかがみ達も拓也に言葉をかける。

「お疲れ様、拓也君。見事だったわ、あんたの走り」

「あ…かがみさん、こんなオレでも役に立てたなら良かったです」

「ええ。ただ次のバトルは私が出るからね。次の次までに車の調整とかをしておいてちょうだいね」

「はい。オレのレビンも少しずつ弱くなってきたんでボディを新しい物に変えないと…」

拓也はレビンのボンネットの部分に触れながら、こう呟いた。そしてみゆき達が一言、かがみ達に言いに来た。

「拓也さん…お見事でした。貴方の走り、素晴らしかったです」

「高良さん…高良さんも速かったですよ。オレが勝てたのは、奇跡だと思います」

「いえ…またいつの日か、走りあえる時が来ると良いですね。それでは、私達はこれで失礼します。今後の遠征も、頑張って下さい♪」

みゆきは丁寧な礼をして、NSXに乗り込んだ。それに和夫、和也も並んだ。

「ハチロクのドライバー…またな！」

「うん!! 次会った時も負けないよ!!!」

和夫とこなたは互いにハイタッチで別れを告げた。そして和也とつかさもまた…。

「FDのドライバー…終つかさだったか? 良かったら今度また走りあおう。一応俺の連絡先教えとくぜ」

「え？良いの？…じゃあ、空いてる時があったらまたよろしくね♪」
つかさは携帯を取り出し、和也の連絡先を教えてもらった。この時点で何か怪しい関係になってるようだが…。
そしてこなたはそんなつかさの様子を見てニヤけながら一言。

「あれえ〜？つかさと和也さん連絡先なんか教えあっちゃってどうしたのかなあ〜？」

「こ、こなちゃん！！何もないよ！？」

「ふ〜ん…まあ良いや」

こなたはその後もニヤけていた。そこにかがみがこなたに向けて同じような事を言う。

「あのねえ…だったらこなたと拓也君の関係もなんか怪しいわよね〜♪」

「うっ…ま、まあ私達の事は別に良いじゃん。てかもうこの話止めようよ…」

「そうね。今日は疲れただろうし、触れないでいてあげる」

かがみはこなた達の体力の事を考え、あまりちやかしてはいけな
いと考えそれ以上は言わなかった。そして和也とつかさはお互いの携
帯に連絡先を登録し、両方とも笑顔で別れを告げた。

そして、みゆき達が帰っていくのを見届けたかがみ達は皆を集め話
しかける。

「さて…遠征一日目、お疲れ様。この調子で次の遠征も頑張るわよ!!」

かがみの言いかけに皆元気よく頷き、そこで解散とした。
…と、こなたの携帯に突然電話が掛かってきた。

「はいもしもし?」

『こなた…父さんはどうしたら良いと思う…?』

「お父さん!? 一体どうしたの?!」

『父さんは今…湾岸線を走っているんだけど…湾岸線でゆいちゃんよりも強い…多分今まで走ってきた奴で最強の奴と走っているんだ…ゆいちゃんも苦戦中なんだ…』

「そんな…そんなに強い相手なの…?」

『ああ…このままじゃ、お父さん達が負けてしまうよ…とりあえず、来るなら来てくれ…じゃあまたね、こなた…』

そうじろうは電話を切った。どうやら今の電話は携帯によくある、Bluetooth機能を使って電話をしていたようだ。こなたはハチロクに乗りながら考えていた。

「…お父さんやゆい姉さんが苦戦するような相手って…一体どんなのなんだろう…」

こなたは考えても浮かばなかった。そしてもちろん、湾岸線へと乗り込むのであった。

一方、湾岸線では…。

「それにしても…あれは速い、速すぎる…」

そうじろうは前を走る一台の黒い車を見つめていた。その車種はと言うと…ポルシェ911ターボ…通称、ブラックバードだ。だがその911ターボに乗っているのは島達也ではない。他の誰かだ。

「…そのインプも、赤いエボも大した事ねえな。やはり達也から引き継いだこの車は最高だぜ」

少し笑みを浮かべながら走るそのドライバーは『高宮幸介』、その人である。彼は以前は普通の軽に乗っていたが、ある時島達也から「ポルシェ911ターボを受け継いでくれないか？」との事を受け、彼は喜んで受け継いだ。実は達也と幸介は親友であったりしたようだ。

そして今、その車にそうじろう達が苦戦している、という訳だ。

「それにしても…さっきから気になるんだが…後ろから何かものすげえ速い奴が追いかけてきてねえか？インプとエボ以外の何かが…」

幸介はバックミラーを確認する。するとそこには、インプとエボ以外の黒い車が猛スピードで追い上げてくる。車種は…R34型スカイラインGT-Rだ。詳しく言うとVスペックNurだ。

「コイツ…俺が求めていた相手はお前だ…インプとエボのドライバー、悪いが俺に任せてくれ!!」

「その声…まさか…助けに来てくれたのか!？」

そうじろはそのドライバーと通話を始める。どうやら知り合いらしいが…。

「ああ。いつもおっちゃんには世話になってるから、恩返しにアイツを葬り去ってやる。おっちゃんも無理はするな!!」

「分かった…ファルコン…頼むよ。君のGTRの凄さを見せ付けてやれ!!」

「分かった!!じゃあまた!!!!」

…読者の皆様はお気づきだろうか、小説でこんな事があって良いとは決まっているが、そのGTRのドライバーは…作者である私だ。普通はあってはならないこの展開だが、あくまでこの小説の仕様だと思って楽しんでもらいたい。

「さて…ぶっ飛ばすぞ!!俺のGTR!!!!」

ファルコンはアクセルを強く踏み、911ターボのすぐ後ろに付く。幸介も少しは焦ってきているようだ。

「何だあいつ…俺より速いんじゃないか!？」

幸介は驚いた。それもそのはずだ。このGTRは800馬力をゆうに超える馬力を持っている。チューニング内容はゆいのエボとあ

まり変わらないようではあるが。

「さあ：おっちゃんの敵を取らせてもらうぜ！！俺のRは最強だ！！」

ファルコンは強気な姿勢でアクセルを踏み込んでいく。

こうして、かがみ達の遠征一日目は見事勝利で終わった。だが湾岸線に現れた黒い車：ブラックバードの異名を持つポルシェ911ターボに苦戦するそうじろうとゆい。だがそこにもう一台、救世主として現れた黒いGT-R：そのドライバーは作者である私という小説を書く上では恐らくあってはならない事ではあるが、そのGT-Rがポルシェ911ターボを追い詰める。果たしてこのバトルの行方はどうなるのだろうか…？

ACT. 15 伝説のR (前書き)

ようやく次話を上げることが出来ました(汗)

今更ですが、この小説内ではいろいろあり得ない設定がありますが、何度もうのようにそれはあくまで仕様だと考えて下さい(大汗)

さて、今回については、ブラックバードはポルシェ911ターボの事だと作者は勘違いしています。本当はポルシェ911ターボに乗る、島達也がブラックバードなんでしょうが……(^| ^;)

次回からは、70スープラことJZA70型スープラを駆る走り屋とのバトルが展開されます。

ACT・15 伝説のR

こなた達は見事遠征一戦目を勝ち抜いた。しかし、その後湾岸線にて、一台の黒い車：ブラックバードと呼ばれた「ポルシェ911ターボ」が現れる。だが、そこにもう一台黒い車：R34型スカイラインGT-R VスペックNurが現れ、激しいバトルが繰り広げられていた。そのドライバーは、作者である私だ。ファルコンはニクネームであり、本名はとある理由により明かせないとか。：さて、そんな事はさておき、今湾岸線では先程も言った通り、二台の黒い車：怪鳥と呼ぶに相応しいその二台が激しいバトルを繰り広げている。

「ちっ：少しはやるようだな、あのGT-R：」

幸介は舌打ちをしながら、アクセル全開で湾岸線を走る。だがそれはGT-Rのドライバーもそうである。

「GT-RのRは：不敗神話のRだッ！！俺の黒いRが負ける訳にはいかないッ！！！！」

ファルコンの黒いRはかなりのスピードを出している。300キロぐらいであろうか。

「：まあ良い、日産のGT-Rとポルシェの911ターボ：どちらが速いか勝負だ！！」

幸介も負けじとスピードを出していく。日本車メーカーの車と外国車メーカーの車、どちらが勝つのか：見物である。

：敢えて言うと、決して外車が速いわけでは無い。作者自身は、過

去には外車が一番速い、という考えがあった。だが外車で速いマシンは一部である。その一部のマシンの中に、ポルシェ911ターボがある、という訳だ。

「さあ…もつと楽しませてくれよ!! 黒いGT-R!!!」

幸介は運転に集中し始めた。二人からはものすごいオーラが溢れてくる。流石のそうじろうやゆいも近づき難いようだ。

「…流石、ファルコン君のRは凄いな…伝説のRと言われるだけの事はあるな…凄いい、凄すぎる……って!? う、後ろからもう一台大きい車が突っ込んでくるぞ!!!?」

そうじろうはバックミラーを何度も見た。するとそのバックミラーには、一台の黄色い軽トラのような車が写っていた。何故軽トラがあんなに速いのだろうか…。

「な、何なんだあの車は!? ハイエースのはずだよな?! 何で速い?!」

そう…その車種はハイエース。軽トラのような車である。そしてそのドライバーはと言うと…。

「…あきら様、これであきら様にも勝てる…ハイエースで勝負だあ!!!」

…まさかの人物である。白石みのるである。作者自身は、「ああ、なるほどか…」と思ったところである。

さて、これから彼にはすぐにある悲劇が起こる。まあ一応その様子を伝えよう。彼の車は確かに速いが、ハンドリング性能が低い。何

が起こるか…予想は付くであろう。

「あきら様あ…見てて下さいよ…僕の走りを!!」

みのるは凄い勢いでアクセルを踏み込んでいく。流石にファルコンと幸介も気付く。

「ん…何だあれ…? ハイエースが俺らと渡り合おうってか、ナメてるな」

「あれはハイエース…まあ嫌いじゃないけどな、あの車…でもやめといった方が身のためだと思うんだけどな…」

ファルコンはハイエースという車が嫌いでは無いと言いつつ苦笑、幸介はハイエースを否定している。ファルコンと幸介の性格の違いは、ファルコンはどんな車でも愛する心を持つ、そういう性格である。変わって幸介は速い車のみしか眼中に無い、遅い車は徹底的に批判、車体ごとその車にぶつかって攻撃するという酷い性格だ。

「しかし…本当に良い具合に仕上がってる車だな。ひよっとしたらブラックバードより速いんじゃないか？」

ファルコンはこう呟いた。その呟きが相手にも聞こえたのか、少し怒りを感じる。

「黒いGT-R…あの糞車が俺より速いだと…ふざけんな!!!」

幸介は怒りながらもしっかり運転をする。そして、ハイエースのドライバーは…。

「あきら様あ！！これが僕の、ドラテクですよ！！さあ見てくださ………って!？」

みのるはハンドルを激しく動かす。しかし車体が動かない。さあどうなるだろうか。緩いカーブが目の前にあるが、高スピードでぶつかればさぞ大事故になるだろう。そして、それは無残にも起こった。

「う、うわあゝ！！！！あきら様あゝ！！！！！！！！」

白石みのるのハイエースは壁に激突しまくり、フロントガラスにヒビが入って、そして止まった。幸いみのるは軽いケガで済んだみたいだが…。

そしてその横をGT-Rと911ターボは高速で通り抜けた。それぞれ眩きながら…。

「へっ、結局はハイエースだ！あばよ！！」

「ハイエースのドライバー…：生きている事を祈るよ…：ハイエースは意外とドライバーを守ってくれるかも知れない…：さあ、奴とのバトルを再開するか！！」

ファルコンは再び幸介とのバトルを再開する。まだ幸介を抜いてはいないようだが…。

「…焦ったらダメだ、抜くポイントはいくらでもある…：俺のRならやってくれるはずだ」

ファルコンは目の前を走る911ターボを見据えながら、ただ走る。伝説のRは、もしかしたらわざと相手に走らせているのかも知れない。

幸介は、まだ伝説のRの全てを知った訳ではない。今は余裕を持て余しているが、後に彼は伝説のRの全てを知る事となる…。

「…フン、黒いGT-Rよ…GT-Rと言っても、乗り手によって速いマシンにも遅いマシンにも変わる。お前がそのRに乗った事によって、遅いマシンに変わったんだ。残念だが、お前の力はそれだけのものだ、もうお前には用は無い。あばよ!!!」

幸介はアクセルを強く踏み、加速をしていった。だが、ファルコンは焦る様子など一つもない。むしろそれを待っていたかのようだった。

「分からねえかなあ…俺のRは普通のRじゃねえんだよ…最強のRだって言っただけじゃねえか。…まだ俺と俺のRが伝説になった訳じゃねえかもしれないけど、皆からは『伝説のR』だって呼ばれてんだ。こんな簡単に負けると思うなよ!!」

ファルコンは減速し一旦ギアを5速に下げる。何をするつもりだろうか？

「あいつ…もう諦めたのか?ん?」

幸介は鼻で笑いながら煽る。速さに飢えた人間だ…。だがファルコンは気にしない。ファルコンのRには、ある秘密がある。

「…このRは、一旦5速に下げてから、9000回転まで回してから6速に上げる事で、一時的に爆発的な加速を得る事が出来るんだ。その加速を利用してお前を抜き去ってやる!」

ファルコンはメーターを見ながら、前に行く911ターボを追う。

今はおよそ7000回転ほどである。

スピードは少しずつ上がり、早くも8000回転に近づく。

「何がしたいか分からんが…このバトルはもらった!!!」

幸介はRの秘密に全く気付かず、加速していく。ファルコンのRの加速は911ターボの加速よりも上に行く。

そして、次の緩いコーナーを抜けたところで9000回転になり、ファルコンは真剣な表情で静かにギアを6速に上げる。するとGT-Rのマフラーから火が吹き、馬鹿でかいエンジン音がして一気に911ターボを抜き去った。

「何てことだ…：…やっぱり伝説のRというのは、本当だったのか…フツ…：やられたぜ、黒いRよ…：」

幸介はアクセルから少しずつ足を離し、車のスピードが少しずつ落ちていった…。

しばらくして、湾岸線を降りたところで後から降りてきたそうじろう、ゆいと合流し、近くのスタンドへと寄る。結局こなたは来なかったみたいだ…。

「ふう…：何だかんだ言って、あいつとのバトル面白かったな」

「ファルコン君、お疲れ様。とりあえず、缶コーヒー奢るよ」

そうじろうはファルコンとゆいに買ってきた缶コーヒーを渡す。

「それにしても君は凄いねえ♪お姉さんビックリだ！」

ゆいはいつものように親指を立てながら話す。

「ははは…しかし、湾岸の女王の称号を奪い取ったゆいさんが苦戦するなんて、正直驚きましたよ」

「う、うん…まあ今回たまたまエボの調子が悪かったんじゃないかなあ…あはは…」

ゆいは少し苦笑した。そしてしばらくして、こなたのハチロクが今頃になってスタンドに現れた。

「お父さんにゆい姉さん!! どうだった!？」

「ん? ああ、こなた…うん、ばっちりこの伝説のRがやってくれたよ」

そうじろうに言われ、こなたはその伝説のRのドライバーを見る。すると、何かを思い出したかのような表情をする。

「…あー!!! ひょっとして君は…!!」

「お、お前…もしかしてあの時の…!!」

「おや? こなた、知り合いなのかい?」

「知り合いも何も、走り始めてすぐの頃に、一番最初に相手をして

くれた人だよ。その時は黄色いエボ？に乗ってなかったっけ？」

こなたはファルコンに聞く。どうやらこの話が本当ならば、彼はG T—R以外にも乗っていたという事になる。

「乗ってたぜ。ま、まああの時はエボにも興味があったからな…今はG T—R一筋だな」

「やっぱり。今じゃ連戦連勝なんだってね。凄いじゃん♪」

「まあこのRに乗ってからは一度も負けた事ないからな。今日も9 11ターボ…ブラックバードをぶっちぎってきたぜ」

ファルコンとこなたの話は盛り上がった。しばらく二人だけで話し込んでいたようだ。

しばらくして、ファルコンはある提案をする。

「ふう…なあ、久しぶりにバトルしないか？」

「うーん…でも君って凄い速いからねえ…」

「大丈夫だ、俺の苦手なC 1内回りを走る。お前にとっては得意なコースかもしれねえから良いだろ？」

「ゴメン…私も苦手…」

こなたは少し暗めに言った。するとファルコンは焦ったような表情をしてこう言った。

「じゃ、じゃあさ、結局こうなるけど湾岸線で良いか？湾岸線走るのも良いと思うぜ」

「…うん！じゃあ湾岸線で決まりだね♪」

「おう！お前のハチロクがどこまで進化したか後ろからじっくり見せてもらうぜ。って事でこなたのおっちゃんといいさん、今からこなたと走ってくるぜ」

「行ってらっしゃい。くれぐれも無茶だけはしたらダメだからな」

こうしてこなたとファルコンはそれぞれの車に乗り込み、また湾岸線へと乗り込むのであった。

それを後ろから見ている人物が…紫色のツインテールを持ち、黒いR35に乗る…柊かがみだ。

「あの男…あれからどれほど走れるようになったのかあんだ達の後ろからじっくりしっかり見させてもらうわよ」

かがみは以前乗っていたR34型スカイラインGT-Rに乗るファルコンにライバル心を燃やしていた。同じGT-R乗りとして負けられはしない…その心が彼女を動かしたのだった…。

そして、二人はかがみが追っている事を知らずに湾岸線に乗り込む。辺りは良い具合に夜の雰囲気を出している。

「ふふ、これぞ湾岸線って感じだな」

「そうだねー湾岸線のこんな風景見た事無いよー♪」

こなたとファルコンは携帯のある機能を使って通話をしている。もちろん携帯を持ちながら運転してはならない。

「さてと…お前が前に出ろよ。俺は後ろでお前の走りを見るから」

「うん。じゃあ行くよ！私のハチロク！！」

こなたはいつもの通り、アクセルを踏んで加速させていく。

「おー：前と比べて加速が良くなってるな。秋名のハチロクって言われるだけの事はあるな」

ファルコンは少し驚いた。だがそれも想定内なのか、冷静に走る。バックミラーにはまだ黒い影は写ってはいないようだが…。

「今日のハチロク調子良いねえー♪何か凄く走りやすいよ」

こなたは少し笑みを浮かべながら、ハチロクを走らせる。本当に調子が良いさそうだ。

「すげえなあ…ハチロクでもあんなに走れんのか。湾岸線でも十分

戦っていけるレベルじゃんかよ」

ファルコンはこなたの走りを絶賛し、自身も少しアクセルを踏み込んでいく。

一方、二台を追うかがみは…。

「あいつ…待ってなさいよ…あの時はたまたま手を抜いて負けただけなんだからね…決して私自身が遅かった訳じゃ無いんだから…！」

かがみは少しずつあの二台に近づいていく。まだあの二人には気付かれていないみたいだが…。

戻ってこなた達はバトルを続けている。バトルというよりはただの遊びのように見えるが。

「さてと、もうそろそろ本気出しても良いと思うよ♪」

「お、良いのか？すぐにぶっちぎるぞ…って、後ろから何か凄い速い奴が煽ってくるな…」

「え…？車種は何…？」

「えっとだな…R35型GT-R…？まさか…ま、何度でも相手してやるけどな」

「え…R35型GT-R…？間違いない…それかがみだよ…」

こなたは一瞬驚いたが、再び自分の走りに集中する。後ろからやってくるその車：R35型GT-Rは紛れも無くかがみである。

「あんた！！今日こそ勝つわよ！！！」

「随分煽ってくるな：しょうがねえ、相手してやっか。すまんけどこなた、俺達に付いてこれるなら付いてこいよ」

「うん！じゃあ私達三人でバトルって事だね」

こなたはファルコンに返答し、完全にバトルする時の姿勢に切り替わる。こうして今湾岸線にて、こなたのハチロク、かがみのR35型GT-R、ファルコンのR34型スカイラインGT-Rの三台でバトルが繰り広げられようとしていた。

だが、またもう一台、後ろから速いスピードで走ってくる車が：白いFD：つかさだ。

「おいおい：今度はFDかよ：まあ良いや。これで四台で楽しく走れるな」

「ちょ：つかさは家で休んでなさいって言ったのに：！！まあ仕方ないわ：誰が一番になるか勝負よ！！！」

「おうお、良いねえ♪四台が湾岸線で熱いバトルを展開する：これ私が昔やってた湾岸○ツドナイ○ってゲームでこういう展開よくあったかな♪」

「あんたはまたゲームの話を：まあそれがこなたらしいけど」

という訳かこなたの声が聞こえたかがみは呆れたような表情をす

る。そしてつかさは…。

「お姉ちゃん、みんなで走った方が楽しいから私も混ぜて〜♪」

「良いわよ、つかさ。ただ、私達に付いてこれるかしらね」

「大丈夫だよ〜♪じゃあ行くね〜」

こうして改め、こなたのハチロク、かがみのR35型GTR、ファルコンのR34型スカイラインGTR、つかさのRX-7（FD3S）の四台にて、熱いバトルが繰り広げられるのだった。

最初はファルコンは三台の後ろに行く。適当に流しておくつもりだろうか。

「俺はこういうバトルを待ってたんだ。こうやって四台並んで楽しくバトルするこの感じをな。適当に流しておくぜ」

「あんた…後悔してもしらないわよ。こっちは容赦なく行くからね」

「はいはい、分かったっつ。俺が負ける訳ねえから」

「随分自信に満ちてるわね…ま、良いわ」

かがみはアクセルを踏み込んでいく。この四台には近づき難いオーラが溢れている。だが彼らからすればこれは遊びなのだ。また、つかさとこなたは…。

「えっと…じゃあこなちゃん、行こっか」

「うん！どんだんかかってきたまへ〜♪」

こなたは自信満々に走る。つかさもそれにつられるように走り出す。四台で走っているとは言ったものの、かがみとファルコン、つかさとこなたに分かれてバトルしてるようにも見える。四台でのバトルは誰が誰の敵か分らないが、それがファルコンとこなたにとって、は凄く楽しいらしい。考えてみれば、確かにそうである。

その後、彼女らは走り続け、結局ファルコンが単独で勝利を収めた。ゴールは無いから順番は決めようにも決められないが、恐らく二着はかがみ、三着はこなた、四着はつかさであろう。だがこなたとつかさは同着であるという事も考えられる。さて、それはさておき、四人はいつもとは別の場所にあるスタンドへと向かった。

「全くよ…何度勝負しても結果は同じじゃねえかよ」

「ち、違うのよ今日は！！今日もたまたま手を抜いただけ！！」

「はいはい、分かったよ。まあでも…」

「でも…何なのよ？」

かがみは少し疑問に思った表情をする。するとファルコンは静かに言う。

「今日のお前とのバトル、楽しかったぜ。お前も楽しかっただろ？」

また相手をしてくれな」

「な……べ、別に私はあんたとのバトルが楽しかった訳じゃないんだからね!!ま、まあでも、また相手してあげても良いわよ」

「またお前は…素直になれよ」

「あゝ、これはかがみんの久々のツンデレっぷりが出てきたねゝ♪」

「こなた…あんた久しぶりにやられたい…?」

かがみは拳を構えながら、恐ろしい表情でこなたの方を見ている。
流石のこなたも少し焦る。

「あゝ…かがみん、冗談だからさ…殴らないで…」

「全く…まだこなたがこんな感じなんて、呆れてくるわ…」

「まあそれがこなたらしくて良いって事じゃないか？」

ファルコンは軽く笑いながら一言呟いた。そして、ファルコンの携帯に一本の電話が来る。

「おっと…：はい、もしもし？」

『ファルコンか？ちょっと今から俺とバトルしないか？』

「うーん…まあ良いぜ。どこで走るんだ？」

『そうだな…C1外回りを走ろうぜ』

その電話の主は、C1外回りで走らないか？との提案を持ち上げる。その電話の主はいったいどのような車種を扱うのだろうか…。

「C1外回りか…よし、今からそこに向かうぜ」

『おう、待っているぞ』

ファルコンは電話を切り、こなた達に一言言う。

「悪い、またバトルの申し込みがあった。今から首都高速都心環状線…まあ、C1外回りを走ってくるぜ」

「待つて。相手の車種は何？」

こなたはファルコンを呼び止め、相手の詳しい情報を聞いた。

「えっとだな、70スープラ…JZA70型スープラを使う奴だ。まあコイツからは何回もバトルを受けてんだがな…」

「そうなんだ…70スープラ相手でも君なら勝てるよね？」

「当たり前だ。俺のRが負けるはずない。それじゃ、行ってくるかな」

ファルコンは自信に満ちた表情でこなた達と別れ、GT-Rに乗り込みC1エリアへと向かった。

それからしばらくして…。

「…それじゃ、私達も帰ろうか」

「そだね。今日の走りは楽しかったよ」

「…まあ私も、あいつの走りを久々に見れて良かったかな…」

かがみは少し顔を赤らめながら、話す。ファルコンとは良きライバルであり、良き走り屋仲間でもあるからだろうか。

「本当、凄いよね…あのGT-R…」

「そうだね…こなちゃん…私のFDでもこなちゃんのハチロクでもお姉ちゃんのGT-Rでも敵わない、とっても速い車…それがあの車だね……」

「つかさ…それにこなた、今はとりあえず遠征の事に集中するのよ。まあ次は…秋名や妙技、赤城じゃない…長尾峠と言ったところだね」
かがみはこなた達に次の遠征の事を話す。遠征先からして、どうやら関西のチームではないようだ。

「長尾峠かあ……うん、きちんと走れるようにしとかなないとね」

「こなた……そうだね。あと、その峠で煽ってくる奴が居ても無理にバトルしたりしたら許さないからね」

「分かってるよ、ハチロクをこれ以上壊したくないし。じゃあもう帰ろっか」

こなたの言いかけで皆解散し、それぞれ帰っていった…。

こうして、ブラックバードとの勝負は、予想通りR34の勝利で終わった。その後、こなたが現れ、湾岸線を走りあった。どうやらこなたはファルコンを前から知っていたらしく、すぐに和んだ。そして、その湾岸線でかがみ、つかさも合流し、4台によるバトルが繰り広げられる。実はかがみは、湾岸の女王となる前に一度彼と勝負しており、その時見せ付けられた走りに言葉を失っていた。そしてチューニング等を重ね、そして遂に彼とのバトルに勝った。そしてそれまで彼が湾岸の王であったが、見事かがみが湾岸の女王として輝き、またエボ？に負けて奪われ、そして今となる。

今となっては彼はそんな称号などどうでも良いらしく、ただただ走り続けるだけだとか。

今では伝説のRと呼ばれる彼が、今度は70スープレを駆る走り屋とバトルをするそうだが、果たしてどうなるのだろうか…？

ACT. 16 70スープラ（前書き）

今回が一番苦勞しました（汗）

何故かと言うのは、首都高速環状線という場所にどこから入るのがと言うのがイマイチ分からなかったからです。今回おかしい部分がたくさんあるかも知れませんがご了承下さい（大汗）

ACT. 16 70スープラ

C1外回りにて、バトルを申し込まれたファルコンは、R34を走らせながらそこへ向かっていた。首都高速都心環状線は、内回り、外回りの二つがあるようだ。

今回のバトルで相手となる70スープラ：JZA70型スープラは、海外では三代目、日本では初代のスープラだ。セリカXXから独立した車種であり、駆動形式はFR、5速MTを採用している。

エンジンは2.5Lツインターボ 1JZ-GTE型直列6気筒エンジンを搭載しており、トヨタとしては初の280馬力車だとか。今回の相手は、更に手を加え、何とか600馬力まで上げている。R34はMAX825馬力：馬力だけで見ると明らかにR34の方が上である。

「70スープラか……まあ気を抜けない相手ではあるけどな」

ファルコンは独り言を呟きながら江戸橋JCTへと向かう。そこからC1外回りでのバトルが始まるようだ。

そして、江戸橋JCTに乗る前に一度車から降り、白い70スープラの相手と対面する。ファルコン同様に、相手も福岡ナンバーを持っているが……。

「お前が俺にバトルを申し込んだ奴か？」

「ああ、お前、俺の事覚えているか？」

「…もちろんだ。久しぶりだな…ユウ…」

70スーブラを駆るドライバー…それは、ファルコンとは昔から知り合っている走り屋『小林ユウ』だ。ユウは昔からずっと70スーブラで走っている。

「…相変わらずお前はR34か…」

「ユウ、お前だって70スープラじゃねえかよ」

「俺とコイツは切り離せない存在だ」

「そう言うなら俺も同じだ。俺とこのRは切り離せない」

ユウとファルコンはしばらく言い合った。仲が悪かったのだろうか…？

…いや、そうではないようだ。ファルコン、ユウはお互い軽く笑いながら話す。

「…ふふ、ユウ、早くバトルしようぜ。こっちはバトルしたくてたまらねえ」

「ファルコン…そうだな。今日こそお前に勝つ…!!」

「おう!! 全力でかかってこい…!!」

ファルコンとユウは固い握手を交わし、それぞれ車に乗り込む。

「それじゃ、行くか、俺のR!」

「今日こそは…今日こそは勝つぞ!!」

それぞれ、エンジンをかけ、アクセルを踏んで何回かエンジンを吹かし、パーキングブレーキを引いた。そして二人は勢いよく走り出し、江戸橋JCTに乗り込む。C1外回りでのバトルが始まった。

先頭はもちろんファルコン。だがファルコンは最初は敢えて流す。よって先頭はすぐにユウとなった。

「さてと、お前がどのくらい上手くなったか見せてみるよ!」

「ファルコン…その余裕が命取りにならないようにな…俺の70スープラは進化したんだ」

ユウは序盤からほぼ全開の走りを見せる。

「おーお、元気な走りを見せるな」

ファルコンは余裕の表情であるが、彼の走りにほんの少し驚く。と、後ろから赤いR32が…。

「ん? 何だ? R32か…まあ面倒見てやるよ」

ファルコンはまたまた余裕な表情で流した。赤いR32の馬力は450である。

「へへ、こいつら一気に抜き去ってやる。見てろ、俺の450馬力を!!」

その男は自慢げな表情で素早く走り去っていく。相当な腕の持ち主

のようだが…。

だが、ファルコンもユウも、その男の事は視野に入れてはいない。そしてR32の男はユウのスープラを抜き去る。

「あばよ、スープラとR34の奴よ!!」

R32の男は前を走り去っていく。ファルコンとユウは同時にため息をつく。

「はあ…速いのは良いんだがな……お前らよ……」

「そのR32…ちゃんと自分のモノに出来てんのかあ!!」

二人が叫んだあと、その赤いR32の前に一台のトラックが…男は声を出し、慌ててハンドルを切る。だが、避けきれず、トラックの左後ろの部分にかすり当たる。

「う、うぎゃあ!!まづい!!!」

その様子を、後ろで見ていたファルコンとユウは「言わんこっちゃない…」と思いながら、トラックの右横を通過していく。

車は、自分のモノに出来なければ言う通りに動いてはくれない。悪魔のZがそうであるように…。悪魔のZは、乗り手を選んでいる。

選ばれし乗り手以外はまるで拒否するように、事故を起こす。そうして幾多もの事故に遭うが、修理すれば何度でも蘇る、まさに『悪魔』である。悪魔のZは正確には、『悪魔のように速い』Zである。そのGTRは、壁に何回か当たり、車体ごと宙に浮いてボンネットが吹っ飛び、そして止まった。ドライバーは流石に無傷という訳にはいかないだろう…。

ファルコンとユウは気の毒に思いながら、バトルを続ける。

「…さて、バトルに集中しよう。にしてもユウの奴…前より格段に速くなっているな…こりゃちょっとヤバイかも……」

ファルコンはユウのドラテクの進化に少なからず焦りを感じていた。距離は一定に保たれてはいるが…。

一方、ユウは構わず走る。マフラーからは火が出て、スープラとしてはなかなかパワフルそうな走りを見せ付ける。ファルコンに勝ちたいという思いがスープラの性能を更に高めているのだろう。

そして、バトルは中盤に突入する。月夜の夜に光る白と黒の二筋の閃光は、お互い一定の距離を保ちつつも激しい闘争を展開している。

「さて…一気にちぎるぞ!!ただパワーが大きい4WDなんぞにスープラが負けるはずがない!!!!」

ユウはアクセルを踏み、白い70スープラを加速させる。そしてR34との距離を一気に離す。

「くっ…!!速い…マズいんじゃないか……!?!」

ファルコンは徐々に焦り始める。そのせいからか、少しラインが乱れる。

「うおっ!しまった!!ラインが乱れるなんて走り出した時以来だ…集中集中……」

ファルコンは壁ギリギリにGTRを動かしながらも何とか持ちこたえる。そして前にトラックが来て、焦りながらハンドルを切る。

「ちっ…弱ったな…あいつとの距離がガバッと開いちまった…」

ファルコンは前の白い70スープラを遠目で見ながら走り続ける。ユウとの距離は随分と開いてしまった…。もう勝てないのだろうか。と、ファルコンは一瞬思った。しかし、ファルコンのR34はMAX825馬力、相手は600馬力だ。

「…やっぱ、あのスープラは馬力以外の何かを持ってやがるな…悪魔のZじゃねえが…」

ファルコンは既に見抜いていた。あの白い70スープラには通常のスープラとは違う何かを持っている事を…悪魔のZほどではないが…。

白い70スープラにはパワーだけではない、足回りのチューニングも当然ながら行われている。足回りにはスピードが高くとも通常時と同じように曲がるようなチューンが施され、200Km/hでもしっかり曲がる。これが奴の強さの一つだ。

ファルコンにはそのようなチューンは施されていない…ように見えるが、違う。今は隠しているだけだ。

「ふっ…R34が見えなくなったか…この勝負、もらったあ!!!」

ユウは余裕の表情になり、走らせる。R34はバックミラーには写っていない。まさか、こんな所でR34は朽ちてしまうのか……。だが…R34は負けなどしない。ファルコンは『ふう…』と一息つく。

「…さてと、ちょいと本気を出すか…相手があんだだけ速いんだ、俺らも本気を出そうぜ。俺のR…」

ファルコンは軽く笑いながら、アクセルを少しずつ踏み込んでいく。R34もファルコンの言いかけに応えるように加速していく。まるでファルコンとR34は強い絆で繋がりにあるように見える。それもそのはず、ファルコンは走り始めてからほぼずっとR34と共に走ってきた。時にはR34を裏切り、エボ？に乗った事もあったが…。

ここから先は、ファルコンの過去の話になる。

「それじゃ親父、走ってくるぜ」

「あ、ああ…今日もGTRで走ってくるんだろう？」

「ああ、俺にはR34以外目はないよ」

ファルコンはいつもR34で湾岸線を走っていた。その当時はまだ上手いとは言えないドラテクであったが…。

「さてと…行こっか、俺のR」

ファルコンは可愛がるようにR34のボンネットに優しく触れ、そしていつも通り乗って湾岸線へと出る。その後ろから、白いエボ？が付いていく…。

「GT-Rか：GT-Rよりもエボ？が速いという事を分からせてやるぜ、へへ…」

その男は、こなたが戦った時のドライバーである。どうやら昔は白いエボ？に乗っていたようだ。その男にファルコンは気付く事もなく、ただ湾岸線へと乗り込むのであった…。

そして、しばらくして湾岸線へと乗り込んだファルコンとR34。もちろん後からエボ？も乗り込む。その当時のファルコンのR34は300馬力、そして相手のエボ？は550馬力…足回りのチューニングも行われ、R34より戦闘力は十分にある。アクセル全開だとすぐに追い抜くレベルだ。

「ん…？エボ？か：俺のRには勝てないけどな！」

ファルコンはすぐに気付き、走りに集中し始める。だがエボ？の男は何てことない表情ですぐ横に来る。

「GT-Rのドライバーよ…エボ？はこんなに速いんだぜえ！！Rよりこっちに乗ってみろよ！！！」

その男はアクセルを強く踏み込み一瞬でGT-Rをぶっちぎった。そのスピードにかなりのショックを受けたような表情を見せるファルコンの姿があった…。

「おい…一瞬で勝負が付くなんて…嘘だろ…？なあ…R！俺のR！！もっとスピード出してくれよ！！俺のR！！！」

ファルコンはアクセルを強く踏み、加速させようとするが全くスピードが上がらない。そのG T—Rに少しファルコンは嫌気が差した。

「R…俺がお前を選んだのは、間違いだったかもな…もう良い、俺はエボ？に乗ってやる！！今日でおさらばだ！！！」

ファルコンはその後、G T—Rには全く目を向けず、黄色のエボ？に乗り込んだ。もはやG T—Rはその時は眼中になかった。

「へへ！！やっぱ最初からエボを選んでりゃ良かったんだ！G T—Rなんざ……」

ファルコンは秋名にて、ハチロク…こなたのハチロクとバトルしていた。もちろんエボ？の勝利で終わるが、そこには勝ち誇ったような表情はなかった。不審に思ったこなたが一声かける。

「ん？どったの？勝ったのに嬉しくないの？」

「あ、いや…ちょっといろいろあってだな…」

「…G T—Rの事だよね？」

「ああ……」

ファルコンは少し暗い表情で話す。やはりG T—Rの事が頭から離れないのか…。ファルコンはもともと、G T—Rが大好きな走り屋であった。人より数倍以上、G T—Rへの愛情があった。それが故、G T—Rの事が頭から離れないのだ。こなたは少し優しく声をかける。

「…今日、GT-Rに謝るつもりで湾岸線で走って見たら？許してくれると思うよ？」

「こなた…そうだな、事故る可能性大きいがな……」

「…GT-Rがホントにキミの事想ってるなら、もしそうなったとしても守ってくれるはずだよ。自分を犠牲にしても…」

「…そうだな。悪い、何か嫌な雰囲気になせちまったな」

ファルコンは少し申し訳なさそうな表情で話す。そして、こなたと別れを告げファルコンは自宅に戻った後GT-Rのキーを取ってGT-Rの前に立つ。

「俺のR…ひ、久しぶりに、走ろうぜ…お前を裏切った俺を許してくれる訳ないだろうけど……」

GT-Rのボンネットに申し訳なさそうにファルコンは触れ、そして静かに乗り込む…。それからいつも通り、湾岸線へと乗り込んだ。

「やっぱり…お前が一番だよ…俺が信じるクルマってのは…お前しか居ない……」

ファルコンは久々に実感するRの感覚に、懐かしさを感じながら走る。…が、予言した通り事故の兆候が見え始める…。ラインがアンダー気味になり、そして壁に軽くぶつかる。もちろんファルコンはこの事は予想が付いていた。

「GT-R…すまなかった…お前を裏切った俺が悪かったよ…俺、お前の為に死ぬよ…R、本当にすまなかったな……」

そしてそれから勢いよく壁に当たりまくり、やがてフロントガラスさえもヒビが入り始めた。

ファルコンはハンドルから手を離し、アクセルを踏み続けて目を固く閉じた。凄い音が聞こえ、やがてその音は聞こえなくなった…。

…しばらくして、ファルコンは体の痛みを感じない事に疑問を抱き、恐る恐る目を開けてみる。すると、フロントガラスはほぼ完全に割れているものの、自分の体は全く無傷であった。降りてみると、そこには無残な形となったGT-Rが…ファルコンを全力で守った証である。

「あ…ああ…GT-R…お前…こんな俺を………」

ファルコンはその場でひざまずき、涙目になる。周りは渋滞し始める。そこに、偶然通りかかったこなたのハチロクが…。こなたはその様子を見てすぐに降りる。

「ファルコン君！？大丈夫?!」

「こなた…俺は何ともない…だけど、俺のRが………」

ファルコンは暗い表情を見せながら、こなたに話す…。するとこなたは、笑顔を見せながら言いかける。

「…言った通りだね。GT-Rはキミを守ってくれたんだよ」

「こなた…そうかも…しれないな……R…何とかして修理しないと

…」

「…大丈夫だよ、そのGT-Rはキミを信じているなら絶対復活するよ」

こなたは絶えず笑顔で話す。その笑顔にファルコンも少し元氣をもらい、GT-Rに近づく…。

「こなた…そうだよな…Rは、絶対復活する……！」

ファルコンはそう言って涙を止めた。だが、こなたの様子が少しおかしい。不審に思ったファルコンはこなたに聞いた。

「こなた…？ いったいお前何を考えてるんだ…？」

「…いやあ、その場の雰囲気で言った事がホントに当たるなんてねえ、でも面白かったよ」

「な…お前の本音じゃなかったんかい！！」

ファルコンはこなたに呆れながらもツツクむ。そのツツコミにこなたも少しなからず笑った。そうして、その後板金屋に持っていきGT-Rは見事復活し、そして今に至る。

昔の事を思い出していたファルコンは、懐かしく思いながらも走り続けていた。

「そういや、そんな事もあったな…あの時は本当にすまなかったな、R…だが、もう俺とお前の絆は壊れない…さあ、行くぜ!!」

ファルコンはアクセルを踏み、ものすごい加速を生み出し、一気に距離を詰める。その走りにユウは驚く。

「な…なにっ!? 嘘だろ!!!? どうしてもありえないだろ!!!」

ユウはその走りに焦りを感じ、急にラインが酷く乱れる。だがファルコンは構わず攻める。

「さあ!! 俺とRの絆の強さをを見せてやる!!!!」

ファルコンはG T-Rをスープラの横に動かし、一気に抜き去る。その時、ユウの目にはG T-Rのエンブレムが強く目に残った。

「…やっぱり、お前には勝てないな…結局今回も俺の負けだな…流石は伝説のRだ…」

ユウはアクセルから足を離し、減速していった…。

しばらくして、二人はC 1エリアから降り、近くのスタンドへと向かう。もちろんハイオクを入れるのだろう。

「ふう……ユウ、正直お前には驚いたぜ」

ユウのスープラの走り、ファルコンを驚かせるほどの走りだった。驚くくらいに進化していた。以前走った時は付いていくのがやっとだったのに……白い閃光^{フォースーブラ}は、ここまで進化出来るものなのか……。ファルコンはつくづく思った。走り屋の世界は本当に面白いと……何があるか分からない、自分よりも強い強者が現れるのではないかと……。

ファルコンの思った事を見抜いたかのように、ユウは話す。

「…安心しろ、お前を越せる奴は居ない」

そのユウの言いかけに、ファルコンは頷く。もちろんだ……自分を越せる奴は居ない……居るとしたら……そいつは……。ファルコンは顔を上げ、軽く笑ってユウに話す。

「…そうだな、もし越せる奴が居るとしても、そいつは今俺の目の前に居る……」

「…ああ！お前を越すのは、この俺だ！！」

ファルコンとユウは走り出す時よりも強く、拳を握り合った。ファルコンとユウは、良き好敵手^{ライバル}であり、良き走り屋仲間の一人であると言えるだろう。

そして、二人は車の燃料をハイオクで補給し、それぞれ帰っていった。

一方、こなた達は……。

「…どうやら、勝ったみたいだね」

何の事だろうか？…いや、言わなくとも分かるであろう。伝説のRと白い閃光とのバトルの事だ。こなたはその場で見た訳ではないので分からないが…だが、大まかそんな予想はこなたでも付く。

「ハチロク…私達も、強くならなくちゃね…」

こなたはハチロクのボンネットに優しく触れる。その時、ハチロクには白い翼が、そしてこなたからは青いオーラが出ているようだった…間違いない、ハチロクとこなたは近いうちに覚醒する…ひよっとすれば、紅い悪魔をも超越する事も可能かもしれない…しかし、それにはまだまだ時間がかかる。

今しばらく、遠征という形で技術を習得し、そしてやがて紅い悪魔に挑戦する…それこそが、勝利に繋がる。

こなたは携帯を取り出し、かがみに電話をかける。

「かがみ？ 今度の遠征の相手って誰？」

『え？ あ、えっとね…今度は神奈川エリアに所属する、レッドブルっていうチームと戦う事になるわ。今度走るところが長尾峠だからね。それにしても…あんたが聞いてくるなんて珍しいわね。どうかしたの？』

かがみは疑問に思いながらこなたに聞く。一応言うと、こなたは高校生の時と比べ少しは成長している。それに、走る事で更に彼女の気持ちを成長させる。ハチロクと共に強くなりたい…自分の信じたクルマと共に全国の走り屋に勝ちたい…その思いが、こなたを走り屋として強くさせている。

かがみに聞かれたこなたは、少し経った後静かに答える。

「かがみ…かがみは何が目的で走り屋やってる？」

『へ…？何が目的って…それはね……多分、あんたと同じだわ』

「そっか…うん、その通りだよ。自分の信じたクルマで、一番強い走り屋になる…それが目的なんだ。私からそんな言葉が出るなんて変だとは思ってるだろうけど…」

こなたは少し照れくさそうに言った。だがかがみは、こなたのその意見を否定はしなかった。こなたは少しずつ成長してきているという事はかがみも既に承知していた。かがみもそれ以上に成長している。

しかし、こなたの秘められた力にはかがみも敵わない。実はこなたは、第二の秋名のハチロクである。第一の秋名のハチロク…藤原拓海は、今のこなたと同じように秘められた力を持っていた。

拓海のドラテクは、想像以上に凄い。幾多の相手をハチロクことAE86トレノで破ってきた。こなたもそれは同じである。こなたのドラテクは、まるで拓海から受け継いだような…。

かがみは、優しく言いかける。

『…こなた、次の遠征も、これからのバトルも…負ける訳にはいかないわよ！気を引き締めて行きましょ！！』

「かがみ…うん!!」

こなたは電話を切った。そして、星が点々と輝く夜空を見る。まだ見ぬ走り屋達とのバトルを楽しみに思いながら…。

こうして、伝説のRことファルコンと70スープラを駆るユウとのバトルは、ファルコンの勝利に終わった。そしてこなた達は次の遠征に向け士気を高めていた。次の遠征の相手は、神奈川県を本拠地とする走り屋チーム、レッドブルというチームなのだが果たしてこなた達は勝ち抜く事は出来るのか…？

ACT. 17 チームレッドブル（前書き）

ようやく更新出来ました（^―^；）

今回は長尾峠にてバトルが行われましたがつかさは一度追い抜かれるものの、最後に見事逆転しました。次回はこなたV・Sエボ？の男…どのようなバトルを展開するか、楽しみにしておいて下さいね
（^ー^）／

ACT. 17 チームレッドブル

C1外回りでのバトルが終わって数日：こなたは一人で神奈川まで行き、長尾峠を走りこんでいる。ただ黙って、前だけを見つめて：。実のところこなたは、走り屋でありながらも長尾峠を走った事がないらしい。

「：やっぱり、初めて走るとこは違うなあ：」

こなたは感覚を体に染み込ませながら、ひたすら走りこんだ。そして、走りこむ事1時間：こなたは休憩のため一旦降りた。そして近くにある自動販売機で飲み物を買う事に。

「ふう〜、やっぱりたまには休憩も必要だね〜♪」

こなたは近くのベンチに座り買った飲み物を飲んで一息つく。時間帯は昼だ。

そして、しばしの休憩を取ったこなたは満足し、ハチロクに乗り込もうとしたが二人の男が近づいてくる。

「ん？キミ達だれ？」

「：お前が、あの秋名のハチロクか？」

「そうだけど？何？」

こなたはその二人の男を見つめる。まるでこなたはその二人の男からの勝負を待ち望んでいるかのようなのだ。

「俺達さあ…ここ神奈川に所属する走り屋チーム、レッドブルっていうチームなんだけどさあ…お前秋名ラッキースターのハチロクだろ？」

「そうだよ♪今から一本一緒に走ってみる？」

「オッケー！バトル前の調整がてら俺らに付き合ってもらおうか」

こなたとその二人の男は、共に走る事になった。因みにその二人の男の車種は、一人が白いエボ？、もう一人が赤のエボ？だ。その三台は長尾峠の下りを走る事に。

「エボ？にエボ？かあ…まあ気楽に走ろーっと」

「さて…秋名のハチロクの走りを見ながら走るか。相手の情報を盗んでおきたいところだしな」

こなたと二人の男は長尾下りを走る。今度の遠征場所は長尾峠が在る、神奈川エリアだ。

こなたは長尾は初めて走ると言っていたが、もう殆どコースの特徴を覚えてしまい、十分戦っているような状態になった。だが相手は地元であるためか、かなり手強い様子。果たしてこなた達秋名ラッキースターはレッドブル相手に勝てるのか？

…勝利の行方は分からないが、今のこの走っている時は勝ち負けに拘らずコースの攻略に集中しよう、とこなたは言い聞かせひたすら走り込む。この走りはあくまで『調整』のための走りだ。バトルは夜、かがみ達や相手のチームリーダーが集合した時が初めてバトルする時となる。

「しかし、流石は秋名のハチロクって言ったところか？コースの攻

略法を立てるのが早いな」

確かに。こなたはもう殆ど長尾のコースを覚えてしまっている。そして早くもコースの攻略法を立て、自分で考え組み立てたラインで走行している。これは、もしかしたら父親譲りの走りなのかも知れない。こなたの父親のそうじろうも、昔からそういう走り方をしている。

コースをパッと覚え、そして素早く理想のラインを組み立て……そうじろうはこなた以上に強大な存在かも知れない。あの青いインプレッサを越すには相当な時間や技術が必要とする。

だが、それこそが走り屋の世界の楽しむ要素だ。相手が強ければ強いほどこちらも強くなろう、という意識が高まってくる。

その思いが強く現れた時、こなたやハチロクから走り屋としての強いオーラのようなものが漂い、一本一本の走りがより一層濃いものとなる。

「…うん、行けるね。多分大丈夫だよね」

こなたは自分の走りに自信を持つようになった。見事なラインで的確に走っていく。その姿を後ろから見つめるエボ？とエボ？。追いつくのもやっつとようだ。

そして、しばらくすると、もう走りは終わっていた。あつという間の走りだった。

「…秋名のハチロク！なかなか良い走りだな！」

「そう？まああれは本気じゃないんだけどね」

「おいおい…あれで本気じゃないのかよ…どんだけ凄いんだお前は……」

エボ？の男はため息をつきながら呟く。こなたは少し苦笑した。そしてそこに、鋼のエボ？がやってくる。…ん？待てよ、鋼のエボ？と言うと…：恐らくあの二人だ。

「あ、リーダーのエボ？だな」

「ん？あの車のドライバーがキミ達のリーダーなんだ？」

「ああそうだぜ。俺らのリーダー、驚く事に一応女だ」

こなたとエボ？、エボ？の男が話している間にそのドライバーは降りてきた。その途端、こなたはふっと思い出したようにそのドライバーを見る。

「おーっす…てえ、チビッ子じゃなかよー。何でここに居るんだー？」

「あ…みさきち、久しぶりだね！みさきちとあやのさんエボ？に乗ってるなんて意外だよー♪」

「泉ちゃん、久しぶりね。私は普通の車が良かったんだけど、みさちゃんがどうしてもこの車が良いって言ってね…」

エボ？のドライバーは…そう、高校の時の同級生、日下部みさおと峰岸あやのだった。まさかとは思っていたらしいが…。

「あやの、どうしてもとは言っていないってヴぁ！」

…やはり出ましたみさきちの『ヴぁ』が、とこなたは思った。みさ

お達のエボは、足まわりや馬力もそこそこある。そこに更にチューニングを重ね、かなり良いマシンに仕上がっている。あの青いインプを抜くためにだろう。だがそうじろうのインプは足、馬力ともにみさお達のエボよりも上だ。

ついでに言うそうじろうのインプはGDBF型インプレッサだ。昔はGC8型インプレッサに乗っていたようだが…。

「…で、今回バトルする相手がみさきち達のチームなんだね？」

「まーそーなってるみたいだなー。ただ、チビツ子相手でも容赦しねっぞー」

「もちろんだよ。こっちも容赦なしで行くからね」

こなたはみさお達と雑談を交わしながら夜まで過ごした。

そして、然るべき夜の時：エボのみを駆るチーム「レッドブル」と、かがみが率いるチーム「秋名ラッキースター」との対面の時が来た。だがかがみはため息をつく。まさか相手があのみさお達だとは思ってなかったのだろう。

「はあ…誰かと思ったらあんた達だったのね」

「柊〜！会いたかったぜ〜！！」

「ええい！近づくな！！」

「あやの〜…柊が冷たいぜ〜…」

「まあまあ、みさちゃん…」

あやのは泣いてくるみさおを慰めた。…とまあ、こんな感じでかがみとみさお達のやり取りが見て取れる。かがみは「全く…高校生の時と殆ど変わってないな」と思いつつも久々の再会を心の奥では喜んでいた。

だが、こなたは自分の車…ハチロクを見ながらかがみに一言。またこなたらしくない、やけに真面目な雰囲気だが…。

「かがみ…今回ばかりはちょっと危ないかな…」

「こなた…なんでまたあんたはそんなに重く考えてんのよ？」

かがみはこなたに聞いた。しかしこなたは答えない。何故そこまでこなたが焦ったように、危ないと思えるのかと言うと…こなたは実はあの時、エボを振り切るのがやっとであった。こなたは調整の段階であるの走りをしていては、きっと本番のバトルでは危ない、と考えるようになった。

エボはラリーベースのマシンであるために最高速は伸びにくい。しかし、その巨体を活かした走りが可能だ。

ハイパワー・4WDターボ…それが、エボの最大の武器。ターボによる大きなパワーを得て、一気に抜き去る…それがハチロクでは難しい。

ハチロクことAE86は、非力なFR車と考えられている。FT86のように現代風に蘇っても所詮はハチロク、と言われるであろう。だが、バトルは最後まで何が起こるか分からない。それに、こなたのハチロクは父親のそうじろうの友人…最強のチューナーと称される高山信彦の手によって、チューニングが施されている。高山チューンのハチロクは、どんな走りを見せるか分からない。そう…北見チューンの悪魔のZこと、S30型Zのように…。

足まわりは高山チューン仕様のホイール、サスペンションを装着、どんな場所でもがっちりとした走りをする。FR車にとっては珍しいだろうか。

また、スーパーチャージャーでは無くターボを取り付け、280馬力から400馬力に上げ、さらにマフラーは排気効率が良いマフラーを装着、これにより400馬力から425馬力にアップ、さらに電装系パーツをより質のよい物に変更し微量ながら馬力が435馬力にアップしている。

しかし435馬力ではエボ？には勝てない。200馬力も差がある。ストリート公道のモンスターを仕留めるには、最低500馬力は必要であろう。だが、馬力が全てではない。ドライバーの腕も試される。馬力が上がるという事は、それだけ荒ぶりやしくなると言っても過言じゃないだろう。その荒ぶるモンスターをいかに上手く操るかが、バトルの勝敗の決め手である。

「…なんちゃってね、大丈夫だよ」

こなたはいつもの様子でかがみに笑顔を見せた。かがみも安心したかのように、少し笑みを浮かべながら一言。

「こなた…まあ、あんたの場合かなり離されるかもね。そんな調子じゃあね」

「むう…かがみはいつも意地悪だね。私だって離されないでちゃんと走れるよ」

「そう…なら…期待してるわよ、こなた。しっかり、頼むわね」

「かがみ…オツケ〜！任せたまへ〜！」

こなたは自信を取り戻したのか、いつもの雰囲気に戻った。

そして、第一戦目：エボ？の相手は白いFD：つかさが担当する事になった。バトルの形式はまず最初に上りからバトルする事に。そして第二戦目は、こなたが担当する事になっているダウンヒルバトル。そして最後は上りと下りの複合：つまり上り一本、下り一本を同時に走る事になっている。なお、今回バトルに参加するメンバーは白いFDのつかさ、R35に乗るかがみ、そしてFT86に乗るこなたの三人だ。拓也はある理由により参加しないと言う…。

さて、チームとしてどうかとは思うが、そんな訳でバトルが始まる。

「つかさ、いつものように走りなさい。あんたのFDなら行けるから」

「分かったよ、お姉ちゃん」

つかさはFDのハンドルを握りながら答えた。どうやらつかさはいつになくやる気ようだ。…そういえば高校の体育祭の時、つかさはハードル走に出た。その時もやけにやる気が出ていた。だがその時はハードルを倒してばかりで空回りであったが…。

だが今回は何か違う気がする。つかさのFDはまるで「早く走らせろ！」と言わんばかりにエンジン音を立てる。ロータリーエンジンの独特な音が響き渡り、そして長尾ヒルクライムバトルスタート地点にて、スタート前のカウントが始まった。エボ？の男がカウントを取る。

「それじゃあスタート5秒前！

4、3、2、1……」

「さて…相手がFDでも容赦は無しだぜ」

「じゃあ：行こう、私のFD：」

二人はそれぞれ独り言を呟きながら、サイドブレーキを引き、ギアを1速に入れる。そして間もなくバトルは始まる。エボ？の男の「スタート！！」の合図と共に二台は勢いよく走り出し、長尾ヒルクライムバトルが始まった。タイヤの滑るような音はやはりする。

つかさのFDの馬力は530馬力、エボ？の馬力は540馬力、ちょうど10馬力違うだけだ。だがつかさのFDには、双子の姉でありチームのリーダー、さらにかつて湾岸の女王と言われていたかがみ直伝の「バトルに勝つためのチューニング」が施されている。足まわりは首都高、峠両方のバトルにおいて適切なサスペンションを装着、ブレーキパッドも少ない時間でかなり効く物を装着した。エンジン関係では、ターボを取り付け280馬力から一気に470馬力へとアップ、そしてコンピューターを取り替えさらにエンジンのポテンシャルを上げ495馬力、そしてマフラーはセミレーシング式のマフラーを装着する事により530馬力に到達、フロントスポイラーを付け運動性能を上げた。

また、啓介のFDはリアにGTウイングを付けているのに対し、つかさのFDはGTウイングは取り付けしていない。あまり派手な物は取り付けないようにしているとか。つかさらしいかも知れないが。

「FDのドライバー：確か柊つかさだとか言ったな。一見気弱で優しそうに見えるが、バトルではどんな走りを見せるのか：後ろでじっくり見させてもらおう」

エボ？の男は道をつかさに譲り、後ろでつかさの走りを見る事にした。つかさは前に出て、いつも以上に自信を持ちながら走る。つかさのFDは後期型：RX-7TypeRS、RX-7の後期型にあたる。なお、5速マニュアルを搭載している。

FDは加速性に優れていたり、つかさの乗っている後期型では曲が

りやすいものの燃費が悪いためガソリン代が高く付く。一方パティが乗っているRX-8はFDと同じロータリーエンジン搭載車であるが、FDと比べて燃費が良いとか。ロータリー信者にとっては嬉しい限りだろう。

つかさは相手に張り付かれているにも関わらず、冷静に走ってゆく。FD3Sとの相性はピッタリのようなのだ。それもそのはず、つかさが免許を取ったその日から、この白いFDと走ってきているのだ。何でも、クルマに呼ばれた気がするのだとか。

「…結構難しいけど…大丈夫だね、私のFD…」

つかさはギアを4速に変えながらまるでFDに話しかけるように走る。実のところつかさもあまり長尾峠を走った事が無いらしく、やや難しく感じている。対して相手は地元走り屋、何とか逃げ切れば良いが…。

一方でエボ？の男は、つかさの走りを見ながら走り続ける。

「ふむ…まあここはあまり走った事無いから仕方ないかも知れんが…そろそろ抜きに行くか？」

エボ？の男は抜きに行くかどうか迷っているようだ。もう少し面倒を見てやる、と言いたげな表情をしている。

だが今は第一セクションを走っているが、次の第二セクションでエボ？の男は抜きに行く事を決めたみたいだ。もう間もなく第一セクションが終了する。

「さてと…悪いが抜かせてもらうぞ、白いFDのドライバー…終つかさ！！」

エボ？の男は第二セクションに突入すると同時にギアを5速に変え、一気に抜き去る。流石は峠の王キングと言ったところだろうか、スピードの出が違う。つかさのFDは一気に離された…。

「…そうだね…焦ったらダメなんだよね…うん、教えてくれてありがとう、私のFD…それじゃあ、しっかり走るね♪」

つかさは離されていたが焦ってはいなかった。どうやらまたFDの声が聞こえたようだ。『焦るな、自分の走りを信じるんだ』と…同じような事をかみも言っていた。『峠でも首都高でも、焦りは禁物よ。自分の走りを信じなさい』という風に…。

つかさはその通りにした。特に峠でのバトルは、小さなミスも命取りになりかねない。それは焦りから現れるものだ。

「あう…でも見えなくなっちゃったよ…」

つかさは不安そうな表情を一瞬したがすぐに元通りになる。まだ抜くチャンスはいくらでもあるのだから…。

一方エボ？の男は安心しきっていた。バックミラーから見る限りもうFDの姿は見えないからだ。

「ふう…FDのドライバー、お前の腕は悪くなかった。だがもう少し技術を磨いてから出直してこい。いつでもバトルしてやるからな」

…もともと相手側から挑戦状を叩きつけてきたのだが、エボ？の男はいつでもバトルを受け付けると言った感じの口調で呟く。やはり地元の走り屋は強いと言ったところだろう…。

…しかし、つかさは徐々にエボ？との距離を詰めていく。その差は約50mくらいだろうか？

「なんと：離されたのにもう付いてきてやがる：へっ、流石はFDだな！きちんと付いてきてもらわないとバトルにならねえぜ！」

エボ？の男は何故か嬉しそうなしながら集中する。やるならきちんとしたバトルがしたい：そう思っているのだ。

一方のつかさは、減速・加速を繰り返しながらエボに付いていく。ちょうど第二セクションも終わり、今は第三セクション中盤と言ったところだ。

「さて、次の第四セクションでバトルがどう変わるか：楽しみだな」

エボ？の男は呟く。長尾は全長がさほど長くは無い、標準の長さの峠だ。難易度は難しく、ある程度経験を得た走り屋で無ければここを走るのは少々危険である。

：それにも関わらず、つかさは意図も簡単にコーナーを次々とクリアしていく。姉譲りのドラテクと言った感じだろう。

「：お姉ちゃんならここをどんな風に攻めるのかな」

つかさは双子の姉かがみの走りを考えた。かがみは湾岸の女王であったが、首都高のみならず峠もいくつか制覇した事がある。無論、黒のR34でだ。

なお、この日かがみはR35を峠用にチューニングしてきたと言う。

「まあ、お姉ちゃんはお姉ちゃん、私は私だね」

つかさはそう言って再び走りに集中する。早くも第三セクションも終わりに近づく。両者の距離は一定に保たれている。

「俺のエボと奴のFDは一定に保たれている…このまま行けば俺の勝利だ…！」

エボ？の男はそう呟きながら、5速から4速にシフトダウンしコーナーを駆け抜ける。つかさも同じようにコーナーを抜けるが、つかさはギアを3速に入れていた。

…実はここが勝負である。この第三セクションの終わり辺りのコーナーでギアを何速に入れるか、どのくらいの速度でコーナーに突っ込むかがこのバトルの勝敗を左右するのだ。

つかさはまた一度離されるが、シフトアップするとFDのマフラーから火が吹いた。そして速度が上がっていく。

「…うん、行ける…行けるよ、私のFD！」

つかさは自信を持ちながら、エボ？を見て走り続ける。現在は第四セクションだ。つかさのFDとエボ？の男との距離は少しずつ縮まってくる。その差はわずか10mほど…ちょうどFDがエボ？にピッタリ張り付いているところだ。

「FDのドライバー…仕掛けてくるな…こっちも本気で行かせてもらうぞ…！」

エボ？の男はアクセルを強く踏み、加速させる。だがつかさも同じようにアクセルを踏んで加速させていく。そしてコーナーも同じように駆け抜ける。第四セクションが終盤に近づくにつれ、徐々に二人の走りに差が始める。

「ちっ…タイヤが終わり始めてやがる…！」

エボ？の男は必死にハンドルを握りながらクルマをコントロールする。一方つかさはまだFDのタイヤが保ってくれているため、自分のラインを描きながら走っている。

「…それじゃあ行こうか、私のFD…！」

つかさはFDをアウト側に移動させる。アウト側から抜くつもりだ。エボ？の男はそれを確認し、抜かせまいと移動させる。

「アウト側から抜かせるか…！」

エボ？の男がつかさのFDと同じようにアウト側に移動させたその時、突如つかさのFDのライトの光がアウト側から消えた。つかさはハンドルを急に切って隙が空いたイン側にFDを移動させた。

「何！？インからか…！！？」

エボ？の男は慌ててイン側に戻そうとするが、やはりタイヤへのダメージがあるせいかなかなか戻らない。テールが流れ、スピンしそうになるが何とか体勢を立て直す。しかし、その時にはもうつかさのFDが半分以上前に出ている。第四セクション最後の長くて緩いカーブをエボ？、FDの二台が駆け抜ける。

この長くて緩いカーブは緩そうに見えるが実は速度が上がるにつれて急になっていく。というよりは、人間的な錯覚で急なカーブに感じられるようだ。

だがそのコーナーを抜けた後にはいよいよ勝敗を分けるゴールが待っている。そこにはこなたやかかみ、エボ？の男にみさおやあやのまで居る。その誰もが二人のゴールを待ちわびている。

「行つくよー！私のFD！！」

つかさは最後の最後にあるストレートに差し掛かろうとした時に強くアクセルを踏んだ。そして遂にエボ？の男の前に出た。この先に抜けるポイントはもう無い。実質つかさの勝利である。

「ふっ…やられたぜ…俺の負けだな…」

エボ？の男はアクセルペダルから足を離した。

そして、二人はクルマから降りる。つかさにはこなた、かがみが、エボ？の男にはエボ？の男、あやのにみさおが近づく。

「つかさ！見事だったわ！！あんたはよくやってくれた！！」

「えへへ…ありがとうね、お姉ちゃん」

「つかさも知らない間に随分速くなったもんだねえ。つかさには負けるかも」

「こなちゃん…こなちゃんの方が速いよ」

つかさは少々困ったような表情で話す。こなたも少し苦笑した後、『大丈夫、私も負けないから…』とつかさの耳元で話す。そのこなたの声につかさは頷いたのであった。

一方、エボ？の男は…。

「はは…やられちゃったぜ…」

「お前…しかしよくやった方だと思うぞ。なあ？リーダー」

「まあそつだなー。あとは私らに任せとけよ。怒ると怖いあやのも居るし」

みさおはあやのに余計な一言を加えた。するとあやのはみさおの背後に現れる。

「…みさちゃん、何か言った？」

「ヴぁ?! いや、何でもねえよ…あやの……」

「そう…それなら良いんだけどね」

あやのは笑いながら答える。その笑顔の裏にはきつと恐ろしい何かがあるのだろうが…。みさおは苦笑し続けながらも次のバトルの準備にかかる。次はエボ？の男とFT86のこなたのバトルだ。コースは長尾下りである。

「こなた…あんたなら行けるわよ。だから少しは走りに集中しなさいね」

「分かったよ。まあかがみんな私の後のバトルで事故らないようにね」

「ちょっと待て、私はそんなに下手じゃないわ!…でも、分かった

わ」

かがみはこなたの言いかけに答えた。

こうして遠征二回目、長尾峠の一戦目で勝利を得たこなた達。次の下り勝負…ダウンヒルバトルではどんなはしりを見せるのか…こなたは自分の愛車のボンネットに軽く触れながら次のバトルの事を考えるのであった…。

番外編 今まで登場した走り屋とクルマ達（前書き）

さて、今回は息抜きついでに番外編を書いてみました。
作中では殆どあり得ない設定でしたがどうかお許しください。

番外編 今まで登場した走り屋とクルマ達

※この回はストーリーに関係無い回です。そしてバトルの途中ですがご了承ください。

さて、ここまで読んでいただいた読者の皆様に感謝の言葉を申し上げたい。「レース物の小説が書きたい」という思いだけで書き始めたこの小説を読んでいただき、誠にありがとうございます。

さて、今回はストーリーとは関係無い、今までに登場した走り屋とクルマ達を紹介していこう。

泉 こなた

搭乗車両

(前) AE86 TRUENO / (現) FT86

本作の主人公。地元で秋名山がある場所に住んでいる、ごく普通の少女であった。しかし父そうじろうによって、中学3年生の時辺りに周りには内緒で秋名を走らされていた。

そして高校生に上がり、免許を取ると友人達にそれを教え、更に秋名を走り込む様になった。

それから大学に上がり、こなたのドラテクは驚異的なものとなっていた。そして各地の峠で様々な走り屋とバトルを重ね、地元のチームをかがみとともに結成するが、関西ブルーバースとのバトルの際にハチロクがエンジンブローを起こし制御不能、奇跡的にこなたは助かるがハチロクはまるでこなたを守るかのように無残な形となってしまう。

それから、そうじろうの友人によって新しいクルマ：現代風に蘇ったハチロクと呼ばれるFT-86に乗り、そして遠征再開して連勝を重ね今に至る。

柊 かがみ

搭乗車両

(前) SKYLINE GT-R Vspec? Nul (R34)
／(現) NISSAN GT-R Vspec (R35)

本作の主人公の一人。こなたとは高校生の頃からの親友である。かがみは走り屋として名高い実績を残していた。当時湾岸線で最速だったブラックバードこと「島 達也」を打ち破り、見事湾岸の女王として降り立つ。各地の首都高・峠で連勝を重ねていたが、突如湾岸線に現れた紅い悪魔こと小早川ゆいの赤いランエボ?に圧倒的な大差を付けられ敗北、湾岸の女王の称号を奪われてしまう。

彼女は秋名ラッキースターのチームリーダーであり、同時に上りと下り一本ずつのバトルが必要な時の場合にバトルに参加し、その他ではチームの中でダウンヒル専門のこなたにバトル前にアドバイスをしたりする。

彼女は比較的大きなパワーを持つクルマに乗っているが、それは彼女の「バトルに絶対に勝つ」というこだわりからそのようなクルマに乗っているのかも知れない。

柊 つかさ

搭乗車両

RX-7 Type S (FD3S)

かがみとは双子の妹で、少し天然な部分がある優しい心を持つ少女。彼女も走り屋であるが当初はごく普通の、例えるならばトヨタのヴィッツなどのコンパクトカーに乗る予定であったがかがみの激しい推奨により走り屋の中でも人気が高いFDに乗る事になった。最初はその挙動に慣れず少し危うい走りをしていたが、かがみのアドバイスによって徐々にそのドラテクは進化していった。

なお、つかさもこなたやかがみと同じ秋名ラッキースターの一員でありバトルでは上りのバトル：ヒルクライムを専門とする。だが下りも走る事が出来るらしい。

余談ではあるがつかさのFDは前期型FDのRX-7 Type Rの後期型であり、Type RがFD3S?型と表記されるのに対しつかさのFDはFD3S?型と表記される。

高良みゆき

搭乗車両

NSX-R (NA1)

こなた、かがみ、つかさとは高校の時から親友である、博学で美人な少女。みゆきはこなた達とは卒業後に離れ、関西の医学系大学に入学したとか。

搭乗車両として駆動形式がミッドシップであるNSX-Rに乗っている。みゆきとこのNSXの相性は良いらしく、こなた達が所属する秋名ラッキースターの初遠征でもその猛威を振るっていた。だがミッドシップの挙動に足を取られ敗北してしまう。

みゆきの走りのスタイルは、速さだけを追求するのでは無くラインも徹底的に追求する。そしてテクニクを多用し相手を抜こうとするそのスタイルは、まるで勝利を狙うハヤブサのようである。

沢村 拓也

搭乗車両

A E 8 6 L E V I N

ハチロクレビンに乗る秋名の上りを得意とする青年。こなたと同じ大学に進学していたが、こなたとは秋名のヒルクライムバトルの際に初めて会う。

こなたのハチロクと共通の型式を持つレビンに乗る事から、バトル後のこなたとは良好な関係を持つ。その関係は恋人となるまでに発展した。

拓也はその後こなたが結成した走り屋チーム「秋名ラッキースター」の一員となり、つかさが出れない際のヒルクライマーとして活躍する事になった。

富永 巧

搭乗車両

A E 8 5 L E V I N

ハチゴーレビンに乗る、明るくてハチゴーをこよなく愛する青年。こなたとは妙義のダウンヒルバトルで出会う。

ハチゴーに乗るこの青年は、こなたに負けてからはやや負け続けの状態だが、それでもハチゴー以外に乗る気は無いらしい。なお、巧もこなたが結成した「秋名ラッキースター」の一員である。

藤原 裕介

搭乗車両

SKYLINE COUPE 350GT (CV35)

巧、拓也の先輩に当たる、こなたと同じ自動車大学の生徒。搭乗車両には、大学生にしてはやや大人っぽいクルマに乗っている。実のところこの男は、かなりの女好きであったりもして、後輩の巧からはその性格の事を指摘される場面もある。

走りの実力は、巧ほどでは無いがやや負ける傾向にある。だが勝利する回数も少なくないため、油断できない相手ではある。

なおこの男も一応こなたが結成した「秋名ラッキースター」の一員となっている。雑用だそうだが…。

神坂 竜哉

搭乗車両

SKYLINE GT-R Vspec (R32)

赤坂を地元とする走り屋。作中にはGT-R以外に型式の表記は無かったが、R32型GT-Rに乗っている。彼は冷静な性格で、且つアグレッシブな走りを見せる。まさにGT-Rに見合う男だ。

だが、同じGT-R乗りのかがみに負け、ハチロク乗りのこなたに負けるという不運に遭う。その後各地の峠で走り込み、戦闘力を増しているだとか。

パトリシアⅡマーティン

搭乗車両

RX-8 Type S (SE3P)

こなた、かがみ、つかさ、みゆきの後輩に当たる、陵桜学園3年生の女子高生。名前から分かる通り外国人で陵桜学園には留学という形で転校してきた。こなたとは夜の秋名のダウンヒルバトルで一度バトルをしており、その時はこなたを抜き去っていった。その後あるスタンドにて再会し、喜びをこなたと分かち合う。

パトリシアⅡマーティンはパティとも呼ばれていて、彼女の乗っているRX-8は黄色である。

小早川 ゆい

搭乗車両

ランサーエボリューション? MR

こなたとは従姉妹関係に当たる、恐らく走り屋界最強の走り屋。そして最強の走り屋チーム「湾岸ミッドナイト」のリーダー。その走りは当時湾岸の女王とされていたかがみのR34を圧倒的な速さで離れた。

ゆいの乗るランエボには、通常ではあり得ないMR駆動の動きもある。MRというのはミッドシップの事で、エンジンがリアに置かれているクルマの事を言う。だがゆいのランエボは通常通りフロントにエンジンが置かれているにも関わらず、エンジンがリアにあるMRの動きが完成しているのだ。これは究極なるチューニングによっ

て出来たものと思われる。

また彼女はハンドルを握ると性格が変化し、暴走じみた走りを見せながらも絶対に相手を追い抜こうとする。

泉 そうじろう

搭乗車両

インプレッサW R X S T I (G D B F)

こなたの父親にして、ゆいが結成した最強の走り屋チーム「湾岸ミッドナイト」のナンバー2のドライバー。700馬力クラスのインプレッサを駆り、湾岸線でもゆいと並ぶ程の実力を持つ。その速さはこなたにも遺伝し、親子ともに速い。

また、小説家でもあり、新たに仕事が見つかり今は小説家は副業としてやっているとか。とにかく、サーキットでも最強と思われるインプレッサを駆る彼の姿は凄腕の走り屋そのものである。

小崎孝介

搭乗車両

セリカG T - F O U R (S T 2 0 5)

こなたの父親のそうじろうとよく競り合った良き走り屋。現在はや年を取っていて、昔のようには走れないような腕になってしまったがそれでもまだまだ走っていきけるらしい。

なお彼は、パティがバイトしているスタンドの店長でもあるそうだ。

黒井ななこ

搭乗車両

(前) SUPRA RZ (JZA80) / (現) FAIRLADY Z (S30)

こなた達が高校生の時の担任、そしてエセ関西人。過去には80スープラことJZA80型スープラに乗っていたが、朝倉アキオらから受け継いだ悪魔のZ：正式名S30型フェアレディZに乗り換える。

その悪魔のZは、乗り手を選ぶかのように次々と事故を重ねていった、まるで悪魔のようなクルマだったが、ななこは気にせずむしろ喜ぶように飛びついた。

その悪魔のZとの相性はかなり良く、アキオを思わせるような走りをしていく。

ファルコン

搭乗車両

(前) ランサーエボリューション? / (現) SKYLINE GT-R Vspec? Nul

作中にまさかの登場で現れた作者である私。過去には黄色のエボに乗っていたが、GT-Rに乗り直し、そこから連戦連勝を重ねた伝説のRとも呼ばれている男でもある。

かがみが以前乗っていたR34と全く同じもので色も同じ。しかし馬力はMAX825馬力というとてもないパワーを出した。その圧倒的なパワーを得たGT-Rに勝る者は、恐らく特別な存在のみしか勝てない。だが馬力の高さ故スピンしやすくなる事もしばしばあるそうだ。

：以上が主な走り屋とクルマ達である。走り屋とクルマを次々と紹介していつては読者様も疲労が溜まるのでは無いかと思い、この程度に止まらせた。

様々なクルマが登場しているが、これからいろいろな種類のクルマが登場する予定だ。ぜひ読者の皆様にはこれからも楽しみに読んでいただいたい。では、番外編はこれにて終了…。

ACT. 18 蓋の無い側溝（前書き）

さて、まず初めに首都高ファンの皆さん、誠にすみません：（泣）
この回ではやや首都高に対しての作者の意見が述べられています。

しかし実のところ、決して全てが嫌いな訳ではございません：（汗）
今回は蓋の無い側溝の攻略法をこなたとかがみが考え、そしてバトルの際に使った溝またぎというテクニク：もう完全に頭文字D寄りになってしまってますね：（^―^；）

今回はいいよ長尾最終戦：かがみのR35とみさお、あやののエボ？とのバトルになります。果たしてどんなバトルになるのか：お楽しみに！

ACT. 18 蓋の無い側溝

こなた達は今、神奈川県にある長尾峠に来ている。チーム遠征第二回目のためだ。そして先ほど第一戦目：つかさの白いFDとエボ？の男とのバトルが終わったばかりである。

「あのさ、かがみ…ちょっと良い？」

「ん？さっきから何よ？何か気になる事でもあるの？」

「うん、昼くらいに走ってた時にちょっと思ったんだけど……」

そう言ってこなたはかがみをどこかに連れて行く。つかさ達にはちよつと休憩がてらコースの見回りに行ってくると伝えたそうだが。

そして、こなたはある場所で止まる。そこは……。

「…こなた、これがどうかしたの？」

「うーん…何かここ使えそうなんだよねえ…」

「え？この…蓋の無い側溝が？」

こなたとかがみが居るのは、第三セクション〜第四セクションの中間盤辺りまで続く蓋の無い側溝がある場所だ。こなたはこの蓋の無い側溝をどう使うつもりでいるのだろうか？

「うーん…だいたい分かるんだけど私のあたまじゃ詳しくは分からないよ…」

「まあ、あんたのそのオタク脳じゃね」

かがみは笑ってこなたをからかおうとする。実際オタク脳はまだ変わっていないだろうが…。

「むう…人が真剣に考えてるって言うのに…まあまだまだ私はオタクとして生きていくけどね」

「あんたさあ…って、話が少し逸れてるわよ！」

かがみは今度は打って変わってツツコミに回った。しかしこなたはニヤけている。そんなこなたをかがみは無視し、話を続けさせる。

「…で、こなた、これをどう使うつもりなのよ？」

「うーん…そうだねえ…かがみ、その…車の荷重移動だっけ？それについてちょっと分かんないんだ…だから教えて」

「はあ？荷重移動ってのはね…普通は車のエンジンは前にあるじゃない？その関係で、普通の時は前、後ろ両方とも同じくらいの重さが掛かってんのよ。それで、例えばコーナーに入る時にブレーキを踏むじゃない？そういう時は、前に重さが掛かるようになってるのよ」

「うん。それで、アクセル踏んだ時は？」

かがみはこなたに聞かれ、説明を続ける。

「アクセル踏んだ時ってのは…加速時の事ね。加速時は後ろに重さ

が掛かるようになってるわ。でもそれがどうしたのよ？」

「いや…何となく気づかない？」

「え？蓋の無い側溝があって、あんたが荷重移動の事を聞いてきて…なるほどね、分かったわ。あんたよく思いついたわね」

かがみはどこか嬉しそうな表情をしていた。どうやら荷重移動のテクニクがカギとなるらしい。蓋の無い側溝をどう使うのか…それはこなたとかがみしか知らない。

「うん…走ってた時にこれ使えるなあって思ってたんだ」

「…流石はこなたね。あんた本当そういうところだけは賢いんだから…溝落とすと荷重移動のテクニクが重要だわね、この蓋の無い側溝は…」

「そういうところだけってのは失礼じゃないかな？まあかがみんから教えてもらってここまで強くなったけど…でも、無理はしないようにするよ」

「ええ…これをあんたがどう使うか…楽しみだわ」

こなたとかがみはあの蓋の無い側溝の攻略法を話し終わり、つかさ達のところに戻る。

「あ、お姉ちゃん、こなちゃん、結構遅かったね」

「あ…ま、まあいろいろとね…」

「私達二人はちょっとねえ、夜のお約束のアレをしてたんだよ」
♪

「何だってえ！？ちびっ子！柊は私のモンだ！！」

「ダメだよみさきちゃん、かがみんは私の嫁だからねえ」♪

…つかさ始めその他こなたやみさおを知る者は『こいつら本当に高校生
校生の時から変わってねえな…』と思うのであった。

「あんた達…そんなに私に殺られたい訳？」

「だってかがみんは私の嫁でしょ？」

「いや、柊は私たちのモンだ！！」

「…あー、はいはい…好い加減にしないと本気で殴るわよ！！」

かがみは拳を握り、こなたとみさおを追いかけ回し始めた。だがこ
なたやみさおは走って逃げた。

…そうやってかがみが追いかけてはこなたとみさおが逃げ、また追
いかけては逃げを繰り返しながらどれくらい経っただろうか、三人
ともバテて地面に膝をついていた。

「か、かがみん…ちよつとホントにヤバイから終わりにしよう…
…」

「私も終わりにさせてくれ…柊冷たいぜ……」

「はあ……はあ……全く…あんた達のせいで無駄な体力使っちゃったじゃないのよ……」

三人は息を整える。そんな三人を苦笑しながら見る人間が…つかさやエボ？の男、エボ？の男だ。

「お姉ちゃん達……」

「おいおい…こんなんでよく走り屋になれたもんだな……」

「しかもハチロクのドライバーはこれからバトルするって言うのにな……」

つかさ達は少しの間黙り込んだ。まあ言葉が見つからないのだろう。だが一人笑っていた人物が…あやのだ。

「ふふ…それでこそみさちゃん達だね」

「あやの……」

「峯岸！私は前とは違うから！！」

みさおは少々嬉しそうに、かがみは否定していたが、こなたは……。

「…てかさ、バトルしないといけないから早くやろうよ」

こなたは立ち上がり、ハチロクの足まわりを見たりなど軽い点検をする。かがみやみさおもそれに続き立ち上がった。

「はあ…本当にあんた達には呆れるわ。さっさとバトルしましょう」

「うん、そだね。ハチロクの足まわりは大丈夫だよ」

「そう、なら…えっと…エボ？を使うドライバーさん、準備お願いします」

「やっとバトルか…よし、負けねえぜ」

「こっちも負けないよ！バトルよろしくね！」

こなたはエボ？の男と軽い挨拶を交わしそれぞれ車に乗り込む。そして二人ともエンジンを掛け、鳴らす。

「こなた、第三セクションから第四セクション辺りを気をつけてね」

「分かったよ、かがみん」

こなたは頷いた。そしてかがみはこなたの耳元で話す。

「良い？あの蓋の無い側溝の攻略がカギだからね」

「うん…荷重移動のテクニクの応用だね。バッチリやってやるよ」

こなたは自信に満ちた表情で答えた。一方、エボ？の男は…。

「相手は間違いなく何かし掛けてきやがる…地元の走り屋だからって油断はするなよ」

「分かってるさ…だが、俺のエボ？が負ける訳にはいかねえ…んじや、やってくるぜ」

エボ？の男は親指を立て、答えた。

そしてバトルが始まる。長尾第二戦、ダウンヒルバトルはこなたのハチロク、FT86V。Sエボ？だ。カウントはエボ？の男が取る事に。

「それじゃあ、スタート5秒前！

4…3…2…1…」

こなたとエボ？の男はカウントされている間、アクセルを踏みレッドゾーンまで針を上げてエンジンを吹かしていた。唸るエンジン音…長尾下りの対決が、今始まろうとしていた…。

そして、エボ？の男の「スタート！」という合図と共に両者ともサイドブレーキを引き、アクセルを踏んで車を発進させる。甲高いスキール音が鳴り響き、前に出たのはこなたのハチロクである。

「さてと…行こっか、ハチロク」

こなたは徐々にアクセルを踏んでいき、速度を上げていく。だがエボ？の男も離されずに付いていく。

「ま、最初は様子見だな」

エボ？の男はハチロクの走りを後ろから見る事に。こなたはエボ？との距離を離すためにアクセルを踏んで加速させていく。

「しかし、突っ込みがヤバイな、このハチロクは」

確かに、こなたはコーナーへの突っ込みが上手い。ブレーキングのタイミングもドンピシャだ。コーナーでこなたのハチロクを抜くには至難の業と言える。

だがハチロクの弱みは直線での加速だ。FT86として現代に蘇ったとしてもそれは弱点として表れている。FT86はスバルとの共同開発で、水平対向エンジンを搭載しているものの、やはり三菱が保有するランサーエボリューションシリーズには勝てない。

ランサーエボリューションには、シリーズ全てを通して電気制御による速さを得ている。そのため、誰が乗っても速い車として評価されている。

だが走り屋によっては『電気制御のおかげで速い。そのドライバー自身の腕は低い』などと思っている者も居るだとか。

「相手はピッタリ食いついていくみたいだね：こっちも負けてられないよ」

こなたは後ろのエボに食いつかれている。流石は地元の走り屋と言ったところだろうか。だがラインは崩れてはいなかった。

「相手は落ち着いて走っているみたいだな。プレッシャーを与えられながらも自分の走りが出来る奴ってのはなかなか居ねえ：だが次

にはもう抜かせてもらうぜ！」

エボ？の男はそう言うと、アウトから抜きに行こうとした。だがこなたもアウトに移動させなかなか抜かせない。

そしてコーナーでエボ？を少し引き離し、こなたにはやや余裕が生まれた。

「ふう…危ない危ない…」

こなたは冷汗をかいていた。バトルする時の妙な緊張感からだろう。或いはエボ？が追い抜こうとしてそれを必死でブロックした時のプレッシャーか……。

だが安心ばかりしては居られなかった。エボ？が再びこなたのハチロクに張り付いてきた。

「さあ…追い抜けるもんなら追い抜いてみるんだね！なんて言ってみたり」

こなたはやや挑発じみた言動をする。そうするとエボ？はアウト側からあっさりこなたを抜き去った。

だがこなたはこれを狙っていたのかも知れない。表情が変わった。

「さて…もう少ししたら行こう」

こなたはハンドルを強く握り、エボ？の男に付いていくように走っていく。少々離されているが…。

「まだまだ、峠のバトルでは何が起こるか分からないから諦めたらダメだね」

確かに、峠でのバトルではこういった事が起こるかは分からない。難度の高い峠ならば油断はより一層禁物だ。

峠のバトルは首都高のバトルとは違い、純粹にドライバー自身のドラテク：ドライビングテクニクが問われる事が殆どだ。首都高のバトルではほぼ平地な状態が続いている。クルマの性能さえ良ければ、よほど下手では無い限り勝てる可能性もある。

峠Ⅱドラテク、首都高Ⅱドレスアップテクニク（略してドレテクと言ったところか？）の図式がここに完成している。

「：やっぱりこの感じ：峠のバトルの方が楽しい！」

こなたはそう言い、この妙な緊張感を楽しむようになった。峠では危険も伴うが、走り屋にとってはそれが良いだとか。そして峠のバトルで慣れた者が首都高でバトルするとつまらない、という走り屋も中には居る。

『ゼロヨン』と言った競技があるが、それも首都高など、峠以外の公道で行われる事が多い。本当にほぼクルマの性能だけで勝負するこの首都高でのバトルは、作者である私も少しだが拒否してしまう事もある。

さて、こなたは今エボ？の男との距離が少し空いてしまったまま、第二セクション辺りを走り終え現在は第三セクション中盤辺りを走っている。

：第三セクションと言えば、蓋の無い側溝がある場所である。そして第四セクションにもそれはある。この二つのセクションで勝負を決める事になる。

「：ここではまだ冷静に、相手の走りを見て、そして次で抜こう」と

こなたは第四セクションで仕掛ける事にした。賢明な判断である。早々と手の内を見せてしまつては相手にすぐ攻略されてしまう…出来るだけ手の内を隠し、相手の走りのパターンを充分見たうえで、いつ仕掛けるかが勝敗の分け目にもなりうる。

「チツ…ハチロクのドライバー、何してやがる…仕掛けるなら早く仕掛けるよ」

エボ？の男はこなたがなかなか仕掛けてこない事に少しの苛立ちを感じていた。そのせいか少し動きが崩れる。

「くっ…危ねえな、エボを壁にぶついたりしたら板金屋持つていく金が発生しちまう…落ち着くんだ、俺…」

「エボの動きがおかしくなってるね…次で勝負を決めるよ！」

こなたは少々エボの事を心配しつつも第四セクション中盤辺りにてあのテクニクを仕掛けるためにタイヤを残す。

そして二人はいよいよ運命の第四セクションに入る。

「奴は絶対仕掛けてくる…インは開けねえぞ！」

エボ？の男はインを意識し、そこを空けないように車を動かした。これでハチロクが抜くスペースは無い…はずである。

そして、二人が走り続ける事数分…ついに蓋の無い側溝があるゾーンへと来る。

「ふっ…インは空いてない、アウトもハチロクが抜けるスペースは無い…この勝負、貰った!!」

エボ?の男は勝利を確信した。その時だった。

「来た…ここで勝負を決める!!」

こなたはアクセルを蓋の無い側溝の方向に移動させながらアクセルを最大に踏み込んでいく。荷重は完全に後ろに移った。その動きを見てエボ?の男は…。

「おい…何してやがるんだ! 追い抜くスペースは無いはず…ハチロクのドライバー、一体どこを走ってやがるんだよ!」

エボ?の男は衝突を避けるためにスピードを落としてしまう。そしてこなたのハチロクは…『ガキイン!』という音を出し、蓋の無い側溝のその先の場所にフロントタイヤが乗っていた。そして二台並んだ状態のまま、二人は走り続ける。

「クソッ! 一体どうなってる!? 何が起きてやがるんだ!!」

「これが…私の作戦だよ!!」

こなたは巧みにハンドルを操り、アクセルワークも完璧にして、荷重移動のテクニックを応用していた。そしてこなたのハチロクが半分以上出たところで、再び荷重を後ろに移動させ、前に出る。その様子を見たエボ?の男は…。

「なっ…ふっ…そこを使ってくるとはな…やられたぜ…流石はハチロクだな…」

エボ？の男はアクセルから足を離す。そのままハチロクがゴールし、バトルはこなたの勝利で終わる。エボ？の男がこなたと同じテクニクを何故使わなかったのかと言うと、過去にそのテクニクを使った際にでない車をダメにしてしまったらしくやる勇気が無かったとか。

なお以前はホンダのビートに乗っていた。

しばらくして、二人は車から降りる。

「エボ？のドライバーさん、楽しかったよ」

「そうか：俺も久々に良いバトルが出来た。お前には感謝だな」

エボ？の男はこなたと握手を交わした。そしてその後になんか一言を。

「しかし、あそこをよく上手く使えたよな」

「ま、まあ私も正直不安があったけどね：」

「あそこはな：前に俺の乗っていたビートのタイヤが落輪して危うく命を落とすという危険な目にあった場所だ：」

「そ、そうだったんだ：：」

二人の間に気難しい空気が流れる。その空気を断ち切るかのように

かがみが口を開く。

「あそこはね…荷重移動のテクニックが重要なのよ」

「んな事は分かっている…当時はドラテクもそんなに上手くは無かったんだ、仕方ない」

「そう…それにしても、ビートに乗っていたなんてね…ダウンヒルでは相当自信があったみたいわね」

「まあな。俺もそのハチロクのドライバーと同じ、ダウンヒラーだった。今じゃエボのおかげで上りと下り、両方でバトル出来るようになったが…」

エボ？の男は話を続けようとしたが、途中で止めた。

「おっと…余計な話をしてしまうところだった。ハチロクのドライバー、俺の負けだ。見事な走りだったぞ」

「うん…こっちもありがとう。キミも凄かったよ。エボってやっぱ凄いね、そのドライバーも…」

「ふっ…また走る機会があれば良いな」

「うん！その時はまたよろしくね！」

こなたとエボ？の男は再び固い握手を交わした。そして第三戦…上りと下り複合のバトルである。パイロンが折り返し地点に置かれ、準備は整う。

「さてと…日下部、峰岸…あんた達がどんな走りを見せるのか…正々堂々勝負よ!」

「もちろんだぜ〜! 柊相手でも容赦しねっぜ〜!!」

「柊ちゃん、良い勝負をしようね」

かがみとみさお、あやのは互いにライバルを意識しているかのように激しく睨み合う。特にかがみの場合はGTRの名に恥じない走りをする気合が入っている。

「しかし、あんた達がエボに乗るとは本当に意外だわ。日下部だけなら分かる気もするけど」

「な! 柊、それはどういう意味だってヴぁ!」

「別にどういう意味でも無いわよ。そんな事よりさっさとバトルしましょう」

かがみは非常に落ち着いた様子でみさおに話し、愛車の黒いR35をスタート地点に動かす。

それに次いでみさお達も鋼のエボ?を移動させ、二代並んだ。

「つかさ、いよいよかがみんとみさきち達のバトルだね」

「そうだねー。お姉ちゃんならきつと勝てるよね」

「まあかがみんはめっちゃパワーが高いR35に乗ってるからね。でもみさきちのエボもなかなかやるかもねえ…」

「あう…どっちが勝つんだろう…ちょっと心配だよ……」

つかさは勝敗の行方を心配した。するとかがみが窓ガラスを下にスライドさせ、窓越しに一言。

「つかさ、心配しなくても大丈夫。私は絶対負けないわ。この子の前で誓ったんだから…」

「お姉ちゃん…うん、頑張ってね」

「分かったわ」

かがみはそう言い残すと、また窓ガラスをスライドさせ、元に戻した。

こうして、長尾第二戦…こなたのハチロクとエボ？の男とのバトルは、見事こなたの勝利で終わった。

次はいよいよかがみの黒いR35とみさお達のエボ？とのバトルが始まる。

…このバトルが、かなり激しいバトルになる事はまだ誰も考えつかなかったが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0456t/>

らき☆すた～公道最速伝説～

2011年10月18日09時01分発行